





うつせみのあなたに
断章編・その2



星野廉



目次

レトリック詞集	
Ⅰ	3
Ⅱ	8
Ⅲ	14
Ⅳ	21
Ⅴ	28
付録 レトリックだけでなりたっているような文章	
*	43
引用の織物	
Ⅰ	63
Ⅱ	70
Ⅲ	85
Ⅳ	97
Ⅴ	106
付録 人のつくるものは人に似ている	
*	117
付録 人がつくったものに人が似てくる	
*	135
付録 人のつくるものは人に似ている/人のつくるものに人は似ていく	
*	151

レトリック詞集

I

似たような板を持った人たちが、みんな似たような仕草をしている。その仕草を繰り返している。真似し合っているように。そっくり。



そっくりなところがそっくりなのである。そっくりな点がそっくりにそっくりと言うべきか。スマホという大量生産された製品のシンクロ振りに、それを使う人の身振りのシンクロが重なる。つまり、シンクロにシンクロする。



誰もがスマホの画面に映った「そっくりなもの」が「そっくりなもの」などではなく「そのものである」ことを望んでいるし、無意識のうちにそうだと信じているにちがいない。問題があるとすれば、それは信じていることではなく、もっともっと次を望んでいることかもしれない。無いものを望む限り、望みも限りも無い。



写真に映った映像で興奮するのは、想像力のたくましさ。人は本物を相手にしなくても欲情できるという意味。まさか、インクや紙や画素や液晶に欲情しているのではないのは確かだろう。人の世にいろんなフェチがあるとはいえ。



人はべらべらの紙に印刷された文字でも興奮する。これは学習の成果である。文字を何度も何度も見てなぞり写すことによって、真似て学ばないと、そういう楽しみは味わえない。したがって、ワンコやおさるさんは、紙の上の文字と現実を混同しない。

○

仮象、化象、化粧。うわべだけ、ぺらぺら。薄いけど厚い。浅いけど深い。小さいけど大きい。短いけど長い。平面だけど立体。静止しているけど動いている。仮の物からなる世界。ぜんぶ仮のもの、ぜんぶ借りもの。

○

偽物、似たもの、似せたものに満ち満ちた世界。情報とは、知識とは、事実とは、複製として存在する以上、「似せたもの」であり「似たもの」——似ているだけだから、実物や本物やソースつまり起源そのものではなく別物であるのは確か——であるが、ひょっとすると偽物かもしれない。

○

世界は、化け物だらけ、化象だらけ。化けた者が化けた物を相手にしてお化けごっこをしている。似せた者が似せた物を相手にそっくりショーをしている。似せ者が似せ者を相手に偽物を売りつけている。

○

びくびくひくひくびくびく。オノマトペはずっと入ってくる。音や文字が「何かに」「似ている」ではなく、単に「似ている」として入ってくるからではないか。「何か」との異なりや事なりや言なりとして無理に押し入ってくるのではない。本物のない複製の複製や、起源のない引用の引用はずっと入ってくる。

○

リアルであることに必ずしも実体は要らない。プラスチックでできた料理のサンプルを見ておなかが鳴ったりよだれが出る。文字からなる文章に、あれが出てくれば興奮する。液晶画面に映った画素の集まりからなる映像に、あれが出てくれば欲情する。身も蓋もない話。ワンコやおさるさんは、紙の上の文字と現実を混同しない。

○

リアルであることに必ずしも実体は要らない。実物や本物も起源（原型・元祖・出典）も要らない。複製や、複製の複製や、引用や、引用の引用が身のまわりにうようよしている。大量生産された製品、楽曲、料理、絵画、写真、映画、放送、小説、文書、画像、動画。

○

大量生産された製品、楽曲、料理、絵画、写真、映画、放送、小説、文書、画像、動画。どれもが、人にとってはリアルな「物」であり、複製と引用はそれ自体で完結した「リアル」なのだ。こうなっているのは、人が「似ている」と「そっくり」の世界、つまり印象の世界に住んでいるからにほかならない。

○

モナ・リザの現物を見たことがある人よりも、その複製を見たことのある人のほうが圧倒的に多い。こうした事態は「実物対複製」という単純な構図に収まりそうもない。実物はたったひとつであるのに対し、複製は複数あるいは無数にあるからだ。複製の複数性、無数性。作者および作品が有名であればあるほど、そうなる。

○

有名は無数であり、無名は有数であるか、たったひとつなのである。しかも、複製は一樣ではなく、さまざまなずれをともなって存在する。あなたの見たモナ・リザと私の見たモナ・リザはきっと別物だろう。別の複製。異なる複製。

○

楽曲の複製であるレコードやDVDやCDやその放送やネット上での配信でも、複製は多様をきわめている。文学作品でも、多種多様なかたち（雑誌での掲載、単行本、文庫本、電子書籍、翻訳）での複製での読書がおこなわれている。いまや鑑賞と読書とは、複製の鑑賞であり複製の読書なのである。

○

小説の読書で活字やフォントやレイアウトが変わると別の作品に感じられることがあ

る。翻訳書とその原著も「似ている」別物。改訳が出たり、訳者が変われば、さらに「似ている」別物が増える。

○

鑑賞の多くが、複数の複製の鑑賞であったり、別物の鑑賞であることは忘れられがち
なようだが、ひょっとすると誰もが忘れたい事実なのかもしれない。

○

インターネット上では、複数どころか無数のモナ・リザを鑑賞できる。「これはモナ・
リザなんだ」と言葉で自分に言い聞かせ決めつけて、頭というか観念で見ると「同じ」な
のだが、じっさいには「似ている」あるいは「そっくり」なだけ。それでも、ふつうは
「似ている」とか「そっくり」というふうに見ないし言わないし聞かないのは興ざめする
からだ。

○

自力では「同じ」か「同一」なのか「そっくり」なのかを確認も検証もできない自分
を、人は認めたがらない。人間（ホモ・サピエンス）としてのプライドが許さないから
だ。ホモ・サピエンスという言葉は重い。人には荷が重すぎるのかもしれない。この自
称は自照ではなく自傷なのかもしれない。

○

「同じ」というか「同一」と言ってもいい、モナ・リザの鑑賞法がある。名前で鑑賞す
る、つまり名前という言葉を見るのだ。「モナ・リザ」という作品名のこと。

○

固有名詞、なかでも書かれた文字としての名前は最強の複製であり、「似ている」ど
ころかまったく「同じ」、「同一」なのである。「私はモナ・リザを見た」と言っても嘘には
ならない（「モナ・リザ」という文字を見たのだから）。さすがに、「モナ・リザの現物（実
物）を見た」（たとえ「モナリザ」という文字の現物（実物）という意味であっても）と
まで言うのは気がひけるかもしれない。

○

固有名詞、とくに人名は最強で最小最短最軽の引用である。人であれば、誰もが飛びつく。

○

名前と名詞の力は強い。誰でも名前と名詞にころりと参る。しかも、楽々複製ができる。モナ・リザ、モナ・リザ、モナ・リザ、モナ・リザ、モナ・リザ……。いとも簡単に引用もできる。名前を知っているだけで褒められることが多々ある。知ったかぶりもし放題。

○

モナ・リザ、モナ・リザ、モナ・リザ、モナ・リザ、モナ・リザ……。固有名詞が最強で最小最短最軽の引用であることは、実に有難い事実。ただし、モナ・リザ、Mona Lisa、La Gioconda、La Joconde、蒙娜丽莎、蒙娜丽莎、……というバリエーションがあることを忘れてはならない。「モナ・リザ」は、文字どおりの実物でも現物でもなかったという落ち。

II

絵は芸術作品の中では「たったひとつ感」がきわめて強い。複数の「同一の作品」が存在する版画や浮世絵とは対照的に基本的にたった一枚しかない。したがって、絵画は複製で鑑賞するのが一般的である。

「モナ・リザ、知ってる?」「知ってる、知ってる、世界でいちばん有名な絵なんですよ?」という場合には、「知っている」は複製を見て知っているという意味だろう。つまり、複製での鑑賞を偽物での鑑賞だと非難する人はごく少数だと思われる。



楽曲は、実際の演奏で鑑賞するのが理想だろう。楽器と肉声を拡声器など機械をとおさずに自分の耳で聞き、耳で聞くだけでなくその場の空気を吸いにおいを嗅ぎ、その場のざわめきを含む雑音（ノイズ）まで体験しなくては鑑賞したと言えないなんて人もいる。

また、演奏や歌唱は不動ではなく、つねにブレや揺らぎの中であって、そのパフォーマンスは毎回違ったものになるという考え方も広く存在するようだ。絵画や小説の鑑賞とは大きく異なる点である。



アナログであれ、デジタルであれ、ハイレゾであれ、ネット上で配信されたものであれ、CDやDVDを再生したものであれ、大型スピーカーで聞くのであれ、イヤホンで聞くのであれ、複製されたり加工された、つまり機械を用いて作られた音による演奏を聞くのが、楽曲の一般的な鑑賞だろう。

楽曲の複製での鑑賞を偽物での鑑賞だと非難する人はごく少数だと思われる。

○

「小説は初版本でなければ本物ではない」、「文庫版より単行本、単行本よりも文芸誌での初出でしょ」、「電子本なんてとんでもない。あと印刷された本をコピーしたものネット上で小説を読むなんてねえ——」、「いやいや、そんなものは全部が複製であり偽物であって、書き込みとかが分かる生原稿で読むのが真の文学鑑賞なのだ」

○

私は言葉を広く取っている。話し言葉（音声）と書き言葉（文字）だけでなく、表情や身振りといった視覚言語も言葉だと考えている。このうち、いちばん不思議だし気になってならないのが、文字なのである。

○

話し言葉（音声）と表情と身振りは発せられると同時に消えていく。どんどん消えていくため、受け手はつぎつぎと現れるものを聞いたり見たりして追いかけていかないと理解できない。

追いかけてこないのである。しかも現れる順に受けとっていく必要があって面倒だし、いらいらさせることもある。話し言葉と表情と身振りを受けとるのがもどかしいのは、時間に制約され、時間的に拘束されるからだ。

○

文字だけが残る。消さない限りしつこく居続ける。いつまでも残っているので、時間に拘束されない。残っている限りは、いつでも気の向いたときに読める。

しかも、はしよることができる。ざっと読んだり、好きな箇所だけ読んだり、面倒なら見るだけで済ますことができる。これがおおかたの「文字を読む」であり「文字を見る」なのである。

現在は、文字はますます読まれなくなってきている。見る対象になっているのだ。文字こそ、忙しい現代人にはぴったりの表現手段ではないだろうか。

○

端末の画面に映っている、この記事の文字は画素の集まりらしい。印刷物であれば文字はインクの染みである。つまり、複製できる。しかも簡単に。文字においては無数のコピー（複製）が可能なのだ。

○

文字は、複写、印刷、筆写され、さらには文書や映像という形でデジタルデータ化されている。文字には抽象的な側面があるために複製が可能なのである。抽象的な面とは、文字の形を指す。

文字という具象の抽象的な面は「写す」（複製する）ことで「映る」（再生される）。「移す」（物理的に移動させること）の代償行為なのである。持って行けないから、その代わりに写したり映す。

○

現在ではありとあらゆることが文字になっている。文字は無限に複製できる。しかも、投稿と複製と拡散と保存がほぼ同時にかつ瞬時に起きている。インターネットのことである。

腰を抜かしでも罰が当たらないほど驚くべきことであるが、現在の人たちは腰を抜かす暇がないほど忙しい。

○

文字は複製でしか存在できないと言っても言いすぎではない。文字のオリジナル、つまり現物とか実物とか本物というのは、よく考えると、ナンセンスなのである。文字は複製であってなんぼ。あっさりと書いたが、私にはこれが不思議でならない。

○

文字においては、人は文字の具象より抽象的な面を活用している。書道、カリグラフィ、文字や書体のデザインを除き、文字においてはオリジナリティが失われている。失念されていると言うべきかもしれない。

文字の複製や引用は、同じ、つまりほぼ同一になる。それが文字の抽象性なのである。抽象だから複製をしても偽物（似せたもの）どころか同じという理屈になる。驚くべき性質であり、私は考えるたびに腰を抜かしている。

○

小説のオリジナリティ云々というのは、それが盗作とか剽窃であるかどうかというのとは、別の次元の話になる。

おそらく作者を除く（ひょっとすると作者も含んで）誰もが複製としての小説を手にし、複製である、いや複製でしかありえない（実物にも本物にも起源にもたどりつけない）文字からなる小説を読んでいる。

○

小説の偽物っぽさなんて言うこと自体がナンセンスであり戯言なのである。実物にも起源にもたどりつけない小説は複製で読むものだからだ。それ以外の読み方はまずない。現実的ではないという意味。

○

小説こそが偽物っぽくない偽物なのである。小説に限らず、文字で書かれたものであればどんなジャンルの文書でも、偽物っぽくない偽物ということになる。そもそも小説を成り立たせている文字が複製であり、複製の複製であるからだ。これを、本物（実物）なき複製とか起源なき引用と言い換えても事態は変わらないと思う。

○

誰が（AIなどの機械もふくむ）、いつどこで何を用いて書いても、あるいは入力して

も「雨が降った。」は「雨が降った。」で、同じなのである。あっさり書いたが、私にはこれが不思議でならない。考えるたびに腰を抜かしている。どう受けとめていいのかわからないのである。

○

念押しで言うが、文書における偽物とは複製という意味ではなく、その内容の真偽（そんなものがあるとして）であるとか、盗作や剽窃や改変や改ざんという別の次元の話になる。文字というよりも、文字列とか文章としてのレベルの話という意味だ。

○

「吾輩はネコである。名前はまだにゃい。」——このような文章で始まる夏目漱石作『吾輩は猫である』があるなら、それは偽物である公算が大きい。複製ではなく改ざんされた偽物だ。

こうした改ざんされた（数字や文言が書き換えられた）文書が公文書に存在する（黒塗りも改ざん）。改ざんは報道にもある。これこそが、現在もっともゆゆしい事態ではないだろうか。意図的におこなわれているからである。

○

現在は、本物と偽物と別物、本物と複製と別物、偽物と複製と別物、複製とその複製と別物、および起源と引用、引用とその引用、引用の引用とそのまた引用、の境がきわめて希薄になっている。本物（実物）には届かず触れられず、起源をたどりさかのぼる術がないのだから当然だろう。

似せもの、似せたもの、似たもの、偽物、贋物、別物という古典的な線引きが懐かしい。

○

あらゆるものが、いまここにおいては本物（実物）のない複製や起源のない引用として立ちあらわれているのではないか。人はそういうものにしか出会えていないのではないか。このところ、そんなふうに感じられてならない。

本物っぽい、偽物っぽい。要するに、っぽいのである。本物でも偽物でもなく、人は「っぽい」と出会っている。

III

「○○っぽさ」、「○○らしさ」、「○○のようなもの」、「○○」という言葉が指すものの、「○○」という言葉で名指されるもの——このように○○にたどり着けないために、○○を回避したかに見える一連の言い回しがある。

上の例は「っぽい」順に並べてある。逆に言うと、後ろほど往生際が悪いのである。○○を避けた振りをして、○○の実体を信じているかのように見える。本音が出ているという意味では正直なのだろう。

○

何度もなんども「なぞる」を繰り返すとどうなるか。何をなぞっているのかが分からなくなりそう。とにかくなぞっている、なんとなくなぞっている。対象がなくなる、起源がなくなる、手本がなくなる。ないない尽くし。「なぞる」は鉛筆型消しゴム。

起源のない引用の引用、本物や実物のない複製の複製。起源のない反復。手本のない模倣。ないない尽くし。学習、知識、情報のことではないか。何よりも、その根っこにある言葉のことではないだろうか。

○

「モナ・リザ、知ってる?」「知ってる、知ってる、世界でいちばん有名な絵なんですよ?」という場合には、「知っている」は複製を見て知っているという意味だろう。つまり、複製での鑑賞を偽物での鑑賞だと非難する人はごく少数だと思われる。

この場合に、モナ・リザを言葉だけで知っているという状況は十分にありえる。モナ・リザに限らず、どんな作品であれ、ひいてはどんな事物であれ、それが名前として口にはぼっているさいには、その名前がその名前が「指し示す」(往生際の悪い言い回しの好

例であり、指し示すものがあるという前提に立っている) ものとの出会いを保証していない。

○

鏡の向こうに入っていく。笑っていた猫の笑いだけが残っている。ルイス・キャロルの書いた本に、そんな不思議な話がある。話だから、言葉でなりたっているのだが、それが読む人や聞く人の中にイメージを生む。現実ではありえない事が、言葉の世界ではありうる言としてある。

異なる世界、言なる世界、事なる世界。現界、言界、幻界。現実、言葉、イメージ。イメージするしかないようだ。イメージをイメージする。

言葉とは、「あるもの」の代わりをしている「ないもの」、同時に「ないもの」の代わりをしている「あるもの」、「ある」振りをしている「ない」もの、同時に「ない」振りをしている「ある」もの。

ルイス・キャロルは言葉が、「ない」を「ある」、「ある」を「ない」ように思わせる錯覚製造装置であることだけを意識しながら創作活動をしていたと私は勝手に理解している。

○

「モナ・リザ、知ってる?」「知ってる、知ってる、世界でいちばん有名な絵なんですよ?」「そうだよ、よく知ってるね、偉い偉い」

モナ・リザという固有名詞は実物(本物)のない複製であり、起源のない引用として機能している。機能している、つまり働いているという点が大切。人がどのようにその言葉を用いているか、そのありようが大切なのである。言葉の意味や定義や語義にこだわることは、言葉を固定化を目指すだけであり、その動きとありようをとらえられない。

○

なにしろ、人は「○△X」という言葉をつくって、その次に「○△Xとは何か?」と問

い、思い悩む生物なのである。考えれば考えるほど、自分に当てはまる。いまもやっている。

○

「モナ・リザ、知ってる?」「知ってる、知ってる、世界でいちばん有名な絵なんですよ?」「そうだよ、よく知ってるね、偉い偉い」

このありふれた状況に吐き気を催すほどの嫌悪感と絶望感をいただいていたのが、ギュスターヴ・フローベール、とりわけ『紋切型辞典』と『ブヴァールとペキュシェ』を書いたフローベールだったと私は勝手に理解している。

○

オノマトペに限らず、言葉がすっと入ってきたり、すっと出ていくとき、その言葉は「何かに似ている」というよりも「単に似ている」として入ってくるのではないか。そんな気がする。

「すっと入ってくる」「すっと出ていく」がポイント。意味を考えたり意識したりはしていない状態。その時点では意味なんてない。「似ている」だけがある感じ。「何が」も「何に」もない、ただ「似ている」。

○

「○○っぽさ」、「○○らしさ」、「○○のようなもの」、「○○」という言葉が指すもの、「○○」という言葉で名指されるもの——どれもがいわゆる名詞である。

名詞は「ない」を「ある」に見せるトリック。それだけでなく、「ある」の固定を目指すトリック。ここでやっているのはレトリック。

○

動詞は、自然の状態であり常態ではないだろうか。名詞に相当するものを自然界で見

つけるのは難しいが、世界と宇宙は動詞的なものに満ちている気がする。動詞も名づけられたものではあるが、動きや様態に注目している点で、動詞の向いている方向は名詞の抽象性とは異なる気がする。

○

名詞的なものはうつり、動詞的なものはつたわる。

○

名詞的なものがうつるときには、うつる前のものとうつった後もの間の対応が重視される。理想は一对一の対応であり、そのありえない理想を指向する。絵をイメージするといふ。絵はつたわると言うよりもうつる、とりわけ写る、そして映る。この過程で図柄が壊れてはいけない。

一方の動詞的なものがつたわるときには、重視されるのは動きであり、つたわる前後の位置的な対応関係は無視される。そもそも、つたわる前のものとつたわった後のものの区別さえ大きな意味を持たない。両者が別物であっても重視されないのである。振動や熱をイメージするといふだろう。

○

動きを記述するのが困難なのは、そもそも動きは固定化できるものではないからであり、「動いているもの」が「固定している」つまり「動いていない」なんて、無理がある。土台無理なのであり無理難題なのだ。

動きは自然の状態であり常態である気がする。とはいえ、人は「動き」を見たり知覚したとしても、それを言葉にする以外に他の人と「動き」について語りあうことはできない。

○

「モナ・リザ、知ってる?」「知ってる、知ってる、世界でいちばん有名な絵なんですよ?」「そうだよ、よく知ってるね、偉い偉い」

どんな言葉でも、フレーズでも、センテンスでもいい。オノマトペとか、感動詞とか、決まり文句とか、流行語に近い感じ。思考停止とか判断停止とまでは言わないまでも、無意識のうちに、条件反射的に、または生理現象のように、ずっと入ってきて、ずっと出ていく。

あらゆる言葉が決まり文句であり紋切り型ではないか。最近、よくそう思う。さもなければ、あんなにずっと入ったり出たりしないだろう。

○

固有名詞は引用であり複製であり反復であり模倣でもある。起源のない引用の引用、本物や実物のない複製の複製。起源のない反復。手本のない模倣。学習、知識、情報。

名前は最小最短最軽の引用、なかでも固有名詞、とくに人名は最強で最小最短最軽の引用。名前を唱える行為は、「それが指ししめす者や物や事に、なる・なりきる」儀式。威を借りる。既に何度もなぞられたものを借りるのですから楽なので嗜癖する。

「モナ・リザ、知ってる?」「知ってる、知ってる」「知ってるの? 偉い偉い」

○

「○○、知ってる?」「知ってる、知ってる」「知ってるの? 偉い偉い」

○○には固有名詞だけでなくあらゆる名詞が入る。人は○○には出会えない。

○

話が、議論が、噛み合っているようで噛み合っていない気がする。SNS上、会議、家族間、夫婦間、専門家同士、同業者同士、仲間同士、恋人同士、国家間、交渉の席、法廷。

オノマトペとか、感動詞とか、決まり文句とか、流行語に近い感じ。思考停止とか判断停止とまでは言わないまでも、無意識のうちに、条件反射的に、または生理現象のように、ずっと入ってきて、ずっと出ていく。

あらゆる言葉が決まり文句であり紋切り型ではないか。さもないければ、あんなにすつと入ったり出たりしないだろう。それでいて噛み合っていない気がする。気がするだけ。噛み合っているかどうかを確かめる術がない。

○

「○○っぽさ」、「○○らしさ」、「○○のようなもの」、「○○」という言葉が指すもの、「○○」という言葉で名指されるもの」

というよりも、むしろ

「○○っぽい」、「○○らしい」、「○○のような」、「○○」という言葉が指すみたいなの、「○○」という言葉で名指されるというか。

○

映画が静止画をコマ送りして、動いているという錯覚に頼っていることを思い出す。置き換えることによって、人は「代替りのもの（別物のこと）」を「実物や本物」としてとらえるのである。動いているものの代わりに動いていないもので済まして澄ましている。

「動いているものの代わりをしている動いていないもの」（いわば錯覚装置）を人は利用しているが、動詞もそのひとつだと考えられる。

○

あらゆるものが、いまここにおいては本物（実物）のない複製や起源のない引用として立ちあらわれているのではないか。人はそういうものにしか出会えていないのではないか。このところ、そんなふうに感じられてならない。

○○っぽい。要するに、っぽいのである。人は「○○」ではなく、「○○っぽさ」というよりも「っぽい」と出会っている。名詞に限らない。動詞もそうかもしれない。

「〇〇する」ではなく、むしろ「〇〇している」、いやそれよりも「〇〇しているっぽい」という感じで、そうになっているっぽい。

○

夢は「っぽい」に満ちている。これはイメージしやすい。

一方で、夢から覚めても、そこも「っぽい」に満ちているはずなのだが、これはイメージしにくい。ひょっとするとなぞって真似て学んだ言葉のせいかもしれない。現界は言葉であり、それが限界でもあるから。

なぞるは、なぞればなぞるほど、なぞっているものを見えなくするようだが、この状況は言葉をなぞって学んだ者にはイメージしにくいなぞなのかもしれない。なぞるは鉛筆型消しゴム。

IV

ルイス・キャロル。鏡の向こうに入っていく。笑っていた猫の笑いだけが残っている。そんな不思議な話をキャロルは書いた。話だから言葉から成りたっているのだが、それが読む人や聞く人の中にイメージを生む。



現実ではありえない事が、言葉の世界では言としてある。異なる世界、言なる世界、事なる世界。現界、言界、幻界。現実、言葉、イメージ。イメージするしかない。イメージをイメージする。



「イメージ」に当て字をしてみる。文字に文字をあてる、音に音をあてる。言の葉に言の葉を当てて重ねる。薄い葉に薄い葉を重ねてその模様を透かして見る。言葉は薄いもの、これが言葉についての私のイメージ。



イメージで、まっさきに頭に浮かぶのは夢路（ゆめじ）。夢を広辞苑で引くと、「「寝（い）の目」の意」なんてうれしい文字列が見える。寝目路（いめじ）と勝手にくっつけてみた。



夢路、夢路をたどる、イメージをたどる。いいイメージ。道が目浮かんで、その光景に染まっていく自分がある。

○

夢路といえば、夢路いとし喜味こいし（ゆめじいとしきみこいし）、往年の漫才コンビ。月丘夢路（つきおかゆめじ）も思いだす。幼いころに、月丘夢路と朝丘雪路（あさおかゆめじ）を混同した覚えがある。いま連想したのは竹久夢二（たけひさゆめじ）。

○

夢路、イメージ、image。image、imago。

○

イメージの原語である英語の「image」は、「真似たもの、似せたもの」という意味らしい。つまり、「にせもの＝偽もの＝偽物＝偽者＝贗物＝贗者」ということ。

○

イメージとは、辞書に載っている語義や、ぼくぜんと共有されている意味と違って、とても、テキトー、気まぐれ、大雑把、でまかせ的、頼りにならない、不安定なもの。矛盾しているし、論理的でもない。

○

imagine のアナグラムは enigma（英語で、謎、謎の人）＋ i（虚数単位）。image のアナグラムは、magie（仏語で魔法や魔術、マジと発音する）。「マジ」で、あやしい。

○

imagine のアナグラムは「imigane = 意味がねえ = 意味がない = 「意味がね、イマイチなのよ、の『意味がね』」、あるいは、「iminage = 意味なげ = 「意味なげに思ゆ or 覚ゆ、の『意味なげ』」とも読める。

○

イメージは私的で個人的なものであり、はかなく、淡く、薄い。ひらひら、ぴらぴら、

ぺらぺら——これが私のイメージするイメージのイメージ。

○

ぺらぺらしたもの、薄っぺらいもの——絵、写真、映画（銀幕に映す）、液晶画面、そこに映る映像。文字、本、雑誌・新聞、液晶画面に映る文書。こうしたぺらぺらであったり、厚みを欠いた表面に、いろいろな情報がのっかっている。印刷されていたり、映しだされている。

○

現在の世界は、薄っぺらいものに満ちている。薄っぺらいのにぶ厚い。現在目につく薄っぺらいものは何とんでも紙。ただの紙はぺらぺらなのに、そこに文字がのっかっていると、とたんにぶ厚くなる。薄いと厚いが同居している、同時に起きている。

○

文字ののっかっている紙をぶ厚いと感じるのは、たぶんヒトだけ。文字ののっかっている紙を人が飽きもせずにながめ、大切に保存し、写しを取り、広く配っている。薄っぺらいだけのものでないことは確か。きっとぶ厚いのだろう。薄っぺらいだけのものをながめたり、大事にするほど、人は暇ではない。

○

ぺらぺらの紙にのっかっているものは文字だけではない。絵ものもなっかっている。絵には手描きのものをはじめ、光学器械で映した写真、印刷されたもの、機械で描いたものがある。

○

人と仲良し——と、ヒトが一方的に思っている——の人以外の生き物たち、たとえば犬や猫や金魚や馬や牛や豚や鶏はぺらぺらに見入っている姿を不思議に思っているかもしれない。猫は、私が何かを読んでいると攻撃してくることがある。スマホという板も標的にされる。もっともなリアクションだと思う。

○

ワンコやおさるさんは、紙の上の文字と現実を混同しない。文字と現実を混同するおさるさんがいたら、世界的な大ニュース、歴史的な大事件になるだろう。AI並みにヒトの嫉妬と恐怖の対象となり迫害されるかもしれない。

○

ぺらぺらしたもの。まず、人にあるもの（内臓は除く）——まぶた、舌、皮膚、てのひら、爪、耳、見ようによっては胸。

○

身のまわりにあるぺらぺらしたもの——新聞、雑誌、ノート、本、メモ帳、ルースリーフ、ノートパソコン（キーボードおよび本体、モニター）、携帯電話（キーボードおよび本体、モニター）、クリアファイル、紙幣、硬貨、テレビ（画面と本体）、カーペット、座布団、畳、戸・ドア、ガラス窓、障子、時計、カレンダー、

写真、写真を入れるフレーム、引き出し、カーテン、鏡、フックに掛けてあるエプロン、そんなこと言ったら衣類ぜんぶ、薬の包み紙（プラスチック製）、皿、まな板、ふきん、見ようによっては食器ぜんぶ、フライパン、見ようによっては鍋、鍋の蓋、ティッシュペーパー、トイレトペーパー。

○

人は長方形に囲まれて生きている。生まれたばかりの赤ちゃんは、囲いというか長方形の枠の中にいる。そのあともたいていほぼ長方形の枠の中にいつづける。家、建物、道路、乗り物、写真、映画、動画、PC、スマホ……。

どれもが枠付き。人が亡くなると長方形の棺という枠に入ったまま長方形の炉という枠の中でくべられ、骨壺（これを入れる箱は縦に長細い）とか墓という枠に収められる。あとはたいてい長方形のものとして遺された者たちと対面する。

○

人の作った四角いものにはぺらぺらなものが、けっこうある。しかも四角いほうが大切にされている。きわめつけはお札つまり紙幣。それにクレジットカードも、ポイントカードも。あと名札。誰にとってもいちばん大切なものである名前が文字として記されている四角いぺらぺら。

お札（おさつ）とな札（ふだ）とお札（れい）は似ている。そっくりに見える私は「似ている」に憑かれてせつかれ疲れてるみたい。とういふか「似ている」と思いはじめる。と何でも「似ている」ように見える。このしつこさは被害妄想に似ている。

○

人は「軽い」や「小さい」や「薄い」や「短い」をうまく利用している。軽薄短小。とういふか、軽くて小さくて薄くて短いものを作るのに長けている。身のまわりを見ると、そんなものに満ちている。人自身がそうだからかもしれない。人は自分に似たものを作り、自分の作ったものにさらに似ていく。

○

文字を書いたり、映したり（印刷や photocopy や端末のスクリーンに映す）、写したり（写本・筆写や印刷や複製のこと）、それをまた移したりする（配布や翻訳や拡散のこと）、ぺらぺら（紙や液晶画面のこと）が、ぜんぶ薄っぺらくて四角いことは注目に値する。

○

いま眺めている端末の画面というぺらぺらも四角い。そのぺらぺら上においては、誰もが文字であり、お互いに顔も知らないし声を聞いたこともない仲である。文字どおり、文字同士としての付き合い。

○

いま薄い液晶のスクリーン上に表示されている自分の入力した文字を見つめる。視覚的に厚みも深みも感じられない、つまり立体感に欠ける文字。とういふことは、ひょっと

すると文字ってぺらぺらなのではないか。ぺらぺら（紙や画面のこと）にのっかかったり、うつったり、染みついたり、こびりついたり、貼りついたりしている以上、文字はぺらぺらなはず。

○

「ぺらぺらしたもの」——とは自分のことではないか。へらへらしているとは以前から感じていたが、ぺらぺらでもあるとは……。ぺらぺらがぺらぺらについて書くとは。人は自分に似たものを作り、自分の作ったものにさらに似ていく。

○

舌べろは方言なのだろうか。「べろ」という発音は舌に擬態しているように思える。「べろ」をいう音を舌で転がしてみる。舌で舌を転がす。べろべろ、ぺらぺら、べろべろ、あっかんべえ。ぺらぺら、英語がぺらぺら、へらへら、へろへろ、れろれろ。なんだか軽薄で、すごくいい感じ。親近感を覚える。他者とは思えない。

○

ヨーロッパの諸言語で、言語を意味する言葉の語源が「舌」であるのは興味深い。英語だと language であり、tongue。l と t では、舌の先が上の歯の後ろの歯茎に来る。l ではびったりと舌が貼りつき、t では軽く舌打ちする感じ。

○

ウラジーミル・ナボコフの小説『ロリータ』の冒頭を思い出さずにはならない。

Lolita, light of my life, fire in my loins. My sin, my soul. Lo-lee-ta: the tip of the tongue taking a trip of three steps down the palate to tap, at three, on the teeth. Lo . Lee. Ta. (Vladimir Nabokov, Lolita, Vintage)

○

「言の葉」という言い方の「葉」に、私はぺらぺらを感じる。葉には、端や刃や羽とのイメージの韻——「は」という音だけでなく——も感じる。端っこ、鋼を薄くのばした刃、薄く軽い羽という感じ。あくまでも個人的なイメージの連想。



イメージは語義や意味とは違って、きわめて私的で個人的なもの。だから、他人には言えないようなものもある。毎晩寝入り際にやってくる友達であり、おそらく死ぬ間際にまでついてきて私をなごませてくれるのが、イメージ。

言葉はみんなのもの。イメージはおそらく自分だけのもの。言葉は誰もが生まれた時に既にまわりにあったもの。つねに外にある、よそよそしいもの。イメージは自分が言葉と生きて生まれたもの。内にある懐かしいもの。大切にしたい。

V

言葉とは、「あるもの」の代わりをしている「ないもの」、同時に「ないもの」の代わりをしている「あるもの」、「ある」振りをしている「ない」もの、同時に「ない」振りをしている「ある」もの。

ルイス・キャロルは言葉が、「ない」を「ある」、「ある」を「ない」ように思わせる錯覚製造装置であることだけを意識しながら創作活動をしていたと私は勝手に理解している。

○

二つ、複数、多数の側面をすくい取れないといって、救いがないわけではない。むしろ、かりに全部すくえば壊れてしまうにちがいない。処理能力に限界があるから。

世界（そんなものがあるとしての話）に意味を見てしまう。森羅万象（そんなものがあれば）に意味（そもそも「ない」もの、人の頭の中にしか）を探ろうとしてしまう。人はすくえないことで、すくわれている。

○

言葉は決めるのではなく、決まる。これで決まり。

「決まる」は絶対なのかもしれない。絶対王政の絶対。絶対は絶大。絶倫でもある。

「決まる」は人知を超え、「決める」は人為。

○

文字はシンプルで、「それだけ」感が強い。「それだけ」感とは、「感」だから印象でありイメージ。検証ができない。

「それだけ」っぽい。「それだけ」がぶんぶんにおう。なんとなく「それだけ」という感じがして、「それだけ」という気分になる。

一度でも思わせ、信じさせたものが勝ち。脳は次の「読み、信じる」という処理作業に移らなければならないから。判断なんてしている暇はまずない。

このようにして、文字を読んで、そう思った、そう信じただけが、たいてい残る。文字を読むの基本は信じること。信じないと文字は読めない。

○

世界はひとつだ。

こう書くと、世界はひとつに思えてくる。そう思わない人も、この文字列を見た瞬間は「世界はひとつだ」と思う。思わないと読めない。信じないと読めない。

思って読んだ後に、とっさに「やっぱ、違うわ」と判断することもあるが、次の「読み信じる」という作業があるから、たいていすぐに忘れる。

○

多なのに一に見える仕組み、それが文字。世界をシンプルに見たい人には、文字は最適の錯覚製造装置。

○

思いは言葉という形で外に出してみても、はじめて確認できる。言葉がつねに外にあるからだ。外にある言葉は聞こえるし見える。ところが、意味を取ろうとした瞬間に、言葉は見えなくなり聞こえなくなる。人の中に入るからだろう。人の中にあるものを言葉と呼ぶ勇氣は私にはない。

○

外にある言葉を遠隔操作するなら——正確には外にある事物を、やはり外にある言葉という代理を使って遠隔操作するなら——、軽量でさくさく動かせたほうがいいに決まっている。それが文字。

話し言葉はもたもたしている。時間に拘束されるからだ。

それに対し、書き言葉である文字は軽量でコンパクトでさくさく動かせる。なにしろ、読むなんてまどろこしいことをせずに見るだけでも済む。現在、読むは見るに限りなく近づいている。

こんな便利なものがほかにあるだろうか？

○

文字がこれだけ崇め奉られるのは、話したとたんに消えていく声とは違って、しつこく残るからだけではなく、誰もが覚えるのに多大な時間と労力を費やしたために、頭が上がらないからかもしれない。長年お世話になったはず。

しかも文字の読み書きを学ぶさいには、人はたいていうつむく。ずっと下を向いたまま学んだものに頭が上がるわけがない。学習の成果は恐ろしい。読み書きをするさいに頭を垂れて目を下に向ける姿勢は、死ぬまで続くと思われる。

○

まわりを見ると、うつむいている人がたくさんいる。道にも、バス停にも、バスの中にも、病院のロビーや待合室にも、たくさんいる。たくさんの人が手に板を持っている。手のひらにのるくらいの小さくて軽くて薄い板だ。

文字を習う、文字を書く、文字を読む、思う、世界を見る。こういうときに人のする仕草が「うつむく」だ。うつむき、時間と労力をかけて、人はこどものうちから文字と世界を学んでいく。だから、人にとって世界は文字なのである。

うつむいて世界をながめるくらいならいい。頭を垂れる身振りが、世界を見下ろす、見下す、俯瞰する身振りと重ならないことを願わずにはいられない。

○

辞書では見出しが短い言葉（語数の少ない言葉）のほうが、語義や例文が長かったり（語数が多い）、同音の語が多かったりする。英語だと「a」、日本語だと「あ」や「ある」、「な」や「なる」がそう。「短い」と「長い」、「少ない」と「多い」が同時に起きている。

読むよりも、目を細めて見るとよく分かる。「目を細める」と「よく分かる」、そして「読まない」と「分かる」が同時に起きている。

○

話し言葉（音声）と、視覚言語である表情と身振りが、「消える」のではなく「残る」というよりも、「消える」と「残る」は同時にそして並行に起きている——。これは消えていくものが片っ端から記憶されるから残ると考えられる。

「消える」と「残る」が同時に並行して起きている。反対語なんて言葉の綾。ある事象の一面だけを取りあげた片手落ち。そんな気がする。事実誤認とまでは言わないまでも。

○

あなた、貴方、彼方——文字に似ている。活字に似ている。文字や活字を見ていると（意識していると）、読めなくなる。文字や活字は、目の前の「あなた・貴方」。読めなくなるのは、かなたにいる「あなた・彼方」、意味だったりイメージだったり光景だったりストーリーだったりする。

○

文字であるあなた、文字のあなたにいますあなた。あなたはふたりいます。同時には見えない。

読む行為、読書は、こうした不自由さの連続である。このままならさをあっさりとし念した「読んだ」とか「まだ読んでいない」とか「読めていない」といった言い回しは抽象でしかない。

○

十七文字という世界が十七文字で完結しているはずがない。言葉に言葉を重ねる、言葉に言葉を足す、言葉に言葉を積む、言葉に言葉を接ぐ（継ぐ）、言葉に言葉を投げる、言葉に言葉をこだませる。

そんな身振りが、十七文字の定型詩に感じられてならない。十七文字が短いだなんて冗談であり（事実誤認ではないかと言いたくなる）、単なるレトリックにすぎない（これもレトリックにはちがいないが）のではないかと思うほど。

○

「読み」と「詠み」がどこかでつながっている。それは「黄泉」や「闇」にまでつながっているのではないか。

これまで話され発せられ放れた言葉がたちがどこかに集まっていて、そこから響いてくるこだまを、各人がその時その時に受けとり耳にし、口から吐くのではないか。

○

こだま、餅、木魂、木霊。音（たぶん文字も）は息（生き、行き、往き、逝き）のような魂なのかもしれない。読みと詠みと黄泉と闇が通底し、こだましている。それが言葉と、言葉からなる作品の世界のありようだという気がする。言葉はたったひとりで口にしたり文字にしているのではない。

○

十七文字は一句で完結もしていなければ、一句で成立もしていない。とてつもなく長い。定型詩が短いはずがない。定型という縛りは単なる鎖ではない。えんえんと前にも後ろにも続く連鎖なのだ。

○

「普遍的」というのは、そうめったにあることではない。世界は「特殊」や「ローカル」にあふれているのに、「普遍的」や「普遍性」という言葉がこれだけ容易に使われるのは、「普遍」と「特殊」と「ローカル」がほぼ同義で用いられているからにちがいない。こういうことは辞書や事典を引いても分からない。

○

「普遍的」はそうめったにあることではない。つまり「特殊」なのである。

○

何でも難解に見える。難解だと思った瞬間に難解になる。「一」という文字も、「一」という罫線も、「口」というカタカナも、「口」という漢字も、難解だと思えば難解になる。抽象、具象、中傷、愚笑、意味、無意味、扇子、ナンセンス、関係なし。印象だから、基準なんてない。難解は節操がない。文字どおりに取ると馬鹿を見るの典型。

○

抽象的、深遠な。これも意味不明。辞書で引いても意味はない。いや、ある。意味が書いてある。ナンセンスにも無意味にも意味がある。辞書を引けば書いてある。

意味が不明だから、辞書に意味が書いてあるのかもしれない。決めたはずなのにわかんなくなっちゃった、という感じか。

○

自分が猫や犬と接するときを感じるのだが、擬人化は避けられない。ヒトとヒト以外の他者（生き物や物）との接し方の基本には擬人化がある気がする。ヒトは擬人という愛し方しかできないのかもしれない。愛用のカバンを思わず撫でたり、靴に話しかけている自分がある。話しかけているのはヒトに擬しているからにほかならない。とにかく愛おしい。

○

言葉は事物ではない。個人的には猫と猫という言葉はぜんぜん似ていると思わないが、猫が猫という言葉で名指されているヒトの世界に私は生きている。

言葉は似たもの、似せたもの、似せもの、偽物、贋物。別物であることは確か。疑似物とか擬似物という言い方もできる。疑、擬、偽、戯、欺。怪しいことに変わりはない。

○

言葉は事物ではなく、言葉が疑似物である以上、言葉上の矛盾と、その言葉が指し示す事物（そんなことが可能であればの話だが）における矛盾が一対一で対応して一致するはずはなく、言葉のうえで矛盾があるという理由で、そのフレーズを否定したり退ける気にはなれない。

いくら現実や思考よりも言葉のほうがいじりやすいからといって、言葉で現実や思考の辻褃合わせや帳尻合わせをしてしらっとしている勇氣は私にはない。「いじりにくいもの」の代わりに「いじりやすいもの」いじりで済ませて澄ましているわけにはいかない。

○

抽象画が具象画であることは確か。具象画にとっかかりがない場合に、抽象画と呼んでいる。こういうのが芸術性（芸術ではなく芸術性）や芸術っぽさ（芸術ではなく芸術っぽさ）の「性」であり「っぽさ」なのかもしれない。

○

抽象画や抽象芸術は、言葉でそう自分に言い聞かせないと鑑賞できない。つまり頭で観るもの。そもそも芸術とは、そういうものなのかもしれない。いま話題にしているのは個々の作品のことではない。「っぽさ」「っぽい」についての話。「っぽさ」「っぽい」は軽薄に響くが、そんなことはなく、むしろ知識や情報やある程度の蘊蓄がないと「っぽさ」「っぽい」を味わうことはできない。

○

万が一抽象画だと自ら称している作品があるとすれば、「確信犯」というよりも、やらせではないか。芸術界でしか通じないギャグでしかない。

○

「何描いているの?」「抽象画だよ」
「何書いているの?」「難解で抽象的な現代詩」
「何書いているの?」「難解で晦渋な哲学エッセイ」

「○○っぽさ」は、「っぽさ」の世界であり「○○」の世界ではない。「っぽさ」だけの空っぽの世界。

○

言葉はグラス。
言葉は半分だけ水の入ったグラス。
言葉は満たしても満たしてもいっぱいにならないグラス。

このように書くと何か深い意味がありそうなフレーズに見えるから不思議だ。ひょっとして隠喩や寓意（アレゴリー）ではないかと思ってしまう。自分で書いたにもかかわらず、そう思ってしまう。もし、これが他人の書いたものなら、よけいにそう見えるかもしれない。

○

「真理」（あるいは「でたらめ」）とか「真実」（あるいは「フェイク」）とか、真理っぽさ（または「でたらめっぽさ」）とか「真実らしさ」（または「フェイクらしさ」）というのは、とどのつまりはレトリックの問題ではないかと、最近よく考える。

○

言い方次第、書き方次第、口調次第、プレゼン次第で、本当っぽくも嘘っぽくも、意味ありげにも、深遠そうにも見える。言葉は空っぽなのに。

言葉は空っぽ。言葉は「らしさ」。言葉は「っぽさ」。

人が求めるのは、詩ではなく詩らしさ、小説ではなく小説感、哲学ではなく哲学っぽさなのかもしれない。真実らしさ、真理っぽさ、いかにも事実に見えるもの。

○

○○らしさ、○○っぽさ、○○のようなもの、○○らしいもの、○○感の漂うもの——人はこういうものを相手にしながら生きている。

○○が感知できないし、確認できないし、検証できないし、意見の一致も得られないから、こうなるのだろう。

人は「同じ」や「同一」の世界（確認や検証やコンセンサスが可能な世界）に生きているのではなく、「似ている」の世界（印象とイメージの世界）に生きているからにちがいない。

○

人は「○△X」という言葉をつくって、その次に「○△Xとは何か？」と問い、思い悩みつづける生きものである。

人のつくった「○△X」という言葉、とりわけ文字は、人から離れて「同じ」や「同一」の世界にある。つまり人の外にある。人の外にあるものは、言葉であれ事物であれ、人にとってはままならないもの、つまり人の思いどおりにならないものである。

人は「似ている」と「気まま」を基本とする、印象とイメージの世界に生きている。そんな人にとって、○△Xはたどり着けないものであるため、「○△Xっぽい」や「○△Xらしい」や「○△Xのような」を相手にするしかない。

「っぽい」や「らしい」や「のような」の世界とは、レトリック次第で印象の決まる世界ではないだろうか。つまり、「同じ」と「同一」を問うに等しい「○△Xとは何か？」

が成立しない世界なのではないか。

○

あることないこと
「ある」と「ない」
「有る」と「無い」
あるということと、ないということ
存在と無

いちばん哲学っぽいのは、どれ？

○

レトリック次第、レトリックの問題、レトリック感、レトリックらしさ、いかにもレトリックっぽい。

○

サルトルの『存在と無』の英訳を初めて見た時には拍子抜けした。そのタイトルに。Being and Nothingness なのだ。東京、神田古本屋街にある洋書専門店で見つけて、啞然、そして呆然となった。

Being and Nothingness 。か、軽すぎです。

サルトルさまの『存在と無』さまに、そんな日本の中学生でも知っているような単語のタイトルを当てるとは何事だ。そうは思わなかったが、あまりにも意外で、その本をこぢんまりとした店の床に落としそうになったのを覚えている。

せめて、がちラテン系の、Existance and Non-exisitance くらい存在感のある単語を並べてほしいなんて、いまでもめちゃくちゃを言いたくなる。

○

『存在と無』(日) がちがち

L'Être et le néant (仏) ほわーん
Being and Nothingness (英) で?
Das Sein und das Nichts (独) ごちごち
El ser y la nada (西) さらさら

ある個人の印象でありイメージ。

○

「この詩の掛け詞について論じなさい」
「先生、掛け詞と駄洒落って、どう違うのですか？」
「別称と蔑称みたいなものと言えば、分かるかな？」

○

おもしろく読んだ文章が、あるいは感心した文章が、アナグラムだったり、回文だったり、言葉遊びだったり、何かの暗号であったり、メッセージであったりする。

○

ずっと聴いていて大好きな音楽が、メッセージソングだと言われて、その「正しい」意味や解釈を丁寧に解説される。

○

手のひら返し。

抽象画だと思ったのが、ゴリラの描いた絵だった。機械が描いたものだった。孫の描いたものだった。娘の描いたものだった。自分のこども時代に描いたものだと親に打ち明けられた。

がらりと変わる解釈、いや印象。印象とは「っぼさ」のこと。

○

作品自体が鑑賞されることは稀であり、作者名とセットで鑑賞されるのが一般的なようだ。

○

作品は作者から離れて存在するという考え方がどうも理解できない。まっとうな意見だと思えない。考えただけでむかむかする。

○

AIの創作と聞くと、なぜか感情的になって血圧が上がる。一言言わずにはいられない。

○

回文とアナグラムからなる詩に涙した自分が許せない。悔しくて仕方ない。(人には言えない)トラウマになっている。

○

外国人の詠んだ俳句だと聞くと身構える自分がある。その人の母語が日本語だと聞いてほっとする自分もある。

○

漢詩や西洋の詩の韻が駄洒落に思えてならない。

○

韻や掛け詞のある詩に抵抗がある。

○

創作における、でたらめと偶然と技巧と作為の違いって何だろう。そもそも違いなんてあるのか。

○

やっぱりレトリックはトリックだと思う。好きになれない。

付録 レトリックだけでなりたっているような
文章

＊

レトリックだけでなりたっているような文章

星野廉

2022年9月15日 11:33

目次

**タイトルを決める

活用を活用して書く

動くために動くを使う

外国語に翻訳できないような文章

レトリックだけでなりたっているような文章

レトリック詞集

＊イツ・ア・マジック。マジでマジック。マジで絶句。

＊書いても書いても書いてはいない。

＊分けなくてもいいものを分けているのか、分けるべきだから分かれているのか。分かりません。

＊映る、写る、移る

＊記述は、既述であり、奇術であり、詭術でもある。

＊この符合、符号、付合は、只事ではない。

＊そっくりなところがそっくり

＊(7) AとBは、反意語＝反対語＝対義語＝異義語というよりも、むしろ「同意語＝同義語」であるらしい。

＊あやまるものはあやまらない。あやまってもあやまらない。

＊「無」なんて書かれると「ある」を感じてしまう

＊写す、映す、移す、撮すと言うより

＊playerではなく prayer であるべきなのに。

＊指す、差す、刺す、射す、挿す

＊「あなた」＝「I love you. (only you)」＋「I miss you. (without you)」説

＊なぞるをなぞる。

＊ことのはに さきだつひと

最後に**

タイトルを決める

動くものを手なずける

昨日に投稿した記事のタイトルです。私の記事には動詞が目立つと言われたことがありますが、それは意識してやっていることなのです。

動きを懐柔する。運動をとらえる。運動を固定する。運動を固定化する。動きを記述する。

「動くものを手なずける」の代わりに、こんなタイトルでもよかったと言えますが、あえてそうはしませんでした。「動く」と「手なずける」をどうしても使いたかったのです。

動くを手なずける。「動く」を手なずける。「動く」を記述する。

この二つも候補だったのですが、「動くものを手なずける」に落ちつきました。

活用を活用して書く

そんなことで悩んでいたのですが、わざわざ舞台裏をお話ししたのは、まさにそういうことを、今回は書きたいからにほかなりません。ややこしくてごめんなさい。

私は考えたり書いたりするときには、動詞とか用言に導かれることが多いようです。いま用言という言葉を使いましたが、私は文法用語には疎いです。英文法は好きでしたが、日本語の文法が苦手でした。なんだがぴんと来なかったからだと思います。

いま辞書で用言と体言を調べてみましたが、大きな違いは用言は活用して、体言は活用しないということみたいです。これなのです。私が動詞に惹かれるのは。

簡単な例を挙げます。

愛。これは名詞です。中国語ではどうなのかは知りません。日本語での話です。

愛する。これは動詞と見なしていいでしょう。

愛——。私の中では、これで終りになります。思考停止におちいるのです。「愛なの」「そうですか」、「愛である」「ははあ」、「愛です」「あ、はい」という感じです。

愛する——。えっ？ 誰が何を？ 何が何を？ 誰が誰を？ いつ？ どこで？ どうやって？ 愛さない。愛せない。愛せば。愛しちゃったのよ。愛してる。愛していた。愛するだろう。愛していいですか？ 愛していないんですか？

動詞だとどんどん活用というか、頭の中で「愛する」が変化していくのです。ひとさまのことは知りません。こんなことを話す相手がないのです。今回初めてこんな話をしています。

ちなみに、この記事は小説です。正確なタイトルは「【小説】レトリックだけでなりたっているような文章」です。私は研究者でも探求者でもありません。「小説」とすると言いたいことが自由に言えるので、このところ味を占めてやっています。

記事は楽しく書きたいものです。

動くために動くを使う

要するに、私は動詞を使うことで思考停止を避けているみたいです。名詞ばかりを使っていると、考えられないし、書けないと言えるでしょう。ひとさまのことは知りません。知りたいともあまり思いません。自分の世話で精一杯なのです。

そんなわけで、私の書く文章には動詞や用言がよく出てきます。活用する用言に助けってもらって書いているのです。活用を活用するというか。

*

His love of dogs led him to the hatred of people.

イヌへの愛が彼を人間への憎悪へと導いた。

イヌを愛する気持ちが彼を人間嫌いにした。

イヌを愛する気持ちが高じて、彼は人間嫌いになった。

イヌを愛するあまり、彼は人間を憎むようになった。

自作のぎこちない英文を自分なりに日本語にしてみたのですが、いわゆる「直訳」から「こなれた訳」へと変わっていく過程が分かるのではないのでしょうか。私はかつて翻訳家をめざしていたのですが、上のような訳の違いをいろいろな先生から教えてもらいました。

名詞構文とか動詞構文なんて言葉を使って説明する先生もいた記憶があります。要は、英語は名詞構文が多いから日本語では動詞的に訳せ、ということでした。そのほうが日本語としてこなれているとか、分かりやすいからだとか教わりました。いま考えるといかにもいかがわしい説明です。

そうした訓練が、いまになって私の書く文章に表れているのかもしれませんが。いずれにせよ、原文があってそれを読みやすい日本語にするような練習をしていたのです。現在の私の文章が読みやすかったり分かりやすいかはまったくの別問題ですけど。

＊

私にとって考えるとは、言葉を動かすことのようにです。動詞でも名詞でも、どんな言葉でもです。言葉をいじると言ってもいいかもしれません。人が何をどう考えているかは、人の中で起きていることですから、確認できません。自分でも確認できないし、他人といっしょに確認することもかなわないという意味です。

思いは言葉という形で出してみても、はじめて確認できます。言葉は、外にあるのです。

外にある言葉は聞こえるし見えます。ただ、意味を取ろうとした瞬間に、言葉は見えなくなり聞こえなくなります。人の中に入るからでしょう。中にあるものを言葉と呼ぶ勇氣は私にはありません。

(言葉が人の中に入ったと考えたとき、その言葉がどうなっているのか、不思議でなりません。確認できないという意味で、中の「外」というふうにイメージしています。ブラックボックスというか、分かりようがないという意味です。)

「言葉らしきもの」が、目に見え、聞こえ、場合によっては触れることができる場合に、私はそれを言葉と呼びます。見えない、聞こえない、触れることができないものを、私は抽象だとしか考えていません。

抽象は動かさせません。

＊

誰もが生まれたときに、すでにあるもの。つねに人の外にあって、それでいてときに人の中に入ったり出たりして、思いどおりにならないという意味で、人にとって「外」であるもの——。言葉のことです。

いま引用したのは、私はよく使う文章です。ちょっといじってみます。

誕生の時点で既に存在するもの。常時、人の外部に存在し（外在し）、それでいて時に人間の内部へと出入りし、思惑に抵抗するという意味で、人にとって「外部」であるもの——。言葉のことである。

このいじった文は自分では絶対に書かないものなのですが、動詞よりも名詞を使うことに加えて、もう一つ特徴があります。あえて漢語を使っているのです。

私はできるだけ、いわゆる大和言葉、つまり和語を使うようにしていますが、これは名詞を避けて動詞を使うことと深くつながっています。いま思えば、大和言葉をなるべく用いるようにと言われていたのも翻訳を修業していたころでした。

誕生の時点で既に存在するもの。常時、人の外部に存在し（外在し）、それでいて時に人間の内部へと出入りし、思惑に抵抗するという意味で、人にとって「外部」であるもの——。言語のことである。

太文字にしたのが漢語的な言い回しです。私は漢語の多いこの手の文章が苦手で、頭

に入ってくる。どうしても読まなければならないものは、自分なりに和語の多い文章に「翻訳」します。日本語を日本語に訳すのですが、これは冗談でもレトリックでもありません。

長い引用になりますが、最近の記事から取った以下の文章をざっとご覧ください。

*

「わかる」と「はかる」は字面と発音が似ていますが、「わかる」にくらべて、「はかる」はあまり考えたことがありません。でも、身のまわりを見ると「わかる」だけでなく「はかる」が多いのに驚きます。

とくに、病気になったり老いると「はかる」を意識するようになります。病院に行くとわかりますが、検査は「はかる」のデパートです。「はかる」をたくさんして、その結果が「わかる」というわけです。尿検査だけでも、たくさんの「はかる」があり「わかる」があるようです。結果の項目（リスト）を見るとわかります。

それにいまは、家でも毎日体温を測っています。はかれればわかって安心するわけです。いや、「はかる」の結果をわかりたくないと思うときが、ままありますね。気が滅入りそうなので、思い出話をします。

いまになって思うと、学校という場所は「はかる」と「わかる」に満ちあふれていました。そもそも、学校は「わかる」と「はかる」に二分されると言ってもいいのではないのでしょうか。

なにしろ、はかるとわかる、はかるはわかる、なのです。恐ろしいことですけど。「はかる」は、ほんわかとした、いいこと尽くめではないのです。

(拙文「「はかる」と「わかる」に囲まれて生きる」より)

*

上の文章では、「はかる」と「わかる」という表記をしています。和語をひらがなにし

ているのは意識してのことで、もしそうした表記をしなかったら、上の文章は絶対に書けなかつたらうと思います。

外国語に翻訳できないような文章

ところで、上の文章を、たとえば英語に翻訳することは可能でしょうか？　いま考えていたのですが、私にはできそうもありません。

逐語訳（極端な言い方をすると、原文と訳文をできるだけ一対一に対応させる直訳みたいなもの）は無理でしょう。解説を訳文に混ぜるとか、註を付けば、できそうです。

ま、そんな奇特な人はいないでしょうけど……。

必死にかく、もがき、あがくのです。書いても書いても「欠く」しかない世界。圧倒的に言葉は足りないし、見る果てがないし、きるにも切りがないし、分けても分からない。それが「ありえない」なのです。

（たとえば、いま書いた文章はレトリックだけでなりたっている書き方をめざして書きました。書かれていても何も言っていないのです。ひとり受けギャグの世界に似ていませんか？　また、この書き方には外国語に翻訳するのがきわめて難しいという特徴があります。翻訳する人などいませんけど。）

（拙文「ありえない文章」より）

こうした書き方を、用言体とか「ありえない文章」と呼んでいたこともあります。私にとってオブセッションのようです。

レトリックだけでなりたっているような文章

たとえば、レトリックだけでなりたっているような文章、これを「レトリック詞」（私は詩が書けないので、詩ではなく詞です、当初はナンセンス詞とするつもりでした……）と勝手に名付けたいと思います。

これはどんなものなのかと言いますと、上で述べたことの繰り返しかえしになりますが、たとえば解説をしたり註を付けないかぎり、外国語に翻訳するのがほぼ不能な書き方を

目指します。「勝手に目指せば？」ですよね。我ながらアホなことを目指していると思います。

ひとつだけ言い訳をさせてください。「レトリック詞」は、学生時代にフランス文学（そして現代思想）を勉強していた自分としての総決算なのです。なぜなのかと言いますと、私がいろいろなことを学んだフランスの作家や詩人や思想家の中に、日本語（あるいはフランス語以外の言語）に翻訳するのが不能であるような書き方をしていた人たちが少なからずいたからなのです。

ミシェル・フーコーとジル・ドゥルーズにくらべると、日本語を母語とする者にとっては体感しにくいお話を語る人だという印象を、デリダについてはいただいています。

落語を聞いていて、あるいは海外のコメディ映画を見ていて、どこで笑えばいいのか分からないというのに似ています。「笑うべきところ」を解説をしてもらったとしても、笑いが自然と湧いてくるわけではないのです。

（拙文「【小説】音の名前、文字の名前、捨てられた名前たち」より）

私は、いわばオマージュとして、その人たちの書いた文章の言葉の身振りを母語でなぞりたいのです。たとえば、日本語でデリダする、フーコーする、ドゥルーズする、バルトするというふうに……。いま思わず笑ってしまいました。無知から来る無恥は、まことに恐ろしいものです。鞭で自分をぺんぺんしたくなりました。

私がそうした人たちの足元にもおよばないことは重々承知しておりますが、だからこそ、アホと呼ばれてもいいから死ぬ前にやっておきたいなあ、と思っている次第なのです。じつのところ、アホでなければ、こんな荒唐無稽なことは言えません。

こういうありえない夢があるかぎり書きつづけることができるのだとすれば、この夢が終わらないでほしいです。この夢の中で、ありえない文章をひたすら書くしかない。（……）

終りなど考えないで、めざしているのが蜃気楼であると意識しながら、ただ歩くしかない旅なのかとも思います。

（拙文「ありえない文章」より）

そんなわけで、私は母語である日本語で、「ありえない夢」を追い、「ありえない文章」を書いていこうと思います。アホは直らないようです。

レトリック詞集

以下は自己引用による、いわばレトリック詞集ですが、出所はあえて明記しません。これまで何度も引用してわけが分からなくなっているのです。

自分でも不明なので、たとえば（「たとえば」が多くてごめんなさい）、「星野廉イツ・ア・マジック。」とか「星野廉記述は、既述であり、」というふうにネット検索するとヒットするので助かります。

こんなふうに自分の痴部（たとえば、自己引用癖のことです）が露わになり、絶句します。

悪いことはできないものですね……。いずれにせよ、便利な世の中になりました。みなさんも、ご自分のユーザーネームでお試しになると面白いかもしれません。

なお、以下のレトリック詞集に意味や内容はありませんので、ざーっと顔＝字面だけをながめる感じで、目を通してやっていただけるとうれしいです。

***イツ・ア・マジック。マジでマジック。マジで絶句。**

これは便利。超便利。魔法みたいに便利。呪術みたいに便利。イツ・ア・マジック。マジでマジック。マジで絶句。ヒューマニズムよりも、シャーマニズム。コミュニズムよりも、キャピタリズム。デモクラシーよりも、ビュロクラシー。

***書いても書いても書いてはいない。**

隔靴搔痒の遠隔操作。まるで夢の中。知覚機能を用いる限り対象には触れることができない。言葉を使う限り直接的に森羅万象を相手にすることはできない。

駆けても駆けても駆けてはいない。掛けても掛けても掛けてはいない。搔いても搔いて

も搔けてはいない。書けても書けても書けてはいない。要するに、そういうことです。

どう足搔いても藻搔いても現実にたどりつけない私たちは、覚めた夢の中にいるのかもしれない。

***分けなくてもいいものを分けているのか、分けるべきだから分かれているのか。分かりません。**

かげが影と陰という言葉で分かれているというよりも、かげの使い分けが漢字の使い分けにあらわれている気がします。

まず現実での体験があって、言葉は後という意味です。言葉から現実に入る人は、まずいないでしょう。

言葉、とりわけ文字は後付けです。理屈なのです。分けなくてもいいものを分けているのか、分けるべきだから分かれているのか。分かりません。

***映る、写る、移る**

それが見るであり、聞くであり、読むという行為と言えるでしょう。見たもの、聞いたもの、読んだものを、いったん信じないことには——「信じる」は「なぞる」です——、見えないし、聞けないし、読めないのです。実際には「ないもの」を見て聞いて読んでいるのですから、変な精神状態にあると言えるでしょう。

いましているのは、絵、映画、映像、動画、演劇、物語、小説の話です。虚構というものは「ない」を「ある」と一時的に信じ（つまり、思い描くことでなぞり）、しかもそれを自分自身も心の中で表情や動作として演じるわけですから、確かに変なことをしているとと言えます。

要するに、映る、写る、移るです。転写された相手が自分の中に入ってくるという感じ。

***記述は、既述であり、奇術であり、詭術でもある。**

記述は、既述であり、奇術であり、詭術でもある。

言葉を用いて「しるす」行為つまり記述は、すでに何度もしるされた言葉や言い回しを「なぞる」こと、言い換えれば既述なのであり、そもそも言葉ではない事物や現象を、もっともらしく言葉に置き換えて「描写しました」とか「説明しました」と澄ましているという意味で奇術であり、ひいては語ることで騙る、要するに人を「だます」のですから詭術だと言えます

***この符合、符号、付合は、只事ではない。**

呪術、呪い・まじない、魔術・マジック・magic、マジ・magie（フランス語です、マジな話が）、まじもの・蟲物。

この符合（※ふごう）、符号（※ふごう）、付合（※つけあい）は、只事ではない。「まじ」めな話が.....。

***そっくりなところがそっくり**

そっくりなところがそっくりなのです。そっくりな点がそっくりにそっくりなのです。これもレトリックですけど。

スマホという大量生産された製品のシンクロ振りに、それを使う人の身振りのシンクロが重なるという意味です。つまり、シンクロにシンクロする。

スマホを使っている人はスマホに似てくるというのは、それくらいの意味です。

*

そっくりがそっくりをそっくりな場所でそっくりなやり方で売る、そしてそっくりな

お客さんたちがそっくりなやり方で買う。そして、自分もまたそっくり化していることにふと気づき、嘔然となる。

おそらくこれが資本主義なのでしょう。というか、資本主義の顔であり表情であり身振りなのでしょう。

*** (7) AとBは、反意語=反対語=対義語=異義語というよりも、むしろ「同意語=同義語」であるらしい。**

世界を「まだら」状にしか知覚および認識できない人間が、長年にわたって使用してきたことにより、慣例的に反対の関係にあると事実誤認および錯覚されていると推測可能な言葉のペア。補完関係があるという見方も可能かもしれない。静と動、絶対と相対、客観と主観、客体と主体、知覚と錯覚、「分かった」と「分からない」、「知っている」と「忘れている」、「記憶にございません」と「存じ上げております」、きれいと汚い、毒と薬、可能と不可能、シャチョーとペーパー、はじめしゃちょーと林家ペー（※両者とも人間という意味）、林家ペーと林家パー子、お偉いさんと市民、苦勞人と元苦勞人、玄人と素人、素人のど自慢と紅白歌合戦、濃いと薄い、あそこここ、善と悪（倫理的意味ではなく、この惑星に対しての人間の影響度）、神と悪魔（諸説あり）、異端と正統、温水と冷水、ヒトと動物、なまものといきもの、のろいとまじない（漢字にすると同じである点に留意されたい）、優と劣、高等と劣等、理系と文系、〇〇党と△△党、右派と左派、保守と革新、主流派と非主流派、〇〇党XX派と〇〇党□□派、など。

***あやまるものはあやまらない。あやまってもあやまらない。**

あやまるものはあやまらない。あやまってもあやまらない。

あやまるものはあやまる。

あやまらないものがあやまる。

あやまらないものがあやまらない。

あやめて、あやまる。

あやまって、あやめる。

あやまって、あやまる。

あやまって済む問題。

あやめて済む問題。

あやめとかきつばたとしょうぶをあやまる。
あやめばしで、みをあやまる。ごめんなさい。
あやめばしはあやめた橋。諸説あり。

あやめ亭は落ちついたお店です。
あじさい亭もすごく美味しかったです。最高でした。

あやまらないそうり。
あやまらない、あいむそうり。
あいむそうりと言わないそうり。
あいむそうりと言わないあいむそうり。(早口言葉)

あやめてもあやまってもあやまらないみちびくひと。
あやまりをみとめないみちびくひと。
つじつまあわせにちみちをあげるみちびくひと。(早口言葉)

* 「無」なんて書かれると「ある」を感じてしまう

「あるとない」と「有ると無い」と「存在と無」は、同じことを言っているというのは抽象です。それぞれが違います。

「あるとない」 < 「有ると無い」 < 「存在と無」

「存在と無」は「あるとない」よりずっと厳めしい、つまり存在感があります。難解な印象を与えますし、実際に難解でもあります。なにしろ、「ないことはない」という振りをして「ないことがある」とほのめかしているのです。「いや」が「いいわ」だったりするSMプレイとそっくりなのです。

漢語系の言葉や漢字は、「ない」を「ある」ようにほのめかします。これは顔の問題だと思います。文字には顔がありますが、漢字のいかめしさはすごいです。漢語系の言葉を使うと頭が良さそうに見えるし、すごいことを言っているように見えます。

字面が強面だとも言えそうです。ないはない、ことばはことば、ことばはものではない。こういう身も蓋もない、がっかりするしかないほど明快なことを「無は無なり」「言

葉は言葉である」「言葉は事物ではない」と漢語系の言い回しで言うと、とたんに「ないはある」の振りをしてしまうという事態が生じます。がちで「ある」ように思えてしまうのです。いわば顔芸です。

「無」なんて書かれると「ある」を感じてしまうとか、「無」に「ある」がつまっている気がすると言えば、分かっていただけでしょか？

あるあるあるあるある
あるあるあるあるある
あるあるあるあるある
あるあるあるあるある
あるあるあるあるある
無 = あるあるあるあるある.....

漢字や漢語には何だか「思い」がつまっているようで「重い」のです。ただし、あくまでも日本語においての話です。また私という個人においての話であることは言うまでもありません。

***写す、映す、移す、撮すと言うより**

描写は、写す、映す、移す、撮すと言うより、事物や風景そのものではなく、その影をなぞっているのです。見て写す、つまり写生とは、次元が異なっているとも言えます。

描写は事物を描き写すのではなく、むしろ事物の影をなぞることではないでしょうか。見なくても描写できます。現場にいなくても描写は可能だし、じっさいにそういう創作がおこなわれています。

だから、見たことがない事物でも描写できるのです。その意味で、なぞるという行為は、必ずしも対象を見ているわけではありません。

*** player ではなく prayer であるべきなのに。**

名づけて手なずけることが難しいもの。そもそも言葉にするのが難しいもの。

difficult to name

difficult to tame

difficult to frame

抽象だから、似ているというよりも、そっくりというよりも、同じであり、同一。同期。

same

なぞ、なぞをなぞるというゲーム。なぞるが目的化して空回りする。

game to play

aim

aimless game to play

何のため？ 名前のため？

aim、name、fame、frame

それは罠だってば！

You're framed!

筋書き (aim) をなぞり、名 (name・fame) を残し、枠 (frame) を残すのに血道を上げる。

ゲーム (game) をプレイ (play・演じ戯れ競い奏で賭け、なぞり) しながら、自分が獲物と餌食 (game・prey) になってしまうのに気づかない。いまは祈る (pray) べき時なのに。player ではなく prayer であるべきなのに。

*指す、差す、刺す、射す、挿す

指す、差す、刺す、射す、挿すのです。何度も何度も。そして射る、入るのです。つまり、サディスティックなのです。

川端康成の作品における「指」の役割と象徴性はきわめて大切です。指はなぞり、さすものなのです。何かの代用であることは明らかでしょう。

* 「あなた」 = 「I love you. (only you)」 + 「I miss you. (without you)」 説

「あなた」 = 「I love you. (愛しいあなた)」 説。これでは「かなた」の意味がすくえません。

じゃあ、「あなた、貴方 = you、彼方 = over there」なのですから、音感的には「あなた・貴方」 = 「I love you.」で、意味的には「あなた・彼方」 = 「I miss you. (目の前にいないあなた)」では、どうでしょう。

つまり、「あなた」 = 「I love you. (only you)」 + 「I miss you. (without you)」 説。

* なぞるをなぞる。

人のつくるものはどこか人に似ている。なるべくして、そうなっているのかもしれない。

人のつくるものが人の内にある「何か」と似ていても不思議はないのではないか。

人はなぞる。なぞるをなぞる。空(くう)をなぞるように見えて、枠をなぞっている。形をなぞっている。形はなぞっているうちに形となる。なぞった瞬間に形は謎となる。

とつぜんどこかからやって来た感のある文字は、なぞるを固定化する。なぞるを暴力的に固めて居直りつづけようとする。

*ことのはに さきだつひと

かつて先立ったはずの私たちが、いつのまにか影や言葉に先立たれ、その私たちがいつか影や言葉に先立つことになる。「先立つ」には「前に立つ」や「先に起こる」と「先に亡くなる」の両義があります。

ことのはに さきだつひとを おくるかけ

最後に

以上、私の文章がいかに内容なんてないよーであることが体感いただけたかと思えます。

文章は顔が命。文章は読むよりも、その顔を見て愛でる。読むよりも、見たり唱えて楽しめばいい。

さいきん、つくづくそう思います。意味に疲れて、憑かれて、突かれて、潰かれて、付かれているのかもしれない。

ひとりよがり自己満足でしかない自分語と化してきた拙文の言葉たちにお付き合いいただき、ありがとうございました。

#文章 # 名詞 # 動詞 # 用言 # レトリック # 翻訳 # 文体 # 文字 # 漢字# ひらがな
大和言葉 # 和語 # 言葉

引用の織物

I

意味とは働きかけなのだと思います。通じないかもしれない相手や対象に働きかけたとき、意味が立ちあらわれる気がします。通じないかもしれない——。その意味で賭けなのです。

○

出たものは「静止」してはいない——。

この点に、注目していただきたいのです。「でる・出る」に似た言葉で「あらわれる・現れる・表れる・顕れる」があります。でも、両者は微妙に異なっているようです。まず、「出る」から、具体的に見ていきましょう。次に「○○は出る」という言い方をすると「○○」を挙げ、いったん「出た」後にどうなるかを考えてみましょう。

いったん「出た」ものは、必ず、何らかの運動に誘発されます。たとえば、いったん「出た」給料も、給付金も、保険金も、うんちも、太陽も、月も、声も、にきびも、幽霊も、新刊書も、選挙候補者も、テレビドラマの役者も、家出したお父さんや、家出したお母さんや、出家したおじさんや、家出したお子さんも、火も、くいも、そのまま静止し続けることはありません。

一方、「○○はあらわれる」という言い方をすると「○○」を挙げ、いったん「あらわれた」後にどうなるかを考えてみます。

いったん「あらわれた」ものは、「出た」ものとは異なり、静止したまましつこく居座ることも、往々にしてありそうなのです。真価、効果、正体、正義の味方、英雄、悪の権化、○○の神様、救世主、影響、才能、成果、結果などです。もっとも、影響や結果みたいに、「出る」とも言うものは、概して「不安定」な気がします。

○

「立つ」はただ垂直の動きを示すだけではないようです。語弊や垢がありますが、使い方によっては語弊や垢を招くという意味です。

文字どおりに取れない、言葉どおりに取れないということですから、一種の比喻みたいにレトリックになってしまう。言葉の綾になってしまうとも言えます。

○

「立つ」はヒトにとって特別な動作のようです。

なにしろ、聞くところによると、おさるさんに近かった大昔のヒトは四つ足歩行をしていたり、木や枝につかまって移動したり休んでいたたり、横になっていたらしいのです。

○

みなさんはいま、どんな格好をなさっていますか？ 座っていたり、横になっていたり、何かに寄っかかっているのではないのでしょうか。

直立不動の方は少ないと想像しています。直立不動は、意外とつらいものです。歩いているほうがまだましです。

立つには、力が要ります。筋力も要るし、入れた力を維持しなければなりません。緊張もします。気が張りつめるわけです。大げさに言うと殺気立っているのです。

立つという体勢は人にとって不自然なものだと言いたくなります。一時的な姿勢であって、いつまでも立っているなんてありえないのです。弁慶さんじゃあるまいし。いつかは倒れます。横たわります。

行き倒れ、野垂れ死に、仰臥、往生、大往生。瞑目合掌。

○

立っていると、あるいは立って歩いているときに覚える緊張感は、大昔のヒトの時代から蓄積された記憶から来ているのかもしれませんが。

立った状態で何かをしていると、びくびくする自分の一部を感じます。襲われるかもしれない恐怖と言いましょか。何にって、敵です。

「立つ」は非常事態なのです。そのときの人の神経は普通じゃないのです。いろいろな意味で。

「立つ」は、人にとって特権的な意味を持つ動作だと言えそうです。

○

「何に？」(追求)と問うことは、得体の知れない「何か」(保留)に挑戦することです。

その「何か」(保留)は、世界だったり宇宙だったり真理だったりするでしょう。運命や神だと言う人もいるでしょう。

保留を追求するなんて、眠っている子をわざわざ起こすようなものです。

本気で追求しようとするれば、世界を背負うことに匹敵します。大昔とか昔に、超エリート中のエリート(いわゆる「昔の」「偉い人」のことです)が世界を背負おうとしました。現在古典と呼ばれているものを書いた人のようです。

いまはどうなのかは知りません。というか、いまは、世界を背負おうとする「偉い人」は必要とされていないもようです。古典で十分みたいです。

いずれにせよ、「何に？」や「何？」(追求)と問うのはしんどいということでしょう。半端じゃなくしんどいにちがいありません。

○

「何？」(追求)にしろ、「何か」(保留)にしろ、「何(か)」を保留している点は同じです。

要するに、ぼかしているのです。「何」という代名詞は「ぼかし」であり、映像に施す例のモザイクと同じだという意味です。ベールに包むという言い方もできるでしょう。

あえて見ない、無視する、深追いしない、すっとぼける、曖昧放置、「さあね」、「そう言えばそういうのがあったけど知らない」という感じ。

なぜでしょう？

怖いからです。

下手に手を出せば噛まれるどころか、襲われてひどい目に遭うことを本能的に察したときに、「何」や「何か」を使うのです。

○

何かが立ちあらわれる。

「何か」(ぼかし・保留)が「立ち」(非常事態)「あらわれる」(しつこく居続けます)。

怖いものを、ぼかしておいて、それがしつこく居直り居続けますよ、と非常事態宣言をしているのです。

この怖いものは何だか分かりません。正体不明だからこそ、よけいに怖いのです。しかも、どうやら、いたるところにいそうなのです。いろんな姿と形をしてあらわれそうなのです。

とりあえずは、「何か」としか言いようがないのです。

めちゃくちゃ怖いものが、あらわれていますよ、その後いつまでもずっと残るのです、気をつけましょう。

○

何って何なのでしょう？ 気になりますよね。

めちゃくちゃ怖いものって何でしょう？ 「何」という保留をつかう、つまり、ぼかしを入れなければならないほどヤバいものなののでしょうか？

それがあらわれているなんて、気味が悪すぎます。後を引くみたいだなんて、気になってなりません。

何なのでしょう？

知りません。なんて言うと、叱られそうなので、言いますが、意味なんです。異味であり、忌みであり、齋であり、イミです。

○

世界中の図書館に必ずある本は何でしょう？

聖書ですか？ たしかに世界のベストセラーといわれています。なにしろ翻訳という武器があるために、その言語および方言別バージョンがめちゃくちゃたくさんあります。

でも、文化や地域によって異なるでしょうね。

辞書なんです。これはどんな小さな図書館にもありそうです。各家庭にあっても驚きません。

辞書には何が書いてありますか？ そうですね、意味です。正確には語義ですけど、意味です。

意味にも意味があります。手元の辞書でお調べください。ちなみに、無意味にも意味があります。辞書に載っています。

恐ろしいですね。

え？　ぜんぜん怖くない、ですか？

○

人は意味に取り憑かれています。意味禍はヒトが言葉を持ってしまっただけでずっと続いています。文字を持って、意味禍に拍車がかかりました。

まさに、あらわれて、しつこく居直り居続けいるではありませんか。それなのに、「何」とか「何か」としか言えないのです。分からないままなのです。

さっき「意味」だって言ったじゃないか？　そうおっしゃるのも当然ですが、意味には意味がないのです。ナンセンス。

ここだけの話ですが、そういう不条理で荒唐無稽で理不尽とも言える話なのです。でも、ナンセンス、無意味ほど怖いものはこの世に——ヒトの世のことです——ないのです。無意味という深淵を覗きこむと危ういことになるからです。覗いちゃ駄目です。

そんなわけで、意味とか無意味と名指したところで——どちらも同じです——意味はないのです。「何か」と保留したほうが何かと都合がいいのです。

保留にしたまま、警戒を解かずにいる。これが「何か」を相手にするときのコツなのです。

名づけて、手なずけたつもりになったときがいちばん怖いのです。チョロいものだと、気が緩み警戒を解いてしまうからです。

そうです、お察しの通り、判断停止と思考停止のことです。これが、おそらく、相手よりも怖いのです。

○

「何かが立ちあらわれる」——これはいまもいたるところで起きているのです。その意味では、私たちの友だちでもあるのです。

でも、舐めてはいけません。本質は怖いものですから。しかもその姿形はうつろい、変わるのです。いたるところで姿を変えてあらわれるというのです。

そんなどっちつかずの性質を持っていますから、逆に言うと、特定するのは賢明な方法ではありません。「何」とか「何か」と保留したまま、備えるのがいちばんです。

意味禍は終わりそうもありません。いや、終わる危険に、いまさらされています。この星からヒトがいなくなれば、意味は消えます。もう怖いものは（い）なくなります。

II

人間には一人でいるべき空間がある、と彼女はよく考える。寝床、風呂、鏡の前、ストレッチャー、病床、死の床、棺、安置室、火葬炉、墓。夢の中や心の中と同様に、そうした場所には誰も入ってほしくない。できれば一人でいたい。

○

たとえばどこかをスマホを見ながら歩く人たち。たとえばどこかの待合室でスマホに見入る人たち。

スマホというモノもそっくり、その画面に映っている映像もそっくり、聞こえてくる音声もそっくり、ときどき鳴る合成音やブルブルいう振動もそっくり、そのスマホに見入っているヒトたちもそっくり、ヒトたちの身につけているモノたちもこの瞬間に地球の至るところでそっくりなものがあるはずです。

どことは言いません。至るところでの話ですから。誰とは言いません。誰もが免れない状況なのですから。

「わたしはスマホはつかわない」ですか？ テレビでもラジオでも新聞でも本でも車でも病室のベッドでも棺でもお墓でもかまいません。いま挙げたもののほとんどが、大量生産され、印刷という形で複製されたものです。あなたがつかっている、目にしている、耳にしている、皮膚にまとわりついている、横たわっているそれは他のどこかにそっくりなものがあるはずです。

○

* 梓、タブロー、スクリーン

人のつくるものは人に似ている。人の外面だけでなく内にも似ている。人の意識をうつしていると思えないものがある。

書物、巻物、タブロー、銀幕、スクリーン、ディスプレイ、モニター。

見えないものを真似ている。聞こえないものを真似ている。感知できないものを真似ている。知らないものを真似ている。

なぞる。何かはわからないままになぞる。なぞっているという意識なしになぞる。

*

人のつくるものはどこか人に似ている。なるべくして、そうなっているのかもしれない。

人のつくるものが人の内にある「何か」と似ていても不思議はないのではないか。

人はなぞる。空（くう）をなぞるように見えて、枠をなぞっている。形をなぞっている。形はなぞっているうちに形となる。なぞった瞬間に形は謎となる。

とつぜんどこかからやって来た感のある文字は、なぞるを固定化する。なぞるを暴力的に固めて居直りつづけようとする。

*

枠、frame、フレーム、figure、フィギュア。

仏壇、位牌、写真、卒塔婆、墓、墓石。棺桶、棺、火葬炉。

地獄絵、極楽絵図。

アイコン、アイコン、アバター、分身。

○

たとえば、人は椅子をつくったために、椅子に合わせて腰かけるようになった。

物だけではない。たとえば、映画をつくったために、映画のような夢を見たり、空想をするようになった。

棺桶をつくったために、棺桶に合わせて埋葬するようになった。冷蔵庫をつくったために、冷蔵庫に合うようなものを食べるようになった。パソコンをつくったために、パソコンの従者や下僕になった。スマホをつくったために、スマホに嗜癖しスマホに合わせて生活するようになった。

それだけではない。

大量生産されたそっくりなものを使う人間は、地球のあちこちで同じ仕草同じ動作をするようになる。そっくりがそっくりを生む。そっくりをそっくりが真似る。シンクロ、同期、似ている、激似、酷似、そっくり、同じ。

*

つくったものに似せる、つくったものに似てくる。うつったものに似せる、うつったものに似てくる。ミメーシス、模倣、描写。

うつす、写す。似せる、真似る。かたる、語る、騙る。つたえる、伝える、つぐ、継ぐ、次ぐ、告ぐ、接ぐ。まねる、真似る、ふりをする、振りをする、えんじる、演じる。

○

寝入るとき、人はとつぜん一人になります。二人で抱きあって寝ていたとしても、眠りに入った瞬間に二人は別れます。どんなに愛し合っている、二人いっしょに眠りの中にいることはできません。

お墓とはちがうのです。そんなの、嫌ですか？ 悲しいですか？ お風呂もベッドも夢も、いっしょじゃなきゃ嫌。せっかく生きているのに。人生の三分の一は眠ってい

るというのに。

お風呂はお墓に似ている、と書いた作家は誰だったか？ それとも、浴槽は棺桶に似ている、だっけ？ あ、トイレで縦長のドアが並んでいるのを見るたびに、縦に並べたお棺に見えると言った女性を思い出しました。

詩を書いていたあの人にまた会いたいです。夢でもいいですから。

○

いま自宅の居間にいる私は自分の視界を意識しようと努めているのですが、その視界がどんな形をしているのか、さっぱり見当つきません。みなさんはどうですか？ 横長であるという気はしますが、長方形だという感じはありません。横に長い楕円形みたくにも感じられます。

そう考えると、映画やテレビやPCの画面に似ていますね。本は縦長ですが、見開くと横に長いようです。昔の巻物もそうでした。人の頭というか意識の中には長方形の枠があるのではないかと疑りたくなります。それをなぞるといふか真似て、物をつくっているのではないか。私たちは長方形に囲まれていませんか？

生まれたばかりの赤ちゃんは、囲いといふか長方形の枠の中にいます。そのあともたいていほぼ長方形の枠の中にいつづけます。家、建物、道路、乗り物、PC、スマホ……。人が亡くなると長方形の棺という枠に入ったまま長方形の炉という枠の中でくべられ、骨壺（これを入れる箱は縦に長細くないですか？）とか墓という枠に収められます。めちゃくちゃ言ってごめんなさい。

人は自分（あるいは自分の中にあるもの）に似たものをつくり、しだいにその自分のつくったものに似てくる、似せてくる、とつねに感じているのですが、人は「自分のつくったもの」に「自分もどき」を見て初めて、「自分そのもの」に気づくのではないか、なんて考えてしまいました。

そのひとつが長方形の枠ではないでしょうか。

○

長方形というと、ひとりである場所をイメージしてしまいます。上で述べた長方形の場所や「容れ物」ではひとりでない場合のほうが多いのにです。たぶん、多くの人に囲まれていても人はひとりであるという気持ちが強くあるからだと思います。

寝床、ベッド、布団、病床、シーツ、ストレッチャー、トイレの個室、棺桶、お墓、遺影。こうした場や容れ物にひとりである人が頭に浮かびます。誰かに似ていますが、想像の中にあるその顔は見えません。見たくないのかもしれませんが。

意識だけとか目だけになって道を進むさまが、寝際によく浮かぶのは車に乗っている時を思いだしているのかもしれませんが。道は、たとえそれが獣道であっても、舗装された道路であっても長方形を延長していったものに見えます。

テレビにしろ、映画にしろ、液晶画面にしろ、本にしろ、車窓にしろ、枠があり、その枠はほぼ横に長い四角に見えます。視界もほぼ横長の楕円形に思えます。その横に長い長方形の枠のある光景を見ながら、人は生きていく。そのあいだに枠を意識することはまれにしかない。

こういうのはこじつけなのでしょうが、こじつけというAとBに置き換える作業が、視覚や知覚全般の根底にあり、たとえば言語活動や広義の比喩や印象やイメージという形で、人においてあらわれているのだと思われます。目だけでなく、また意識だけでなく、魂の働きだという気がします。

○

そっくりなところがそっくりなのです。そっくりな点がそっくりにそっくりなのです。これもレトリックですけど。

スマホという大量生産された製品のシンクロ振りに、それを使う人の身振りのシンクロが重なるという意味です。つまり、シンクロにシンクロする。

スマホを使っている人はスマホに似てくるというのは、それくらいの意味です。

スマホに限りません。車がそうです。自転車もそうです。三輪車もそうかもしれません。

ボールペン、消しゴム、ノート、お箸、絆創膏、腕時計、下着、靴下、眼鏡、シャワー、便器、ベッド、乳母車、棺。どれも大量生産されたそっくりさんたちですが、それを使うとき、人はそれぞれそっくりな仕草や表情をします。

ひとりひとりの顔も個性も違いますが、やることがそっくりなのです。

○

枠と境。

名づけて手なずけることが難しいもの。そもそも言葉にするのが難しいもの。

difficult to name

difficult to tame

difficult to frame

抽象だから、似ているというよりも、そっくりというよりも、同じであり、同一。同期。

same

なぞ、なぞをなぞるというゲーム。なぞるが目的化して空回りする。

game to play

aim

aimless game to play

何のため？ 名前のため？

aim、name、fame、frame

それは罠だってば！

You're framed!

筋書き (aim) をなぞり、名 (name・fame) を残し、枠 (frame) を残すのに血道を上げる。

ゲーム (game) をプレイ (play・演じ戯れ競い奏で賭け、なぞり) しながら、自分が獲物と餌食 (game・prey) になってしまうのに気づかない。いまは祈る (pray) べき時なのに。player ではなく prayer であるべきなのに。

いまはもう、両の足で立つのもままならないのに気づかない。

We're already frail and lame.

言葉にひれ伏し、辻褃合わせに終始する非難合戦。

blame game

敵に屈しているのではなく、言葉という枠に屈していることに気づかない。

shame

*

It's the blame game.

It's time the game came to the end.

Who is to blame?

Shame on who?

*

謎も境も、知ろうとしたり分かろうとしたとたんに消える。

気づいたとたんに枠でも境でもなくなる。

意味であり無意味。抽象であり具象。中傷であり愚笑。

*

文字の形と音が意味をなす。同音で一瞬だけむすびつけられる文字とイメージと事物。
韻、隠、陰、淫、印、因、姻。

偶然と必然が意味を無くし、同時に意味を有む瞬間。

そもそもないものをなぞるといふ謎。空の雲に何かをなぞるといふ謎。その形を指や
目でなぞるといふ不思議。

なぞることで枠と境が立ちあらわれる、とつぜんの異物感と異物性。

*

どうして、文字の形、文字が喚起する音（おん）、形と音が呼びさますイメージと意味
という似ても似つかない異質な物と事と言（こと）同士が、そこに立ちあらわれてしま
うのだろう。こんな不思議なことがあっていいのだろうか。

その不思議が当り前のこととして見過ごされるという、さらなる不可思議さ。これは
知恵にちがいない。これこそ、人知なのだろう。さもなければ、人は日常生活をいと
めない。

線で文字をなぞるといふ謎。目でなぞるを追うといふ不思議。目線、視線が線である
不可解さ。

無意識になぞるべきもの。それが人の知恵、人知、障地。最後で最期の知、血、稚、痴、
恥、遅。

○

そっくりなものはたいてい人間がつくり出したものではないでしょうか。
そっくりな点がそっくりなのです。
それくらいそっくり。不自然なのです。

人には同じに見える、そっくりなものには自然物にはない精巧さが備わっています。

同じものなんて、人がつくりえないかぎりないのではないのでしょうか。

人がつくるそっくりなものには、どこか人に似たところがあります。部分的に似ているも含めて。

人に似ているのは、むしろ人が無意識に似せているからかもしれません。

自分や自分の仲間に似ているから安心するのです。

人は不気味なものはつくりません。不気味に似たものはつくりませんよ。でも、何にも似ていない不気味なものはつくりません。

○

真似る。

荒唐無稽で根拠なしの空想。馬鹿馬鹿しくてがっかりするしかないような話。

似せてつくったものに似せる、真似てつくったものを真似る。馬鹿馬鹿しい、馬鹿も休み休み言え、と言いたくなるような話。

そもそも物語は人がつくったもの。現実なり空想なりを見聞きして、それを「あたかも目の前にあるように」語るのが、物語。

*

物語を模倣する人間についての小説。

物語というジャンルについての復習、小説というジャンルの予習。まさか、小説を壊しているのではないか。できたばかりのジャンルが既に壊れかけている。

*

小説を模倣する人間についての小説。小説と現実を混同してしまう人間についての小説。

小説というジャンルの始まりと洗練。律儀と愚鈍が同義であると誰かに見破られることになる。

小説を模倣するボヴァリーを人は笑えるだろうか。映画を、テレビドラマを、CMを、アニメを、(演じる)俳優を、ストーリーを、ドラマを、キャラクターを、出来事を、事件を、報道を、ディスプレイに映った像やテキストを真似て、引用し、似せて、なりきる私たちは、そっくりな身振りをしていないだろうか。

ポバリズムとは、私たちのことではないか。

フロベールが「ボヴァリー夫人は私だ」と言ったという神話があるが、そう口にすべきなのは、私たち一人ひとりではないのか。ボヴァリー夫人は私たちなのだ。

○

見えないものは目の前にある。

テレビ、映画、写真、絵画、文学、美術、映像、動画——こうしたものは人が現実の影、つまり現実とそっくりなものを求めて作った影です。

目的があり、ストーリーやドラマ、つまり意味のある影です。だからぞくぞくわくわくするわけですが、これだけ意味に満ちた影に囲まれて生きっていると疲れることがあります。

*

簡単に言えば、人は「見えている」はずのものをしばしば「見ておらず」、むしろ「見えないもの」を「想像して見ている」(いわば鏡の中に見ている)のであり、「見えているはずのもの」よりも、その「想像して見ているもの」のほうにより興味と愛着を持っていて、その結果として、人には「ないもの」を「ある」と錯覚し、さらにはその錯覚を強化して「ある」と決めるという仕組みが備わっているということです。これがラカンについての私なりのまとめでもあります。

○

杵にひれ伏す。

人の作るものとは、言葉であり、物であり、事です。そのどれにも杵がありますが、杵とは境でもあります。

杵も境も、切り取るからできるものです。「切り取る」には「切り捨てる」がともないます。

そもそも切り取るのは、すっきりとしてきれいに見せるためです。持ち運んだり、簡単にさくさく処理するためには、すっきりとして無駄のない形をしていなければなりません。軽いことは絶対条件です。

軽くてすっきりしているのは、杵と境がある証拠だとも言えます。要するに不自然なのです。

＊

自然界には杵と境はないにもかかわらず、人は自然界に杵と境を作ることで、言葉の世界と現実の世界を一致させてきました。自然界に杵と境を作ることは、世界の言葉化でもあるのです。

自然も世界も、人の都合のいいように変えられてきたと言えますが、人はこの自然と世界の中にいるのであり、その逆ではありません。人も言葉化されてきたのです。

人は言葉を崇め、言葉にひれ伏しています。言葉の上での辻褃合わせと筋を通すことに血道を上げています。しかも、そのことに気づいていなかったり、気づいたとしても事の大きさにひるみ、すぐに忘れます。

それが人の面子（体裁）であり、同時に尊厳（プライド）であるとすれば、悲しいレトリックです。

＊

We're framed. はめられた。

○

決めたのではなく決まった。

鏡、影、落書き、絵画、写真、映画（影や幻影の進化したもの）、テレビ、動画、VR。これほど人が「見る」に取り憑かれているのは、じつはいまだに「見えていない」からであり、その不十分な「見る」を補助するような物や仕組みや枠組みをつくるたびに、思いがけない、つまり想定外の「見る」や「見える」を見てしまい、驚き、ぶったまげ、何かにはっと気づく。そんなことを繰り返してきた気がします。

そう考えると、「見る」というのは「とりあえずつくった言葉」であり、その「見る」について、人は何も分かっていないのではないかというふうに思えます。「見る」「見える」という言葉をつくったから、「見る」「見える」んだ、うん、そうだ、と「決めた」とも言えそうです。

なにしろ、人は「○△X」という言葉をつくって、その次に「○△Xとは何か？」と問い、思い悩む生物なのです。考えれば考えるほど、自分に当てはまります。いまもやっていますね。

＊

人は「決めた」と思っているのに、じつは「決まった」のではないのでしょうか。

同様に、事物を「作った」のではなく、「できた」。言葉を「放った・発した・話した・放した・離れた」のではなく、「離れた」。「書いた・描いた」のではなく、「書けた・描けた」。「掛けた」のではなく、「掛かった」。「賭ける」のではなく、単なる「賭け」。

つまり、人の行為は、その行為をしたとたんに、人を離れて人の外での出来事になっているという意味です。要するに、人の行為は外にあるのです。さらにいえば、人の思いどおりにならないという意味で「外」なのです。

「決める」は人の為すこと、「決まる」は人知を超えている。そんな気がします。べつに神とか神秘を持ちだす話ではなく、「外にあるから見えない」だけなのでしょう。

だいたいにおいて、人が神や神秘を持ちだすのは、人が自分の落ち度を認めたくないときなのです。

「目の前にありながら外にあって見えない」という言葉の綾を文字どおりに取るしかなさそうです。

＊

言葉の綾と現実の綾が食い違っても当然なのです。言葉の世界と現実の世界と思いの世界は、それぞれ別個の論理と文法に従っていると思われるからです。

ただし、「なぞる」は「なぞられる」のではなく、「謎」である気がします。「賭ける」が「賭けられる」のではなく、「賭け」であるように。

「なぞる」も「賭ける」も外にあるようには見えなくて、つまり目の前になくて、それでいて見えないのですから。謎です。外にない外なのかもしれません。

「なぞ(る)」と「賭け(る)」——おそらく「決まる・決まり」も——の対象であり主体だと思われる(この三者には共通して固定化指向が強いという特徴があります)、文字はいったいどこから来たのでしょうか。どこへ行くのでしょうか。

○

影に先立つ。

かつて先立ったはずの私たちが、いつのまにか影や言葉に先立たれ、その私たちがいつか影や言葉に先立つことになる。「先立つ」には「前に立つ」や「先に起こる」と「先に亡くなる」の両義があります。

ことのはに さきだつひとを おくるかげ

＊

鏡、落書き、絵画、文字、書物、文書、写真、映画、テレビ、動画、VR——。人のつくった影たちは何らかの形で残る気がします。

初めは人が影に先立ったのに、影が人に先立つようになり、最後には人が影に先立つのでしょうか。あるじをなくした影たち、いや、そもそも影たちはしもべではなかったのかもしれない。

つねに人の外にあり、ときどき人の中に入ったり出たりする、人の思いのままにならない「外」であるもの。影は不動、人が揺らぐ。

とりわけ気になるのは、人のつくった影の中で最もしぶとい文字です。

人に先立たれた文字。人の影であったはずの文字が残る。影が残る。影は人を見送ってくれるのでしょうか。そのさまを思いえがくと苦しくなります。

ヒを浴びて 影に先立つ 空睨み

人が影を落とした大地と水面（みなも）には、もはや人の影はない。そんな地球上で、人のつくった影たちがどこかに残っている。遺っているのではなく、生き残っている。ひょっとすると、増えつづけるのではなく、殖えつづけている。

そうしたさまが、オブセッションとなって離れません。寝入り際にも、眠っている最中にも、浮かぶことがあります。

＊

消えないだけに、残るだけに、しかもいまや急速に増えているだけに——複製でありながら同一であるという最強の抽象を武器にして——、文字が気に掛かります。文字の暴力的なまでの異物性が気になってなりません。こんなものはこの星で他にありませんか。

とつぜんどこかからやって来た感のある文字は、なぞるを固定化する。なぞるを暴力的に固めて居直りつづけようとする。

先立つ人を見送るかのように（これでは、まるで人は利用されただけで終わるかのようです）。新たななぞり手に先立つかのように。待つかのように。

文字は影どころか、杵なのです。

線からなる文字が、なぞるべき杵という棺に見えてなりません。語源はさておき、駄洒落と掛け詞好きの私にとって、棺は分く（分ける）杵です。別く（別れる）杵なのです。杵に収める者と収まる者とのわかれです。

棺下ろし 境で別れ 雲疾し

III

引用

(夏目漱石の『吾輩は猫である』より引用)

の

(芥川龍之介の『杜子春』より引用)

織

(紫式部の『源氏物語』より引用)

物

(中原中也の『感情喪失時代』より引用)

○

どこまでが引用でどこまでがオリジナルなのでしょう。
どこまでが借り物でどこまでが自分の物なのでしょう。
どこまでが借り物でどこまでが仮の物なのでしょう。
どこまでがコピー（複製）でどこまでがオリジナルなのでしょう。
どこまでがコピー（宣伝文句）でどこまでが詩の文句なのでしょう。

どこまでが詩でどこまでがデタラメなのでしょう。
どこまでがデタラメでどこまでがおふざけなのでしょう。
どこまでが本気でどこまでが正気でどこまでが狂気なのでしょう。

どこまでが本物でどこまでが偽物なのでしょう。
どこまでが偽物でどこまでが似たものなのでしょう。
どこまでが偽物でどこまでが似せたものなのでしょう。
どこまでが偽物でどこまでが複製なのでしょう。
どこまでが本当でどこまでが嘘なのでしょう。

引用の元をたどるとそれもまた引用だったりして。
借り物の元をたどるとそれもまた借り物だったりして。

コピーの元をたどるとそれもまたコピーだったりして。

コピーの中にバグや変異やズレが含まれていたりして。
そっくりなのに中身が空だったりして。

起源神話の根強さ。
オリジナル神話のたくましさ。
本物神話のしつこさ。



あなたが持っているある本を開いてみるとします。

ある一文があります。印刷物であるその本はどこか他にもあるはずで

あなたが見ている一文は、どこか他にある本の一文と同じはずで

その一文を引用として明記するのではなく、自分の記事の中で自分の創作として公表したとします。

それは盗作でしょうか。著作権に触れる行為として責められるべきものなのでしょうか。

その一文の長さ、つまりデータの量の問題でしょうか。短い一文ならOK、長い一文ならたぶん問題かも、二文ならアウト——その程度の話なのでしょうか。

あるいは、少し手を加えて変えればそれで問題なしと考えていいのでしょうか。誰でも書きそうなものなら大丈夫だという程度の認識でいいのでしょうか。

それとも、単に良心の問題なのでしょうか。ばれたら、偶然の一致じゃないですか、ととぼければいいのでしょうか。

パロディですよ、オマージュです、と言って笑って済ませばいい問題なのでしょうか。

私には分かりません。

文学だけの問題ではありませんね。音楽、アート、科学技術、ビジネス、学問全般において活動する際にも避けられない問題のようです。

いっしょに考えてみませんか。



みなさんは、俳句を詠む場合、まずどうなさいますか？　今まで俳句を詠んだことのないヒトが、俳句を詠もうとすると、5・7・5という規則だけをあたまに入れて、いきなり、森羅万象に目を向けるなんてことをするのでしょうか？　そのまえに、既存の俳句を読むだろうと思います。

*俳句は、いきなり詠むのではなく、まず読む。

のです。

和歌であっても、ヨーロッパの言語の定型詩でも、状況は同じだと思います。さらに言うなら、韻文だけでなく散文でも同じことが言えるような気がします。たとえば、基本的に何を書いてもいい、

*小説は、小説を読んでから書ける（＝掛ける＝賭ける）。

のです。話を一気に飛躍させますが、ヒトの赤ちゃんは、いきなり言葉をしゃべりません。

*赤ん坊は、話し言葉を聞いてから話すようになる。

のです。



言葉はみんなのもの。

誰もが生まれた時に、既にあったもの。

言葉は真似るもの。

誰もがまわりの人の言葉を真似て学んだ。

まねる、と、まねぶ、と、まなぶは、きょうだいだったらしい。

自分が口にする言葉は既に誰かが言ったもの。

自分が書いている言葉は既にどこかに書いてある。

言葉は借り物。

既にある言葉を借りて使わせてもらう。

借り物は返さなきゃならない。

次の世代のために残すもの。

だから、大切に使おう。

言葉はみんなのもの。

誰もが生まれた時に、既にあったもの。

(※お断りしておきますが、著作権を否定しているわけではありません。むしろ著作権を支持しています。ただし著作権は制度であり、著作権という考えが出て来たのは、言葉の長い歴史の中ではほんの最近の出来事なのです。これを機に著作権についてもっと勉強しようと思います。)

○

レプリカ、レプリカ、レプリカ

上の三つのうち、真ん中の「力」は漢字の「ちから・リキ」なんですけど、こんなの分かりませんよね。

アンドロイド、アンドロイド、アンドロイド

上の三つのうち、最初の「口」は漢字の「くち・コウ」なんですけど、これもそっくり。違っているなんて分かりませんよね。

でも、デジタル化された情報としては別物らしいのです。アナログな体感重視派とし

ては、もう泣きそうになりながらも「同じだ」と言いたいです。ちなみに、今使った「アナログ」ではいたずらはしていませんよ。

一見そっくりなコピー（あるいはコピーもどき）の中に微小な変異が潜んでいても分からないみたいですね。そう思うと怖いです。

ところで、カフカをカフカと呼んでしまうのは、おそらく学習の成果であって、そう読み間違えないほうが尋常ではないと思われれます。

○

私は散文的な人間で詩歌は作れないのですが、日本の伝統的な定型詩には興味と敬意をいただいています。いまも多くの詠み手がいるのは短歌や俳句ですね。

伝統的な定型詩には先行する膨大な数の作品があります。そうした先人のあるいは先輩の作品を読んで自分でも詠む。「読む」が「詠む」につながる。考えてみるとすごい話じゃありませんか。自分が大きな伝統の連鎖につながる、つらなる、つまりその一部になるのですから。

もっとも、短い定型詩ですから、同一の、あるいはほぼ同じ作品が生まれるという事態も頻繁に起こるみたいですね。私はそうしたジャンルに身を置いて活動していないので、何とも言えませんが.....。想像すると怖いです。

○

世界は似たものに満ちている。
世界は顔で満ちあふれている。

似ているはいたるところにある。
同じや同一はない。

似ているは印象。
同じと同一は検証しなければならない。それも機材を用いて科学的に精密に。

似ているが人にとっての体感できる現実。
同じと同一は人にとっては抽象でしかない。

○

剽窃

(■■の『■■』より引用)

から

(詠み人知らず)

遠く

(author unknown)

離れて

(anonymous)

※「剽窃（ひょうせつ）」はあまり使われない言葉ですね。他人の作品やアイデアを盗作して発表する行為のことです。引用やパロディやオマージュが剽窃と見なされることがよくあります。

○

「MajiでHyosestuする5秒前」・「世界で一つだけの剽窃」・「剽窃3兄弟」・「剽窃は突然に」・「CAN YOU 剽窃？」・「剽窃は勝つ」・「世界中の誰よりきっと剽窃」・「硝子の剽窃」・「Addicted To 剽窃」・「ロマンスの剽窃さま」・「剽窃されるより剽窃したい」・「剽窃するボンボコリン」・「ヒョウセツノムコウ」・「剽窃するフォーチュンくっきー！」・「ずるイ剽窃」

3窃・剽窃の不時着・あつまれ剽窃の森・ヒョウセツノマスク・オンライン剽窃・剽窃の刃・GOTO ひょうせつ・ひょうせつちゃん・剽窃などあろうはずがありません・ぼーっと剽窃してんじゃねーよ！・剽窃論法・ひょうせつずラブ・剽窃ファースト・剽窃の2回生・げす剽窃・安心して下さい、剽窃してますよ。・剽窃ウォッチ・ヒョウセツミクス・特定剽窃保護法・ブラック剽窃・手ぶらで剽窃させるわけにはいかない・窃活・イク窃・草食系剽窃・名ばかり剽窃・ゲリラ剽窃・後期剽窃者・消えた剽窃・剽窃王子・剽トレ・剽窃があるさ

『ライ麦畑で剽窃して』・『ボクはイエローでホワイトで、ちょっと剽窃』・『剽窃写真集』・『超凶解剽窃』・『剽窃少年の事件簿』・『剽窃宣言』・『真夏の夜の剽窃』・『剽窃する勇氣』

『剽窃を10倍楽しくする方法』・『剽窃と瓢箪の見分け方』・『盗作と倒錯と創作の見分け方』・『剽窃の時』・『金持ち剽窃さん貧乏剽窃さん』・『剽窃のかんづめ』・『だからあなたも剽窃して』・『こんなに剽窃していいのかしら』・『剽窃タワー オカンとオイラと、時々、ゴットン』・『ノルウェイの剽窃』・『剽窃記念日』・『君たちはどう剽窃するか』・『きみの剽窃をたべたい』・『誰のために剽窃するのか』・『世界の中心で、剽窃を叫ぶ』・『チーズはどこで剽窃中なのか』・『剽窃ちゃん』・『パリー・ホッターと剽窃の部屋』・『剽窃の壁』・『老人と剽窃』・『剽窃失格』



小説から遠く離れて
ベトナムから遠く離れて
アメリカから遠く離れて
テキストから遠く離れて
フタバから遠く離れて
双葉から遠く離れて
ぼくから遠く離れて
君から遠くはなれて
シブヤから遠く離れて
あの戦争から遠く離れて
彫刻から遠く離れて
起源から遠く離れて
愛から遠く離れて
ミヤコから遠く離れて、みる
江國香織から遠く離れて
歓声から遠く離れて
リバプールから遠く離れて
カフカから遠く離れて
シナリオから遠く離れて
ルイユから遠くはなれて
“ふつう”から遠くはなれて



似たものは目まいを誘います。
くらくらしてきました。

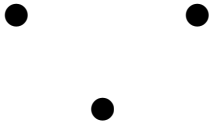
一方で適度の似たものは安心感をもたらすようです。
というか、人は常に適度に似たものに囲まれているように思えます。

何にも似ていないものに囲まれたとしたら、人はメンタルをやられる気がします。

人は似たものに囲まれている。
それが常態なのかもしれません。

持論ですが、適度に似たものとは顔です。比喻でもあり比喩でもありません。
人はいたるところに顔を見ます。

人面○○どころではなく、左右の目と口に当たる三点があると、もうそれで顔を認めるのに十分なのだそうです。こういう空想は子どものほうが得意だといわれています。



世界は顔に満ち満ちているのです。
ときには不気味な顔も見ますが、基本的に人は顔に囲まれていることで安心します。

人にとって最初の顔は、やはり「母親」（括弧付きです）なのかもしれません。



真、偽、本、顔、素顔、真性、本性、真名、真字、本名、偽名。



裏千家と表千家。どんな道、つまり芸道にも派閥が付きものです。流派、主流派と非主流派、正統と異端、多数派と少数派、保守と革新、本家と分家、正と邪、主と従、下克上、復古……。

西ローマ帝国と東ローマ帝国、西の大関と東の大関、北軍と南軍、北酒場と南酒場、右大臣と左大臣、右往左往、左前と右前、上り電車と下り電車、上座と下座と土下座、うなぎ登りつつるべ落とし。

パンタレイ。

京都○川と大阪西○と東京○川。木村屋、きむらや、キムラヤ。柔道と judo、俳句と haiku、野球とベースボールとクリケットとソフトボールとカラーボール野球と野球拳.....。

パンタレイ。

○

*連想ゲーム、一人ブレインストーミング

うつす、写す、移す、映す、遷す、撮す、伝染す
うつる、写る、移る、映る、遷る、撮る、伝染る

DNA、親子、きょうだい、はらから、親族、細胞、生殖、性交、分裂、繁殖、双生児、バニシング・ツイン、多胎児

印刷、なぞる

ならう、倣う、倣う
まねる、真似る

まなぶ、まねぶ、学ぶ、真似ぶ

*

鏡、カメラ、水面、反射、幻灯、影、映画、幻灯、罅・エコー、反響
鏡像、ネガ、ポジ、縮小、拡大

はなす、話す、放す、離す
うける、受ける、承ける、請ける
つたえる、伝える、つたわる、伝わる

糸電話、電報、テレックス、電信、無線、電話、放送、インターネット、網、電網
感染、伝染、感染、転写、複写、アクシデント、変異

印刷術、複製文化、複写機、コピーペースト、コピーペ
デジタル化、視覚化、映像化、映画化、舞台化、言語化

真似、複製、レプリカ、パプリカ、フーリン、ふーせん、言葉遊び、比喩、暗喩、隠喩、直喩、だじゃれ、オヤジギャグ、偽物、贋作、盗作、剽窃、オマージュ、本歌取り、パロディ、伝承、伝統文化、師弟、本家・分家、本流・亜流、正統・異端、著作権侵害、クリエイティブ・コモンズ、ミメーシス、ミーム、パクリ、もじり、風刺、形態模写、文体模写、物真似、そっくりのど自慢、そっくりショー、擬態

印刷、謄写版、印鑑、シャチハタ、ハンコ、芋ハンコ、消しゴムハンコ

同調、共鳴、共振、シンクロ、同情、思いやり、感情移入、なりきり、同意、賛成、賛同、共感

想像、創造、捏造、妄想

変換、換金、転換、交換、転移、変異、変移、変位、代理、代議制、ルプレザンタシオン、上演、代行、代理店、エージェント、表象、記号、信号、象徴

パラレルワールド、反世界、反宇宙、反物質、反粒子、陰陽、陽子、中性子、イオン、プラスマイナス、対称・非対称、VR、絵空事

再生、再現、リピート、変奏、アレンジ、編曲

仮装、女装、男装、異装、ユニホーム、お仕着せ、制服

インターネット・ミーム、イミテーション、イミテーションゴールド、まがいもの、章句品サンプル、フェイクファー、フェイクニュース、人工肉、アンドロイド、マネキン、ハウスマヌカン、分身、ゴーストライター、影武者、そっくりさん、こっくりさん、ひよっこりさん

多重人格、二重人格、分身

RT、リレー、リピート、リプロダクション、リストア、リフォーム、リサイクル、レコード、ルプレザンタシオン、レプリカ、リプレー、リプリー、太陽がいっぱい、パトリシア・ハイスミス、分身

引用、パッチワーク、ごった煮、コラージュ、ブリコラージュ

フュージョン、異化、アドリブ、ジャズ、パスティーシュ

インスピレーション・靈感、憑依、オートマティスム（自動筆記）、神託、イタコメタフィクション、小説の小説、演劇の演劇、作中劇、不条理演劇、シュール、ドタバタ

ジャズ、アドリブ、インプロヴィゼーション、即興、でまかせ、おまじない、ナンセンス、ノンセンス

○

今回は、そのうちの特に「そっくりなもの」について、前半で、ヒトや他の生き物の顔を見分けることを例にとり、あれこれと書いてみました。変な質問も、いくつかしました。「そっくりである」と知覚することの不思議さと、そのメカニズムの複雑さを、体感的に感じとっていただければ、「記号」というトリトメのないものを「感じとる」のに、とても役立つからです。たった今、「感じとる」という言葉を使い、「理解する」と書かなかったのは、トリトメのないものを、頭で理解しようとするのは、ある種の矛盾をはらんでいるからです。

もしも、あなたのまわりに、外見がそっくりな人たちが、いっぱいいたとします。それは不気味ですよ。でも、外見がそっくりなものたちが、いっぱいあったとしても、別に不気味ではありませんね。スーパーで売られるために陳列されている製品が、「そっくりなものたち」の典型例です。「そっくりなヒトの羅列」＝「不気味」と「そっくりな商品の羅列」＝「当たり前」との差は、何でしょう？

このように、自分が当たり前だと思っていることに、揺さぶりをかけたり、突拍子もない質問で軽いめまいを覚える。そのさいには、脳を使って考えてみるだけでなく、自分の知覚を総動員して「体で考えてみる」。そうしたことが、現在の人たちが忘れかけている、大切な「知覚する」といういとなみの1つだと思ふのです。

世界とは、頭による理解可能とは縁遠い「何か」なのです。その「何か」が「分かる」ことを苦渋の果てに放棄し、「分からない」or「トリトメのなさ」を体感する。そうした行為の対象となるべきものが、たとえば「そっくり」なのだと思います。個人的な意見ですが、「そっくり」はきわめて現代的な状態だと思います。

コピー＝複製がいとも簡単になったのは、ヒトの歴史という尺度から見れば、ごく最近の出来事だからです。これほど「そっくり」に囲まれた状況は、ヒトの歴史の中ではなかったと考えられます。安易に「記号」という言葉で「そっくり」を理解した気持ちになったり、お茶を濁したくありません。

○

そっくりがそっくりをそっくりな場所でそっくりなやり方で売る、そしてそっくりなお客さんたちがそっくりなやり方で買う。そして、自分もまたそっくり化していることにふと気づき、嘔然となる。

おそらくこれが資本主義なのでしょう。というか、資本主義の顔であり表情であり身振りなのでしょう。

IV

言葉、話し言葉

口承文学

口伝え

伝承

うける、受ける、承ける、請ける

つたえる、伝える、つたわる、伝わる



言葉、文字

聖書の写本

経典の写本

源氏物語の写本

うつす、写す、移す、映す、遷す、撮す、伝染す

うつる、写る、移る、映る、遷る、撮る、伝染る



* 「言い換える＝置き換える＝伝える＝知らせる＝言葉にする＝何かの代わりに何か以外のものを用いる」

という意味での

* 「翻訳」

は、

* 不可能

だというほうに傾いています。これを「翻訳」とすると、

*異言語間の翻訳は大いなる妥協でしかない。

とか、

*個人レベルで、ヒトとヒトとは分かり合えない。

となります（※「翻訳」は不可能だという意味のことを書いた後に、「翻訳」をやっている。）。

○

ところで、

*世界一のベストセラーは、バイブル＝聖書だ。

と聞いたことがあります。実際、あれほど多数の言語に翻訳された書物はないのではないでしょうか。しかも、

*何語で書かれて＝訳されていても聖典だ。

ということらしいのです。

*聖典としての翻訳を絶対に認めないクルアーン（コーラン）

とは、考え方が対照的ですね。

*

翻訳と原著は別物だというのは、突拍子もないたとえかもしれませんが、夏目漱石の『我輩は猫である』の東北弁訳と関西弁訳を想像してみると分かりやすいのではないのでしょうか。そんな「翻訳」が二つあったとして、原文というものがあり、その翻訳は原文と「等価なもの」であるはずだ、と頭で理解していても、原文を含めた三者が同じものであるとは日本語の語感が許さないのではないのでしょうか。

語感とは体感にきわめて近く、身体的なものだと思います。理屈や知識でねじ伏せる

わけにはいかないという意味です。

○

似たもの
そっくりなもの
同じもの
ほぼ同じもの
同一のもの
等価なもの
等しいもの

あなたの持っている消しゴムはどこかにある消しゴムと同じ
でもそれらは同一ではない。同一のものは世界に一つしかないはず。分子とか原子レベルの話でしょう。

むしろ、それはそっくりなのです。
そっくりなところがそっくりなのです。
激似なのです。

人は似ているとそっくりしか認識できません。印象とも言います。
その意味で、同じ、同一、等価、等しいは個人のレベルにおいては抽象なのかもしれません。機器をもちいない限り、検証不能だからです。

さて、

* 「似ている」が、あちこちにあふれている。

一方で、

* 「同一である」ということは、きわめて、まれな現象である。

と言えそうです。

なぜなら、「同一であるものは、原則として＝基本的に、ある特定の1ヶ所だけにしか存在し得ない」という屁理屈が理由であるだけでなく、「同一である」ことを、ヒトが知覚したり、知覚した結果を認識し、断言するに至るまでには、かなりの時間＝間（＝ま・

あわい) と隔たり=距離が必要だからです。

*ヒトにとって、「似ている」は「近しい=親しい」現象であるが、「同一である」は「ほぼ知覚不能」な現象である。

と言っても言いすぎではないような気がします。

○

うつす、写す、移す、映す、遷す、撮す、伝染す
うつる、写る、移る、映る、遷る、撮る、伝染る

○

初めて目にする影、初めて見る鏡、初めて覗くカメラのファインダー、初めて見る写真——。思いつくままに並べたフレーズですが、どれもが「うつる」と関係あります。影に映る、鏡に映る、ファインダー越しの眼に映る、写真に写る。

こうした行為や身振りを個人レベルで初めて体験するさまを想像するとわくわくどころか、ぞくぞくしてきませんか？ 自分の記憶の中の、そうした場面を思いだしてみてください。と言われても、なかなか覚えていませんよね。

*

人類のレベルで空想してみましょう。

初めて目にする影、初めて見る鏡、初めて覗くカメラのファインダー、初めて見る写真。影に映る、鏡に映る、ファインダー越しの眼に映る、写真に写る。

こうした身振りや行為を人類というレベルで初めて体験したさまを想像すると、これまた気が遠くなりそうです。不思議だったでしょうね。たまげたにちがいありません。

初めての鏡なんて、雨のあとの水たまりとか川とか湖の水面だったのではないのでしょうか。水面に映った自分の姿を覗きこんだナルキッソスの話を思いだします。エーコー

(エコー)の話もありましたね。こだまは、木霊、木魂、砦ですが、これも音声が遠くへとうつるわけです。

「うつる」には距離がともないます。その距離は空間的であったり時間的なものでしょう。そう考えると「うつる」は、「つたわる」「つたえる」に近そうですね。

＊

「うつる」の漢字をまじえた表記には自信がありません。辞書や用字辞典で確かめながら書きますが、例文が同じだったりして、自分の書きたい文でどちらをつかったらいいのか、迷うことがよくあります。とくに「映る」と「写る」は迷います。

「にやけた顔で写っている」「裏のページの絵が写って読みにくい」「鏡に映った顔」「障子に映る人影」なんて複数の辞書やネット辞書でも見かける例です。孫引きというやつですね。辞書の例文や語義は、伝染んです。

きょとんとなさっている、お若いあなた、「うつるんです」と読んでください。とってもシュールで味わいのある漫画です。

うつる、写る、映る、移る、遷る、伝染る、流行る、孫引る、引用る、模倣る、写本る、写経る、印刷る、翻訳る、映画る、写真る、複製る、放送る、網路る、偽造る、剽窃る、盗作る、広告る、宣伝る、布教る、革命る――。

こうしたものは、ぜんぶ、うつるんです。ですから、ぜんぶ「うつる」と読んでください。よくご覧ください。人類の歴史そのものでもあります。

○

今思い出しましたが、ジェイムズ・M・ケイン作の『郵便配達はいつもベルを二度鳴らす』（または『郵便配達はベルを二度鳴らす』）という邦訳が、田中西二郎訳、田中小実昌訳、中田耕治訳、小鷹信光訳の四種類も楽しめた（つまり本屋に並んでいた）時期がありました。こっちは原著なしで、日本語訳だけを四種類読み比べましたが、わくわくするような体験でした。若くなければできない冒険だと今になって思います。そう言

えば、J・D・サリンジャーの『ナイン・ストーリーズ』（または『九つの物語』）もいくつかの訳本がありましたね。私は野崎孝による邦訳しか読んだことはありませんが。

『失われた時を求めて』の井上究一郎訳を私が好きなのは、律儀に訳してあるからです。つまり、センテンスが長くてとても読みにくいのです。ああいうのを難しいとは私は言いません。とにかく読みにくいのです。でも、あれよあれよという感じで気持ち良く読み進めることができました（難しいものはあれよあれよとは読めません、私の場合には）。「できました」と過去形なのが残念です。寂しいです。今は無理ですね。

井上訳を原文に忠実な訳とは言いません。フランス語がろくにできないのに、偉そうな言い方をしてごめんなさい。あれは忠実と言うよりも、律儀な訳なのです。そもそも外国語の作品を原文に忠実に訳すなんてあり得るのでしょうか。はなはだ疑問です。

直訳という言葉思い出しました。そればかりか、意識、逐語訳、逐次訳、大意、抄訳、完訳、改訳、重訳、超訳、名訳、迷訳、誤訳というぐあいに、次々とあたまたに浮かびます。あと、翻案というものもありますね。翻案を広義の翻訳と見なすと、パスティーシュやオマージュや文体模写まで広義の翻訳だと言いたい気分になります。

○

うつす、写す、移す、映す、遷す、撮す、伝染す
うつる、写る、移る、映る、遷る、撮る、伝染る

○

*ヒトがつくるものは、ヒトに似ている。

と前回に書きましたが、今回も、前回に引き続き、

*つくる

の前の段階である、

*似ている

に徹底的にこだわってみたいです。

これを片付けないと、「つくる」に話を移せない気がするのです。「似ている」について考えるさいには、自分自身の実体験や、自分が体感できる経験を材料にするのが、いちばん分かりやすいと思います。何と言っても、世の中でもっとも関心があるのは自分自身であり、もっとも信頼できるのは、自分自身の感性や感覚ではないでしょうか。

＊

似ているもの
そっくりなもの
同じだったり同一かは保留しての話

そっくりなものはたいてい人間がつくり出したものではないでしょうか。
そっくりな点がそっくりなのです。
それくらいそっくり。

人には同じに見える、そっくりなものには自然物にはない精巧さが備わっています。
同じものなんて、人がつくりださないかぎりないのではないのでしょうか。

人がつくるそっくりなものには、どこか人に似たところがあります。部分的に似ているも含めて。
人に似ているのは、むしろ人が無意識に似せているからかもしれません。

自分や自分の仲間に似ているから安心するのです。
人は不気味なものはつくりません。不気味に似たものはつくりませんよ。でも、何にも似ていない不気味なものはつくりません。

テレビは、「記号」と非常に相性がいいのです。おととい行った電気製品の量販店は、「記号」に満ち満ちていました。商品とか製品は、大量生産されて、そっくりなものがたくさん存在しますね。「記号」というもののイメージは、まさにそれなんです。

＊そっくりなものが、多量に並んでいる。そっくりなものが、世界各地に散らばって存在している――。

そういうイメージのものが、「記号」なんです。テレビの売り場なんて、そっくりな（※「同じ」や「同一」とは違います）映像がずらりと並んでいるのですから、それこそ「ほ

んまもん」の記号だらけなんですよ。はい。

>すべてのものは、「記号」という幻（まぼろし）を発している

今、コピペしたのは、さきほど上で書いた文です。

*幻=まぼろし=間ぼろし=間滅し=魔ぼろし=魔滅し

*

ところで、こうやって自己引用をしていると、私は以前からいつも同じことを言っているような気がしてなりません。こうやって記事を書いていると既視感の洪水に襲われる気分になります。

やっていることが同じなんです。同じことを繰り返しているのです。

そっくりなのです。そっくりな点がそっくりなのです。

金太郎飴とそっくり。

進歩がないとしか考えられません。ギネスには「進歩がない」という項目はないのでしょうか。

○

この note 内で投稿する記事は、すべて「随時更新中」にしてあります。

「随時更新中」とは、いったん投稿した記事に随時加筆していくという意味です。いったん投稿したブログ記事をいじりまくる癖のある私にとって苦肉の策なのです。

そんなわけで、記事の内容が大きく変わる可能性があります。現在ここで新規に投稿している記事もまた、ほとんどが過去に投稿したもので、何度もなんども加筆したり書き直して現在の形に至っています。

私にとって新規投稿はないと言えそうです。あるのは再投稿ばかりなのですが、再投稿をするたびにズレが生じるという言い方が正確かもしれません（写す移すたびに何ら

かのズレが生じるという意味では写本と似ています)。

したがって記事間の重複が多く、過去の記事のパッチワーク（いわば自己引用の織物です）、あるいはコラージュみたいな形の記事が目立ちますが、すべては「随時更新中」だからなのです。ご理解いただければ幸いです。

○

始まりと終りは捏造されたもの。つねに揺れうごく、移り変わるがあるだけ。

いま、ここを大切にしたい。移り変わる自分を尊重したい。

未完成を恐れない。断片でいい。重複を恐れない。冗漫でいい。矛盾を恐れない。

*

固定することなく揺らぐ。決定稿などない。暫定を決定と呼ぶのは気休め。

印刷物は固定を指向する。一方でネット上の文章は常時改変と改編にさらされている。これを自由と考えよう。印刷の時代、つまり固定の時代がそこそ長く続いたようだが、その前には写本と口承による時代がそこそよりはずっと長く続いていたことを思い出そう。

写本や写経や口承の時代は必ずしも固定が優勢であったわけではなく、つねに改変と改編があった。作者やオリジナルや本物という観念がまだなかった時代。写し間違い言い間違いや意識的な改変と改編と新たな創作がおそらく罪の意識もなくおこなわれていた時代。

間違いを恐れず、未完成を遠慮することなく、断片であってかまわないから、随時更新中の自分を尊重しよう。

V

さらに嘘っぽい話になりそうですが、鏡に映った自分の姿や、鏡を覗きこんで自分の姿に見入る自分を思うとき、「移る・移す」がなんとなく分かったような気分になります。

「移る・移す」と「映る・映す」に近いものを感じられて、両者の落差が消えるのです。

さらに言うと、鏡の中の自分は映っているというよりも移っているのです。反映というよりも移動を感じるのです。



人間には一人であるべき空間がある、と彼女はよく考える。寢床、風呂、鏡の前、ストレッチャー、病床、死の床、棺、安置室、火葬炉、墓。夢の中や心の中と同様に、そうした場所には誰も入ってほしくない。できれば一人でいたい。一人であるのがいちばん楽、一人である時がいちばん幸せ。家や学校や社会で、トイレこそが彼女にとって一人でいられる場所であり、安らぎを得られる空間だった。

男とホテルに入ることが終わるたびに、里沙はトイレに閉じこもった。便座やバスタブの縁に腰かけてスマホをいじったり、壁やドアの模様や染みを眺めながら考えごとをしたり、壁に寄りかかってうとうとしながら帰る時間を待ったものだった。

相手の意向にかかわらず、ホテルに行くことでその関係は終わった。トイレに閉じこもらなければならないことに、うんざりした。



川端康成の『掌の小説』（新潮文庫）にはいろいろな形式の掌編が多数入っていて、どこからでも手軽に読めるのでファンが多いと聞きます。詩のような小品、物語調、説話風、童話風、心理小説、幻想小説、ミステリー、私小説、随想、怪談、ヴィリエ・ド・リラダンの意味でのコントといった具合です。

”私の家の厠の窓は谷中の斎場の厠と向かい合っている。

二つの厠の間の空地は斎場の芥捨場である。葬式の供花や花環が捨てられる。”
(川端康成作「化粧」(『掌の小説』所収)より引用)

こうして、向かい合ったトイレの窓に見える「老婆」の化粧をする様子や、「十七八の少女」が涙を流した後に「小さい鏡を持ち出し、鏡ににいと一つ笑う」のを観察する「私」の辛らつで残酷な眼差しを描く掌編『化粧』の筆致は見事です。こういう視点から文章が書ける川端を恐ろしく思います。

ただし、この作品をたとえばショートフィルムとして映像化した場合を想像してみると分かるように、単なる「覗き」の話なのです。でも文章で読むと、そういう印象は受けません。少なくとも私にはそうです。引きこまれてしまうからでしょう。川端の小説は、見方を変えると単なる「○○」——あえて書きませんが、ここにはいろいろなレツテルが入ります——だと思われるものが多い気がします。

たとえば『雪国』の冒頭の「指」が出てくる場面や、『眠れる美女』、『片腕』、『みずうみ』を思い出してみてください。よく考えると変であったり、エロかったり、反社会的な行為が描かれますね。でも美しかったり綺麗だったり哀しかったりして、ぐんぐん読ませるし人を感動させるのです。私のいう川端の恐ろしさとはそういう意味です。言葉の魔術師だからでしょうね。

川端康成の作品において「指」と「手」は重要な意味を持ちます。一方、谷崎潤一郎においては何といても「足(脚)」でしょうね。

○

隣人のストーン夫妻が車で旅立つのを手を振って見送った後、妻のアイリーンは自分たちも休暇を取りたいものだと思ふに漏らします。

”そして彼の腕をとって自分の腰に回し、アパートの入口の階段を登った。”
(引用はレイモンド・カーヴァー作『頼むから静かにしてくれ (THE COMPLETE WORKS OF RAYMOND CARVER 1)』村上春樹訳(中央公論社刊)による)

この描写は、後の展開を知っていると象徴的な仕草に見えます。つまり、伏線とも取

れるのです。

夕食を終えると夫のビルがストーン夫妻の住まいに入り、頼まれたとおりに猫に餌をやった後に、バスルームに入る。そして鏡に映った自分の顔を見る。ここまではいいのですが、次に薬品戸棚からハリエット・ストーンに処方されている薬の瓶を見つけて、それを何とポケットにつっこむのです。

この神経は尋常ではないにもかかわらず、抑制された文体で淡々と描写されているために、あれよあれよと読んでしまうとすれば、レイモンド・カーヴァーの術中におちいったことになるでしょう。さらにビルは、居間で植木に水をやったその手で酒の入ったキャビネットを開け、奥にあるウィスキーを取り出して、瓶からふたくち飲みます。

ビルがストーン夫妻の部屋から出るところを引用してみます。

”彼は明かりを消し、そっとドアを閉め、鍵のかかっていることを確認した。何か忘れものをしてきたような気がした。”

何気ない描写ですが、短編や掌編を書き続け、さらには何度も書き直したという職人のようなカーヴァーの作品を目前にしたときには、書かれている言葉を舐めて味わうようにして、ゆっくりと読み進めたいです。「何か忘れものをしてきたような気がした。」というセンテンスが気になります。意味不明というか不可解なので、不気味でもあります。

○

想像してみてください。性行為は五感を総動員した体験であり出来事ではないでしょうか。

交響楽にたとえてもいいと思います。書き言葉や話し言葉以外の広い意味での言葉を相手（人間であったり物であったりします）とやり取りしたり、あるいはひとりの時にはいわば鏡の中の「他者」（空想であったり想像や記憶であったり画像や音声であったりします）とやり取りするわけです。

言葉は交響楽。

言葉は交響楽団。

言葉は管弦楽。

言葉は管弦楽団。

言葉はセッション。

言葉はジャム・セッション。

○

人の顔を見分けるのにどちらかという苦労する私ですが、鏡で見る自分の顔ほど分からないものはありません。見ているのに見えないという気がします。刻々と更新しつつある「いま」であるとか、刻々と更新しつつあるズレであるとかいう、苦しまぎれのレトリックをつかったことがあるほどです。

つまり目の前にある鏡を覗きこんだときに見ているのは形（自分の姿）ではなく「とき」（自分のイメージ＝心象）であるという意味なのですが、もしそうであるなら、自分はかなり動揺し困惑しているにちがひありません。他のものを見るのとは異なる次元にいたいというくらいのお話なのです。

ひょっとすると、鏡の前では見ているのではなく、おののいているとしか考えられません。それくらい鏡を覗くと緊張するのです。たとえば、鏡に映っているとされる自分を見つめながら、いきなり目をつむるとしますね。そのときに瞼の裏か頭の中か知りませんが、自分の顔が浮かんでほしいのに浮かばないのです。

浮かべ浮かべと念じて、浮かぶのはいつか見た写真に映った自分の顔であり、ほんの数秒前に鏡に映ったはずの自分の顔ではないのが不思議でなりません。つまり私の頭の中にある自分の顔は、ぜんぶ写真で見た顔だということになります。

とにかく見えないのです。ひとさまのことは知りません。問いたさうな親しい相手がいらないからなのですが、たとえ親しい人がいたとしても、恥ずかしくて尋ねる気にはならないでしょう。親しい人とはこのたぐいの話はしたくはないのです。

○

しつこくて申し訳ありません。ただいま繰り返した、以上の文章なのですが、何かに似ていませんか？ 言葉です。言葉ほど M の資質を備えているものはこの世にないと思っています。とはいえ、言葉のせいではありません。言葉はヒトがつくった鏡なのです。鏡の国、そして不思議の国に住んでいるヒト。したがって、こういう状況を自業自得とも言います。

そうなのです。ヒトは M の世界に生きているとも言えそうです。それを看破したジル・ドゥルーズはすごいです。特に『意味の論理学』のドゥルーズです。

音であり文字でしかない、つまりきわめて抽象的な存在でもあり、言い換えると「外からやって来ている」言葉に、意味やイメージをになわせているのは、ヒトなのです。



小学校に上がる年、母から自分の氏名を書く練習をさせられた。正式に字を書くのは初めての経験だったと思う。ひらがなと漢字の両方を何度も書かされた。母の真剣な表情が怖くて緊張した。緊張するために、うまく書けない。書いてもすぐ忘れる。すぐに忘れる自分に苛立ち、不安にも感じた。それは母の感情そのものだったにちがいない。ふたりだけの家庭。ふたりの関係は濃密なものだった。

入学式が近づいたある日、母が名札に毛筆で名前を書いてくれた。その時、緊張した面差しで筆を運んでいた母の様子をぼんやりと覚えている。硯で墨をするさいの涼しげな匂いが、かすかに鼻を突いて心地よかった。

新聞紙か折り込み広告の上に何度か下書きをした母が、ようやく清書し、私の左胸に安全ピンで名札をつけてくれた。私は喜んで鏡の前に立った。私は声を上げた。奇妙な虫が名札にへばりついていて、真っ黒でくねくねした虫だった。その様子を見ていた母が笑った。鏡に映った物が左右に見えることを、私は知らなかったのである。文字を鏡像として見て、初めて鏡の性質に気づいたらしい。

今、私は母の手帳に書かれた名前の羅列をながめている。同じ姓を冠して並んでいる名前たち。男名。女名。苗字なしで列をなしている名前たち。

女性の名にはひらがなだけのものもある。「——子」というふうに、ひらがなの下に漢字が添えられている名もある。男名は漢字のものばかりだ。私の名と漢字で一字違いの名がある。結局は、捨てられた名前たち。みんな、どこかで生きている気がする。

○

他の人に似ているとか、他人を真似るだけではなく、自分に似ているとか、自分を模倣するということがあります。

詩、小説、造形芸術、演劇、イラスト、漫画、作曲、伝統芸能といったクリエイティブな活動にたずさわっている人の作品には、その作り手独自のスタイルや型があります。これはプロ・アマを問わず見られます。悪い言い方をすればワンパターンでありマンネリズムです。

あ、これ、○○の曲でしょ？ △△の映画は見始めて三分でだいたい分かるね。確かに、このドラマは、いかにも□□さんの脚本ばいストーリーね。これって、あの人の作でしょ？ まだだ！ 「なんでレンブラントだって分かったの？」「背景の色、そして筆さばきかな」

創作とは自分を真似ることではないかと思えるほどです。

自分を真似る。自分に似せる。自分を模倣しつづけることは、随時更新することだとも言えるでしょう。鏡に向かい、そこに映った像を眺め、その像（イメージ）を模倣しつづけながら、少しずつずれていく。そのずれが更新なのです。

自分であると思いきこんでいる鏡の中の像には必ず他者が入り込んでいるはずです。自分を眺めることが他者を認めることでないと誰が断言できるのでしょうか。鏡の中の自分の顔や姿に自分以外の何かを認めるのは、誰もが日常で経験することではないでしょうか。

見るには必ず「ずれ」がともないます。そのずれが何とのずれなのかは、分からないと思います。自と他のさかいのない世界とは鏡の中だという気がしてなりません。鏡（この鏡を比喻と取っていただいかまいません）に映っているものは「似たもの」なのです。「何か」そのものではありません。

何かに似ているのです。その何かは何なの分らない。ひょっとすると、鏡（この鏡を比喩と取っていただいてもかまいません、たとえば目とか作品とか人生とか世界、です）に映っているのは「何か」の代わりですらないのかもしれない。影やまぼろしが自立していないとは、私には言い切れません。ひょっとして、人は影やまぼろしにもてあそばれていないでしょうか。主導権を握られていないでしょうか。



パトリア・ハイスミスの小説 The Talented Mr. Ripley については、近いうちに記事にするつもりです。この小説を原作とした映画は邦訳と同じく二つのタイトルで二種類あります。興味を持たれた方は、小説でも映画でもいいので、ぜひお楽しみください。いい意味での目まい感のある作品です。

ここでは、アラン・ドロンのトム・リプリーを演じ、ルネ・クレマンが監督した「太陽がいっぱい (Plein Soleil)」を紹介します。

長時間じっとしてられないために映画を見るのが苦手な私は、短時間で見られる映画のトレーラー（予告編）が大好きなのですが、数種類あるトレーラーでは以下の動画がいちばん「まとめ」的で面白かったです。「似ている」→「似る・似せる・真似る」→「なりきる」→「なりかわる」という、この作品のスリリングなテーマがよく分かる作りになっています。

とりわけ好きなのは、アラン・ドロンの鏡にへばりつき唇を寄せるシーンと、筆跡を真似る有名な場面です。

以下は、他人に「似る・似せる・真似る」と「なりきる」を超えて「なりかわる」（偽造も出てきます）身振りに的を絞った編集の珍しい動画です。何度見てもわくわくします。

(動画省略)

拡大された署名をアラン・ドロンがなぞるシーン（動画では 2:40 から始まります）は

とりわけ象徴的です。活字ではなく本人がペンでなぞった（書いた）文字を偽者がなぞる。その身振りは愛撫にも見えます。誰を愛撫するのかといえば自分なのです。なろうしている自分というべきでしょう。

付録 人のつくるものは人に似ている

＊

人のつくるものは人に似ている

星野廉

2021/06/27 07:45

目次

なぞる

人のつくるものは人に似ている

枠がぼやける

冷蔵庫はお母さんに似ている

枠、タブロー、スクリーン

枠、テリトリー

世界は劇場/工場

人に似ているものに囲まれる

なぞる

なぞるは枠をつくること。
なぞるうちに枠が見えてくる。

見えてきた枠に縛られる。
枠が当然のものに見てくる。

枠は人を安心させる。
人は枠に嗜癖する。

枠なしでは人は生きられない。
人は枠を意識することがない。

＊

たぶん杵は人の内にある。
誰も杵を見ることはできない。

杵をなぞる。
なぞるだけで見えているわけではない。

杵をつくる。
杵はつくるもの。

人のつくるものは人に似ている。

人のつくるものは人に似ている

よく聞く話。
人のつくるものは人に似ている。

確かに、人に似せてつくっているとしか思えないものがある。

器、スプーン、箸、椅子、寝台、座布団。
手袋、シャツ、ズボン、靴下、ストッキング、衣服。

丸みを帯びたやかんの注ぎ口を見ていて、どきりとすることがある。
ソファに体を沈めると懐かしさで涙ぐむことがある。

人の体に触れる。
人の体に当てる。人を包みこむ。

*

窓、煙突、家。
荷車、馬車、自動車、乗り物。

窓が人の顔に見えることがある。
車を正面から見ると、どうしてもそこに顔を見てしまう。

*

人形（ひとがた）、像、図、絵、絵本。
おもちゃ（玩具）。

動くもの。動かないもの。
動かすもの。動いていると想像するためのもの。

＊

人面○○。枯れ尾花。

錯覚、錯視、幻聴。幻覚。幻想。妄想。空想。想像。

経済、ビジネス、宗教、音楽、文学、芸術、スポーツ、科学、哲学、数学、報道、宣伝。
言葉、お金、音、物語、フィクション、映像、ルール、法則、公式、概念、数字、イメージ。

人は存在しないもので動く。
人はないもので動く。

枠がぼやける

あなたは文字が人の顔に見えることがありますか？ ひらがなでも、カタカナでも、漢字でも、数字でもいいです。

フォントや大きさにもよると思います。また手書きの文字や書道なんかの文字だと、これまた印象ががらりと違ってきますね。

学校で書道の授業の時、筆をつかっているうちに、文字が文字ではなくなっていく感じがしたのを思い出します。何をなぞっているのか、自分が何をしているのか、わからなくなるのです。たまにペンで文字を書くと、そういう不思議な気持ちになることが今でもあります。

文字は意味があるのに、その意味が消えて形だけになるとか、他のことが頭に浮かんでしまうなんてことはざらにあります。書いている最中だけでなく、読んでいる時にもです。

なぞっているうちに、なぞっているものがぼやけてくるのです。枠がぼやけてくるのです。それがなぜか気持ちいい。気が遠くなるほど気持ちいい。不思議でなりません。

冷蔵庫はお母さんに似ている

人のつくるものは人体に似ている。
人体の構造と似ているものがある。

人と似た、またはそっくりな仕草をするものがある。
人の顔や姿や身体の一部を想起させるものがある。

楽器、食器、容器、道具、文房具、便器、浴槽、介護用品、医療器具。
時計、装置、電気器具、家具、農機具、機械。

気味が悪いほど似ているものがある。
見ていてほっとするものもある。

鏡、眼鏡、望遠鏡、映画、テレビ、パソコン、スマホ。
蓄音機、レコード、電話、電話機、ラジオ、マイク、イヤホン、テープレコーダー、テレビ。

*

冷蔵庫はお母さんに似ている。イメージしているのは、旧式のそんなに背も高くなく大きくもない白い冷蔵庫。

幼児にもどった気持ちになって、しゃがんだり身をかがめ、視線を下に構えて、そばに立ってみると、そんな気がする。どっしりとしていて、幼児でなくても、小学校の低学年くらいが抱きついて、ちょうどいい重量・体積・質感がある。

エプロンみたいに白くて、いろんなものが貼り付けてあって、よく耳を澄ますとぶーんというやさしい音がして、熱を発していて温かく、扉を開くと、どんな望みもかなえてくれそうで、こころがやすらぐ。

子どもたちが帰宅すると、すぐに飛んでいくところが台所。そして、真っ先に冷蔵庫を開ける——。そんな話をよく聞く。大人も、同じ。帰るなり、まっしぐら。ネコまで、ついてくる。

「衣食住」のうち、もっとも切実なものが「食」だという気がする。その人にとって基本的な欲求を、最初に満たしてくれた存在。お乳を与えてくれた存在。それがお母さん、あるいは、その代理を務めてくれた人。

その意味で、冷蔵庫はお母さんに似ていると思う。

*

冷蔵庫はお母さん。大文字で始まる Mother、〈マザー〉。家にいる普通のお母さんも、〈マザー〉を「お母さん」と呼ぶ。冷蔵庫の中身を補充する時に、お母さんは〈マザー〉の腹心になる。

だから、冷蔵庫は、お母さんのお母さん、つまりおばあちゃんではなくて、大文字で始まる Mother、〈マザー〉。

この〈マザー〉は家の中心にいる。家の中心とは台所。どんなアパートにも簡単なキッチンが付いている。共同の場合もあるだろうが、トイレと同様に必ずある。

冷蔵庫にはいろいろな紙が貼られてるのは、そこが情報の中心だから。子どもがいれば、学校関係のメモや学校からのお知らせや稽古事のスケジュール表なんかも貼ってあったりする。

貼りきれないと、そばの壁にあるボードとか壁にも貼ってあるが、大切なことは、ボードも壁も冷蔵庫の付属品だということ。あくまでも中心、つまり家の主は〈マザー〉である冷蔵庫。

夫とか旦那とか主人なんて目じゃない。

冷蔵庫のそばにはカレンダーもある。カレンダーもまた冷蔵庫の付属品。書き込みの

できるカレンダーなんて、冷蔵庫の奴隷みたいなも。あ、奴隷は言いすぎ。家来としておこう。

威厳のある<マザー>だが、かぎりなく優しい。

冷蔵庫は家の情報の中心、つまりインフォメーション・センターなのである。家のセンターは、テレビでも仏壇でもパソコンでもスマホでもない。生きていくのに絶対に必要なものは、冷蔵庫の中にあり、外に貼られている。

食と情報を支配するものはすべてを配下におさめる。だから、支配しようとする者は必死で食糧と情報を収集する。歴史を振り返り、世界を見まわせばわかる。

偉大なる大文字で始まる Mother、<マザー>。

冷蔵庫はお母さんに似ている。イメージしているのは、旧式のそんなに背も高くなく大きくもない白い冷蔵庫。

いわゆる鍵っ子だった子どものころの私は、帰宅すると冷蔵庫にお母さんを感じていた。夕方や夜遅くに帰ってきた母も、たぶんそうだったと思う。

旧式のそんなに背も高くなく大きくもない白い冷蔵庫。

枠、タブロー、スクリーン

人のつくるものは人に似ている。
人の意識をうつしているとしか思えないものがある。

書物、巻物、タブロー、銀幕、スクリーン、ディスプレイ、モニター。

見えないものを真似ている。
聞こえないものを真似ている。

感知できないものを真似ている。
知らないものを真似ている。

なぞる。

何かはわからないままになぞる。

なぞっているという意識なしになぞる。

＊

人のつくるものはどこか人に似ている。

なるべくして、そうなっているのかもしれない。

人のつくるものが人の内にある「何か」と似ていても不思議はないのではないか。

人はなぞる。

空（くう）をなぞるように見えて、枠をなぞっている。形をなぞっている。

形はなぞっているうちに形となる。

なぞった瞬間に形は謎となる。

＊

枠、frame、フレーム、figure、フィギュア。

仏壇、位牌、写真、卒塔婆、墓、墓石。

棺桶、棺、火葬炉。

地獄絵、極楽絵図。

アイコン、アイコン、アバター、分身。

figure の意味・使い方・読み方

figure【名】形、形状、形態、外観図、図表、挿絵、図形、図式◆【略】fig.・A is shown
[illus

eow.alc.co.jp

枠、テリトリー

枠を眺める。

枠に見入る。

枠は縛る。
縄張りも枠。

テリトリーも枠。
内、辺境、外。

ここからはうち、ここからはよそ。
あなたたちはみうち、あいつらはよそもの。

こっちとあっちしかない考え。
あっちにもこっちがあることに思いがおよばない。

*

境、境目、わかれめ、きわ、かぎり。
へり、辺、片、偏、変。

辺は蛮、辺は変。

はし、はしっこ、端、ふち、縁、淵。
辺境、フィロンティア、境界、線。

内は中心で光の源、外は魔の棲む闇。

世界は劇場/工場

世界は祭壇。
世界は窓。

スクリーン、銀幕、枠、モニター、ディスプレイ、画面、フレーム。

劇場、芝居小屋、舞台、観客席、コンサート、ゲーム、観る、見上げる、見せ物、演じる、かぶく、うたう、舞う、プレイ、演じる、遊ぶ、競技をする。

世界は劇場。
グローバル座。

コロシウム、競技場、闘牛場、観客席、ドーム、ホール、アリーナ、公民館、市民会館、ライブハウス、寄席。

映写、写像、像、鏡像、映像、写本、筆写、印刷、インターネット、網、フィギュア、姿、形、フィルム、写真、映写機、写真機、スマホ、撮影、撮す、映す、写す、移す、反射、鏡、胸像、ポジとネガ、陰影、陰翳、印影、判子、印鑑、印象、スタンプ、御朱印、スタンプラリー。

＊

世界は祭壇。
仰ぎ見る。

世界は劇場。
みんなが舞台を見つめている。

世界は映画館。
みんなが影に見入っている。

世界はホール。
みんながアーティストの姿を見つめ、声と演奏に聞き入る。

世界は競技場。
みんながプレイヤーの動きに目を見張る。

プレイヤーと観客。
主体と客体。主語と述語。subject と object。自と他。
あるじとしもべ。

枠、フレーム、舞台、観客席、栈敷、貴賓席、S席、一般席。

中心と辺境。
うちとそと。

疎外。排除。選別。支配と被支配。
かみとしも、上下。
階層、カースト、ピラミッド。

アイドル、偶像、スター、星。
祭壇、祝祭、供物、生け贄、スケープゴート、祭司、巫女、まつり、まつりごと、政治。

まつる、あおぐ、あおぎたてまつる、ささげる、ひれふす、みる、みられる、みいられる、みいる。

*

世界はゲーム。世界はゲームセンター。
プレイヤーはプレイするのか、させられるのか。

ルールって何？
シナリオって何？
ロール（役割）って何？

枠。縛り。
人は縛られるのが好き。
人は枠に収まると安心する。

人はきまぐれ。
枠や縛りも人に似てきまぐれ。

ルールは時とともに移り変わる。
ルールはところによって異なる。

人は自分のお気に入りのルールを通そうとする。
自分のルールと自分のスクリーンと自分の枠に固執する。
それが世界だから。それがすべてだから。

邪魔する者を消そうとする。
嗜癖している人の行動。

*

世界は無数のスクリーン。
世界中でみんながスクリーンを見ている。

やめられない、とまらない。
人はスクリーンに嗜癖している。

ひれ伏ししていることに気づいていない。
気づいても、忘れる、または信じない。

世界は網。
世界はネットワーク。

世界は蜘蛛の巣。
世界は巨大なウェブ。

蜘蛛のために何もかもがつながってしまった。
今世界は疫病でつながっている。

退治するためには、つながるしかない。

*

世界は網。

寝っ転がって見るスクリーン。
歩きながら見るスクリーン。

手のひらにのるスクリーン。
どんどんスクロールできて次々と切り替わるスクリーン。

スクリーンには枠がある。
スクリーンにはフレームがある。

でも、誰も気づかない。
気にもしない。

枠とは、気づかず、気にしないもの。
自分が嗜癖していることに気づいていない。

人がつくるものは人に似ている。

*

世界は工場。
世界は機械。

生産、自動生産・オートメーション、複製、大量生産。
誤差、失敗、故障、暴走、バグ、ノイズ、変異。

反復、くりかえす、かえす、かえる。
反復、うつす、うつる、ふえる。

似ているがどんどん繰り返かえされる。
似ているがどんどんふえていく。

そっくりなところがそっくりなものたちがそっくりな身振りを繰り返かえす。

うつるがうつる、うつすがうつす、ふえるがふえる。
とまらない運動。いつかはとまる運動。

人に似ているものに囲まれる

ホームセンターや電気製品の量販店などで、いろいろな商品を見ていて思うのは、「ヒトがつくるものは、ヒトに似ている」です。

お茶わん、湯飲み、箸、スプーン、フォークといった「食」に関係のある物たち。椅子、テーブル、机、布団、ベッド、枕などの広義の「住」関連の物たち。そして、シャツ、上着、ズボン、スカート、下着、手袋、帽子といった「衣」に関する物たち。こうした物たちを観察すると、ヒトに似ています。

なかでも、手袋なんて、手と激似です。湯飲みなんて、開いた口です。椅子やソファやベッドを見ていると、四つん這いになったヒトに見えます。こうやってこじつけているうちに既視感を覚えて、何だろうと思ったのですが、被害妄想にそっくりな心もちがします。

そう考えるとそういうふうに見える、ところが似ているのです。

似ているは、比喩と同じで、似ているから出発するだけでなく、似ているという暗示から生まれることも大いにある気がします。「似ている」は知覚からだけではなく、想像

からも生まれるとも言えるでしょう。

「似ている」は増える。エスカレートするのです。

＊

器類は、水をすくう時の片手あるいは両手の形に似ています。口をつける湯飲みやグラスには、口があります。やかんや急須の注ぎ口と管の部分は、ヒトの食道の延長に見えてきます。

そもそもヒトの体は管だというレトリックを見聞きします。単純化すると、口から飲み食いした物が肛門や尿道から出て行くという消化器系を重視した比喻になりますね。食道、胃、腸という流れがあり、流れる場が管というイメージです。

循環器系だと液体が流れる血管やリンパ管があり、呼吸器系だと鼻から始まって気管と気管支という流れになるようです。気体が流れる管というイメージでしょうか。ストローやホースや笛みたい。

箸やフォークは指に似ています。椅子には背も足＝脚もあります。ふっくらとした座布団の感触は、どこかお尻に似ています。衣類は、からだに当てるわけですから、とうぜん、その当てる部分にそっくりにつくられています。

＊

さらに、こじつけをするなら、自動車なんて正面から見ると、顔に見えてしかたがない方、いらっしゃいませんか？ これこそまさに「人工の人面〇〇」です。人面魚や人面岩を見て、うわーっと驚くだけではなく、自分でつくった物を見て、うわーっとびっくりするわけですから滑稽な感じもします。

機関車や電車と言った乗り物も、そうですね。正面から見ると、表情をそなえた顔に見えます。あの不気味にも見えないこともないトーマス君なんて、とても分かりやすいイメージです。

テレビもそうですね。というか、そうでしたね。テレビ時代の初期には、受像機の上部にウサギちゃんのお耳みたいなアンテナが付いていたのをテレビで見たことがあります。

あと、こじつけると、銃なんて男性器に似てませんか？ 水鉄砲はもちろんのこと。ロケットもそうかな。

その他に、ヒトやヒトの身体のある部分に似たものを挙げるなら、口を開けたポスト、長針と短針が表情を刻々と変えるアナログ時計、先端に毛のついた歯ブラシ、鉛筆やペン（どういうこっちゃ）、チューブ入りのケチャップやマヨネーズ（ぐにゅっと出てくるさまを思い浮かべてください）、ケータイ、ゲーム機のコントローラー、ガラス張りのパチンコ台……。こじつけが、だんだん苦しくなってきましたね。

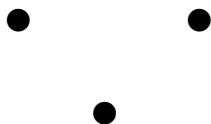
被害妄想と同じで、あれもこれもと人や人の一部と似ているものを感じるのは、つらいものがあります。そうやって見なければならぬような義務感を覚えるようになるのです。誰に頼まれたわけでもないのに、です。

まるで擬人化地獄。

このオブセッションを克服するには、人でなしになるか人外境に逃れるしかないのかもしれませんが、人という枠から外れることは凡人には無理なようです。

世界は顔に満ち満ちている。

人はいたるところに顔を見ます。一説によると、人面〇〇どころではなく、左右の目と口に当たる三点があると、もうそれで顔を認めるのに十分なのだそうです。こういう空想は子どものほうが得意だといわれています。



というか、二点だけでも、私には十分です。目は口ほどにものを言う。



どうでしょう？ 見ていて気持ちがやすらぎませんか？

人形（ひとがた）や玩具の持つ力を軽んじるわけにはまいりません。また、ないものの力をないがしろにするのは、人として賢明な生き方ではないでしょう。

森羅万象に人や顔を感じなくなった時、その人はきわめてあやうい状態にある気もします。顔や表情は、言葉とか意味とかイメージとか、そういう人に備わった「粹」の芽だからです。

そんなわけで、胸は張らないまでも、地味にせっせと擬人化に励もうと考えています。

付録 人がつくったものに人が似てくる

＊

人がつくったものに人が似てくる

星野廉

2021/06/30 12:55

目次

鏡は、ずれを見るためにある

つくったものに似せる、つくったものに似てくる

真似てつくったものを真似る

うつったものに似せる、うつったものに似てくる

向こうへと落ちていく

似る、似せる、成りかわる

究極の似ている

鏡は、ずれを見るためにある

鏡は自分の姿を見るためにあるのだろうが、鏡に映っているのは自分だろうか？

鏡に映っているのは姿や形というよりも時間だという気がする。正確に言えば、時間ではなく、ずれなのだろう。抽象である時間を、人は「見る」ことができず、「前」と「今」とのずれとして感知するしかない。

ずれは印象であり、計測も検証もできない。その意味で「似ている」に似ている。鏡だから「似ている」に似ているわけではない。鏡は「似ていない」も写すし映る。

＊

鏡を前にしてのお化粧は、刻々と目の前に現われるずれとの追っかけっこ。先を越されないように必死で見なければ、顔は見えないし、化粧品ののり具合を確かめることはできない。だから、ずれを深く受けとめている暇も余裕もない。

お化粧をする時には、鏡の中の自分、つまりずれとは妥協するしかない。いつまでも眺めているわけにはいかない。考えこんでいる暇もない。ま、いっか、と唇を噛んでつぶやいてその場を去るしかない。ずれとまともに向き合えば喜劇や悲劇や惨劇になる。

数年前の写真を見るのは恥ずかしいものだ。恥ずかしくてまともに見られない。髪型も化粧も服装もださくて見るに堪えない。ただし顔そのものは見ないだけの体感的な知恵がそなわっている。というか、おそらく見えないのである。

ずればかりがやたら目につくのだ。だから、顔や姿は目に入らないと言うべきかもしれない。映っている人を卒業したという優越感と、それがちょっと前の自分だったという屈辱感のあいだで揺れるとも言える。要するに、ちょっと前の自分は恥ずかしいと同時に憎い。ちょっと若いから小憎らしい。つまり、ライバルなのだ。

免許証とか証明書の写真がそうだ。恥ずかしさと屈辱だけが映っている。だから正視できないし正視に耐えない。これは、ずれがダイレクトに襲ってくるからではないか。恥ずかしさと悔しさ、つまりずれを感じとるだけの余裕ができているということ。

昔の写真とか子どもの頃の写真だと、ずれをもろに受け入れる余裕ができていて、見てもそれほど恥ずかしくはないし憎らしくもないし悔しくもない。むしろ、懐かしくて見入ることがある。もはや、他人となった自分。まあ、かわいい。この子、誰？
天使を見る人もいる。我が子や甥っ子や姪っ子や孫を見るのに似ている。似ているけど、自分ではない誰か。今の自分以外に自分はいない。

＊

人は鏡や鏡に似たものに取り憑かれているとしか思えない。絵や写真や映画や動画は、鏡に似ている。人はそれらを前にして、鏡に面するのと同じ仕草や動作をする。見る、見入る、かんがえこむ、かんがみる。

絵、写真、映画、動画は自分を映すためのもの。世界は自分に似たもので満ちているから、風景を描いても撮っても、人以外の生き物を描いて撮っても、他人を描いても撮っても、そこに描かれている映っているものは自分。広義の自分。複数形の自分。おそら

く赤ん坊にとっての「自分」。

人は自分に似たものを目にすると、幼児返りや赤ちゃん返りをする。たぶん、ごく短い間だけ、またはとぎれとぎれに。人はいくつになっても、まばらな幼児、まだら状の赤ん坊。

*

鏡、絵、写真、動画がどんどん増えていく。人が真似てつくり、複製するから、当然のこと。鏡は自然に増えるわけがない。人がつくる。

つくるだけはない。似せて、真似てつくる。何に似せ、何を真似るのかといえば、鏡。鏡に似せて、鏡を真似て、つくる。どんどんつくる。

世界は鏡に満ち満ちている。人は、ふだんは、それに気づかない。意識しない。だから、よけいに増えていく。

言葉も鏡。人も鏡。人は自分に似たものを真似てどんどんつくっていく。

つくったものに似せる、つくったものに似てくる

荒唐無稽な夢。荒唐無稽な想像。
根拠のない空想。

たとえば、人は椅子をつくったために、椅子に合わせて腰かけるようになった。

物だけではない。

たとえば、映画をつくったために、映画のような夢を見たり、空想をするようになった。

棺桶をつくったために、棺桶に合わせて埋葬するようになった。
冷蔵庫をつくったために、冷蔵庫に合うようなものを食べるようになった。

パソコンをつくったために、パソコンの従者や下僕になった。
スマホをつくったために、スマホに嗜癖しスマホに合わせて生活するようになった。

それだけではない。

＊

つくったものに似せる、つくったものに似てくる。
うつったものに似せる、うつったものに似てくる。

ミメーシス、模倣、描写。
うつす、写す。似せる、真似る。かたる、語る、騙る。
つたえる、伝える、つぐ、継ぐ、次ぐ、告ぐ、接ぐ。
まねる、真似る、ふりをする、振りをする、えんじる、演じる。

＊

もしもの話。戯れ言。

言語を習得させ、海を見せて、海を描写するように指示する。海についてのパーツである、波、浜、砂浜、沖、岩、砂、石、水、海水、大波、小波、しけ、なぎ、太陽、夕陽、朝日、雨、風、カモメ、魚、貝、流氷……といった言葉を覚えさせた上で。器用な人なら作文を書くだらう。お手本なしで。

絵の具と筆と鉛筆と紙を与えて、海を見せて、海を描くように指示する。器用な人なら描き始めるだらう。お手本なしで。

果たしてそんなに単純な話なのか。

天才なら、書けるし描ける。

そんな適当な話なのか。

＊

戯れ言のつづき。

お手本を見せたとする。さらには筆記具の使い方と書き方、画材の使い方と描き方を教える。

大切なことは、たくさんのお手本、つまり文章や作品を読ませ、たくさん絵を見せること。真似させること。

たぶん、真似ることで、めきめき作文力がつき、絵の才能が伸びるのではないか。

＊

言葉も絵も外から来るもの。借り物。だからこそ、真似る対象になり、真似ることで熟達する。もちろん才能もあるだろう。

大切なのは、真似ること。

まねる、まねぶ、まなぶ。

ミメーシス - Wikipedia

ja.wikipedia.org

ミメーシス (アウエルバッハ) - Wikipedia

ja.wikipedia.org

口承 - Wikipedia

ja.wikipedia.org

演劇 - Wikipedia

ja.wikipedia.org

写本 - Wikipedia

ja.wikipedia.org

印刷 - Wikipedia

ja.wikipedia.org

＊

荒唐無稽な想像。荒唐無稽な夢。

人が物語を真似る、物語に似せる、物語に似る、物語に成りきる、物語に成る。

人が書物を真似る、書物に似せる、書物に似る、書物に成りきる、書物に成る。
人が演劇を真似る、演劇に似せる、演劇に似る、演劇に成りきる、演劇に成る。

＊

写字、写経、写本、書写、筆写。
書、書道、カリグラフィー。

書物や文字を写す職業。
筆耕、写字生、写経生、スクライブ。

写経 - Wikipedia

ja.wikipedia.org

スクライブ - Wikipedia

ja.wikipedia.org

筆耕とは - コトバンク

精選版日本国語大辞典 - 筆耕の用語解説 - 『名』 写字や清書をすること。それによって報酬を受けること。また、その人。

kotobank.jp

Calligraphus - Wikipedia

en.wikipedia.org

カリグラフィー - Wikipedia

ja.wikipedia.org

＊

ブヴァールとペキュシェは、どちらも独身の写字生である。
(フロベール作「ブヴァールとペキュシェ」についてのウィキペディアの解説より引用)

ブヴァールとペキュシェ - Wikipedia

ja.wikipedia.org

＊

『『ドン・キホーテ』の著者、ピエール・メナール』（ドン・キホーテのちよしゃピエール・メナール、Pierre Menard, autor del Quijote）は、ホルヘ・ルイス・ボルヘスによる短編集『伝奇集』に収録された作品の一編。ピエール・メナールという 20 世紀の作家がミゲル・デ・セルバンテスになりきるなどの方法で、『ドン・キホーテ』と一字一句同じ作品を作りだそうとした、という設定のもと、セルバンテスの『ドン・キホーテ』とピエール・メナールの『ドン・キホーテ』の比較を文学批評の形式で叙述した短編小説である。

(ボルヘス作『ドン・キホーテ』の著者、ピエール・メナール』についてのウィキペディアの解説より引用)

『ドン・キホーテ』の著者、ピエール・メナール - Wikipedia

ja.wikipedia.org

真似てつくったものを真似る

荒唐無稽で根拠なしの空想。

馬鹿馬鹿しくてがっかりするしかないような話。

似せてつくったものに似せる、真似てつくったものを真似る。

馬鹿馬鹿しい、馬鹿も休み休み言え、と言いたくなるような話。

そもそも物語は人がつくったもの。現実なり空想なりを見聞きして、それを「あたかも目の前にあるように」語るのが、物語。

*

物語を模倣する人間についての小説。

物語というジャンルについての復習、小説というジャンルの予習。

まさか、小説を壊しているのではないか。

できたばかりのジャンルが既に壊れかけている。

ドン・キホーテ - Wikipedia

ja.wikipedia.org

*

物語と小説をまねて、まがい、まげた作品を、さらにまねて、まがい、まげた作品。

この作品をまねる、あるいは無意識にまねることとなる来たるべき作品立ち。

まがい、まがるしかないのが小説というジャンルの運命であるかのように。

とはいえ、読み物でもある。読み物は読み物を模倣して、書き継がれる。

トリストラム・シャンディ - Wikipedia

ja.wikipedia.org

*

小説を模倣する人間についての小説。

小説と現実を混同してしまう人間についての小説。

小説というジャンルの始まりと洗練。

律儀と愚鈍が同義であると誰かに見破られることになる。

ボヴァリー夫人 - Wikipedia

ja.wikipedia.org

*

恋に恋する人間。

物語にかたられてしまう人間。

小説の登場人物と自分を同一視する人間。

小説や物語を、映画や演劇やテレビドラマやゲームに置き換えても事情はそれほど変わらないのではないか。あるいは、歴史や神話や信仰や哲学や生き方に置き換えても事態はそれほど変わらないのではないか。

仮に、政治や社会現象を、世界や国家や地域を舞台とした、物語や劇としてとらえらるれば、これまた事情も事態も同じなのではないだろうか。

*

登場人物と読者、演じる者と観客、舞台に立つ者とそれを眺める一般人。

人は観客や読者であることを忘れて自分が主人公だと思い込む。

そうした観劇の仕方や読み方を否定するのではない。そもそも否定できるたぐいの問題ではない。

どんな子どもでも、読み聞かされた話に自分を重ねる。それがフィクションというも

のの仕組み。

観るとは、聞くとは、読むとは、そういうことなのだろう。そうした事態に自覚的であるかどうかは、趣味や気質や、その時の気分の問題なのかもしれない。

うつったものに似せる、うつったものに似てくる

鏡を見る。鏡に見入るのは、誰でも毎日やっさいそうなこと。そこに映っているのは自分だと疑わない。人前に出て恥ずかしくない顔と格好をしているか確かめる。お化粧をする。身だしなみを整える。

それだけなのか？ 本当に、そんなふうに単純なものなのだろうか？ 世の中には、変なことを考える人がいる。変なことを書く人がいる。小説にまで書く人がいる。変だから書くのか。変だから小説なんて書くのだろうか？ 人が小説に似る。小説が人に似る。

*

かがみ、鏡、かがみる、鑑みる
見入る、魅入る、見入られる、魅入られる
うつる、映る、移る、入る

鏡の中に入る。

鏡の国のアリス - Wikipedia

ja.wikipedia.org

鏡の中に入る前に言葉という鏡に魅入る。

言葉はかがみ、屈み、鏡、鑑。

かがみ、しなり、おれる。

屈折、reflection、inflection。

写真術のパイオニアだったルイス・キャロル。

数学者・論理学者でもあったルイス・キャロル。

その符合と屈折ぶりはただ事ではない。

不思議の国のアリス - Wikipedia

ja.wikipedia.org

屈折 - Wikipedia

ja.wikipedia.org

語形変化 - Wikipedia

ja.wikipedia.org

屈折語 - Wikipedia

ja.wikipedia.org

ルイス・キャロル - Wikipedia

ja.wikipedia.org

向こうへと落ちていく

水面に映った自分の姿を見る。

鏡を見る。

かがみ、かがむ、うつる、映る、写る、移る。

おちる、落ちる。

鏡像。姿。反射。自分のようで自分ではない。

自分そっくり。自分に似ている。自分ではない。自分とちがう。

こっち、むこう。ここ、あっち。ここ、あなた・あなた・彼方・貴方。

水面、鏡の恐ろしさ。死へといざなう鏡、水面。

おちる、落ちる、墮ちる、墜ちる。

落ちていく、向こうへと落ちていく、あなたへと落ちていく。

声がうつる、映る、写る、移る、遷る。

響く、こだま、木霊、衍、エコー、空気の振動、音、音響、波。

録音、レコード、蓄音機、拡声器、マイクロホン、スピーカー、再生、再現、再演、反復、模倣。

ナルキッソス - Wikipedia

ja.wikipedia.org

エコー - Wikipedia

ja.wikipedia.org

木霊 - Wikipedia

ja.wikipedia.org

ドリアン・グレイの肖像 - Wikipedia

ja.wikipedia.org

墮天使 - Wikipedia

ja.wikipedia.org

似る、似せる、成りかわる

似た小説や映画には事欠かない。ある小説を読んでいて、あるいは映画を観ていて、あれっというふうに既視感を覚えることは多い。前にも読んだことがあるような話、見たことがあるような身振りや行動、聞いたことのあるような科白、聞いた記憶のあるメロディー。

他人の家に入る。その家にある服を着る。物を食べる。座る、歩く、その辺にある本を読む、トイレに入る。その時、入った人は、その家の主を真似ることになる。

似た話、似た光景、そっくり、デジャビュの洪水。軽い目まいすら覚える。

幻冬舎文庫 パレード

都内の2LDKマンションに暮らは男女四人の若者達。「上辺だけの付き合い？ 私にはそれくらいが丁度いい」。それぞれが不安や焦燥

www.kinokuniya.co.jp

文春文庫 パーク・ライフ

公園にひとりで座っていると、あなたには何が見えますか？ スターバックスのコーヒーを片手に、春風に乱れる髪を押さえていたのは、

www.kinokuniya.co.jp

*

似ている、似せる、似る、成りかわる、成る。

誰かに似ている。その誰かに似せるように努力し、その結果似る。それだけでは済まない。その人物に成りかわるのだ。そしてついにその人に成る。お察しの通り、これはサスペンスであり犯罪小説。怖い話。

そんな小説がある。小説とは異なる部分もあるが映画にもなっている。

河出文庫 太陽がいっぱい

イタリアに行ったまま帰らない息子ディッキーを連れ戻してほしいと富豪に頼まれ、トム・リプリーは旅立つ。その地でディッキーは、

www.kinokuniya.co.jp

この小説にはそっくりな邦訳（翻訳だから似て当然）が二種類あり、映画化された作品も二種類ある。「似ている」や「そっくり」や「既視感」を楽しみたい人——そんな人がいるのか？　ここにいるけど……—には堪らない話。

さらには、この小説の続編があって、真似るだらけの主人公を真似ようとする少年が出てくるという話。

河出文庫 リプリーをまねた少年

数々の殺人を犯しながらも逃げ切ってきた自由人、トム・リプリー。悠々自適の生活を送る彼の前に、億万長者の家出息子フランクが現

www.kinokuniya.co.jp

まさに目まいのするような話。

究極の似ている

文学も芸術も映画もスポーツも「似ている」に満ち満ちている。

世界は「似ている」に満ち満ちている。

何かを真似て似たものをつくり始めたのはいいが、人はそのつくったものに似たものをどんどんつくることを無意識に覚え、その結果、複製文化どころか、複製文明と大量生産文明を築き上げ、今日にいたるのではないか。

似ているの増殖、似ているの自動生産、大量生産。どうにもとまらない状態。そして世界はどんどん暖かく暑くなっていく。

とはいえ、誰も目まいを起こしたくないから、「似ている」ことには目を向けないし、耳を傾けないでいる。「似ている」や「そっくり」とは、ほどほどのお付き合いをするべきということか。

＊

「似ている」と「そっくり」——。何かに似ている、そっくりだと思い、何だろう何だろうと考えていて、文学も芸術も映画もスポーツ、複製文明と大量生産文明、大量生産と思いをめぐらして、はっとする。

「似ている」と「そっくり」は、お金に似ているし、そっくりなのだ。

＊

究極の「似ている」と「そっくり」は紙幣、つまりお金。お金は「似ている」どころか「そっくり」どころか、「同じ・同一」に限りなく近くなければならない。精巧をきわめる。偽造を防ぐため。

ほぼ「同一」だから、計器によって計測可能。人の知覚だけでは真偽は判断できない。

お金は何に似ているのか？ 数字ではないか。抽象度マックスな数字。似ているやそっくりの世界ではなく、同じ・同一の世界。

数字と同じく抽象だから、何にでもかえられる、換えられる、変えられる。こんな便利ですごいものはない。素晴らしいものをつくったものだ。だから、どんどん刷る。

真似てつくる。そっくりにつくる。間違いは許されない。似ていなかったらアウト。下手すると犯罪、いや下手しなくても立派な犯罪。

本物のお金をどんどん刷らなければならない、鑄造しなければならない。印刷機や鑄造機でどんどん刷る。究極の精巧さで複写し複製し、大量生産する。

刷ることができるのは一部の人だけ。政府だけ。正確に言えば、政府の銀行と造幣局だけ。こども銀行は、こどもにだけ許される。

そっくりの本物がどんどん増えていく。実体なんて関係ない。人は存在しないもので動く。おとなのやることはほんまもんやからこわいわ。どんどん増やす、ついでに殖やす。実体はなくてかまわない。そんなところも数字と激似。

*

電子マネー、ポイント、スマホ決済。

記号と化したお金、マネー、紙幣。触ることも見ることも匂いもしない記号。似ているやそっくりのない、おそらく同じや同一もない世界。

虚ろな記号。似ているやそっくりのない記号。実体のない、ふえる増える殖える。

ふえるという身振りだけが空転する。人は存在しないもので動くの進化であり洗練なのか？ その新たな展開なのか？ あるいは、その枠内での展開にすぎないのか？

紙幣のない印刷機、硬貨のない鋳造機。機械の音だけがむなしく響く工場。

何だろう？

何かに似ている気がするが、何に似ているのか、思いつかない。ひょっとすると、何にも似ていないのかもしれない。

付録 人のつくるものは人に似ている/人のつくる
ものに人は似ていく

＊

人のつくるものは人に似ている/人のつくるものに人は似ていく

星野廉

2021年9月19日 11:01

目次

人のつくるものは人に似ている

人がつくるものに人が似ていく

人のつくるものは人に似ている/人のつくるものに人は似ていく

人のつくるものは人に似ている

＊なぞる

なぞるは杵をつくること。なぞるうちに杵が見えてくる。見えてきた杵に縛られる。杵が当然のものに見てくる。杵は人を安心させる。人は杵に嗜癖する。杵なしでは人は生きられない。人は杵を意識することがない。

＊

たぶん杵は人の内にある。誰も杵を見ることはできない。杵をなぞる。なぞるだけで見えているわけではない。

杵をつくる。杵はつくるもの。人のつくるものは人に似ている。

＊

同期するメトロノームたち。

身振りは似ていても、あるいは同じであっても、各メトロノームは同じではない。同じ＝同一は、一つしか存在しない。その意味で、メトロノームたちは同じではなく似ているのだ。

それぞれがそれぞれとしてある、またはいる。それぞれがそれ自身にそっくりなのだ。そっくりな点がそっくりなのである。

自分自身にそっくりという意味なら、同じとか同一と言えるのかもしれない。似ている、似た身振り、仕草、顔、表情が世界にあふれている。

その身振りを読む。あるいは、なぞる、真似る、まねぶ、学ぶ。または、うつす、写す、映す、撮す、移す、遷す。そうやってふえる、増える、殖える。

世界は顔で満ち満ちている。

(拙文「似ている」より引用)

*人のつくるものは人に似ている

よく聞く話。人のつくるものは人に似ている。確かに、人に似せてつくっているとしか思えないものがある。

器、スプーン、箸、椅子、寝台、座布団。手袋、シャツ、ズボン、靴下、ストッキング、衣服。

丸みを帯びたやかんの注ぎ口を見ていて、どきりとすることがある。ソファに体を沈めると懐かしさで涙ぐむことがある。

人の体に触れる。人の体に当てる。人を包みこむ。つくったものに人が合わせる。

*

窓、煙突、家。荷車、馬車、自動車、乗り物。

窓が人の顔に見えることがある。遠くに家の窓を見てほっとすることがある。人の顔を見たように心が安らぐ。車を正面から見ると、どうしてもそこに顔を見てしまう。にやにやしてしまう自分がある。子どもはあらゆるものに顔や表情を見ているのではないか。

*

人形（ひとがた）、像、図、絵、絵本。おもちゃ（玩具）。

動くもの。動かないもの。動かすもの。動いていると想像するためのもの。動いている。ぜったいにあれは動いている。

*

人面〇〇。枯れ尾花。錯覚、錯視、幻聴。幻覚。幻想。妄想。空想。想像。

経済、ビジネス、宗教、音楽、文学、芸術、スポーツ、科学、哲学、数学、報道、宣伝。

言葉、お金、音、物語、フィクション、映像、ルール、法則、公式、概念、数字、イメージ。

人は存在しないもので動く。人はないもので動く。

* 枠がぼやける

文字が人の顔に見えることがありますか？ ひらがなでも、カタカナでも、漢字でも、数字でもいいです。

フォントや大きさにもよると思います。また手書きの文字や書道なんかの文字だと、これまた印象ががらりと違ってきますね。

学校で書道の授業の時、筆をつかっているうちに、文字が文字ではなくなっていく感じがしたのを思い出します。何をなぞっているのか、自分が何をしているのか、わからなくなるのです。たまにペンで文字を書くと、そういう不思議な気持ちになることが今でもあります。

文字は意味があるのに、その意味が消えて形だけになるとか、他のことが頭に浮かんでしまうなんてことはざらにあります。書いている最中だけでなく、読んでいる時にもです。

なぞっているうちに、なぞっているものがぼやけてくるのです。枠がぼやけてくるのです。それがなぜか気持ちいい。気が遠くなるほど気持ちいい。不思議でなりません。枠は窮屈です。

*冷蔵庫はお母さんに似ている

人のつくるものは人体に似ている。人体の構造と似ているものがある。人と似た、またはそっくりな仕草をするものがある。人の顔や姿や身体の一部を想起させるものがある。

楽器、食器、容器、道具、文房具、便器、浴槽、介護用品、医療器具。時計、装置、電気器具、家具、農機具、機械。

気味が悪いほど似ているものがある。見ていてほっとするものもある。

鏡、眼鏡、望遠鏡、映画、テレビ、パソコン、スマホ。蓄音機、レコード、電話、電話機、ラジオ、マイク、イヤホン、テープレコーダー、テレビ。

*

冷蔵庫はお母さんに似ている。イメージしているのは、旧式のそんなに背も高くなく大きくもない白い冷蔵庫。

幼児にもどった気持ちになって、しゃがんだり身をかがめ、目線を下に構えて、そば

に立ってみると、そんな気がする。どっしりとしていて、幼児でなくても、小学校の低学年くらいが抱きついて、ちょうどいい重量・体積・質感がある。

エプロンみたいに白くて、いろんなものが貼り付けてあって、よく耳を澄ますとぶーんというやさしい音がして、熱を発していて温かく、扉を開くと、どんな望みもかなえてくれそうで、こころがやすらぐ。

子どもたちが帰宅すると、すぐに飛んでいくところが台所。そして、真っ先に冷蔵庫を開ける——。そんな話をよく聞く。大人も、同じ。帰るなり、まっしぐら。ネコまで、ついてくる。

「衣食住」のうち、もっとも切実なものが「食」だという気がする。その人にとって基本的な欲求を、最初に満たしてくれた存在。お乳を与えてくれた存在。それがお母さん、あるいは、その代理を務めてくれた人。

その意味で、冷蔵庫はお母さんに似ていると思う。

* 枠、タブロー、スクリーン

人のつくるものは人に似ている。人の外面だけでなく内にも似ている。人の意識をうつしていると思えないものがある。

書物、巻物、タブロー、銀幕、スクリーン、ディスプレイ、モニター。

見えないものを真似ている。聞こえないものを真似ている。感知できないものを真似ている。知らないものを真似ている。

なぞる。何かはわからないままになぞる。なぞっているという意識なしになぞる。

*

人のつくるものはどこか人に似ている。なるべくして、そうなっているのかもしれ

ない。

人のつくるものが人の内にある「何か」と似ていても不思議はないのではないか。

人はなぞる。空（くう）をなぞるように見えて、枠をなぞっている。形をなぞっている。形はなぞっているうちに形となる。なぞった瞬間に形は謎となる。

*

枠、frame、フレーム、figure、フィギュア。

仏壇、位牌、写真、卒塔婆、墓、墓石。棺桶、棺、火葬炉。

地獄絵、極楽絵図。

アイコン、アイコン、アバター、分身。

*美しい言葉

figure という英語の言葉を英和辞典で引いてみると、そこに書かれた語義の美しさに驚く。並んでいる言葉が美しい。字面が綺麗。言葉が喚起するイメージが美しい。音読しても流れるように美しい。

figure が英語から別れて日本語の語義に分かれる。別れは分かれ。

figure の意味 - goo 辞書 英和和英

figure とは。意味や和訳。figure の主な意味名 1 図形 2 数字 3 人の姿 4 表象動 1 ... を形取る 2 姿を現す 3 ...

dictionary.goo.ne.jp

figure の意味 - 英和辞典 - コトバンク

プログレッシブ英和中辞典 (第4版) - /fi:jr | fi/[名]I [姿]

kotobank.jp

たとえば、形、人影、挿絵、図、図形、フィギュアスケートのフィギュア（動作・図形）、表象、数字、音楽のモチーフ、計算、模様、言葉の綾.....という名詞の語義があっ

たりする。動詞の語義も見ていて飽きない。どれもが好きな言葉。わくわくするイメージ。奇跡としか思えない出会いと組み合わせ。

フランス語だと顔とか表情の意味が強かったりする。

figure(フランス語)の日本語訳、読み方は - コトバンク 仏和辞典
プログレッシブ 仏和辞典 第2版 - [女] 英仏そっくり語英 figure 姿, 数字, 人物, 図. 仏
figure 顔, 人物
kotobank.jp

ジェラルール・ジュネットの『フィギュール』という本を思い出す。言葉の綾という意味。

『フィギュール I』ジェラルール・ジュネット (書肆風の薔薇) - 書評空間:: 紀伊國屋書店
KINOKUNIYA::BOOKLOG
→紀伊國屋書店で購入フランスの批評家は自らの批評原理をあらわす言葉を評論集の総
題にすることがすくなくない。ヴァレリーの『
booklog.kinokuniya.co.jp

辞書で figure の語義を眺めていると、何かをなぞっている自分を感じる。自分の内に動きを感じる。体と心が動いている。気が遠くなりそうな束の間の時。

* 枠、テリトリー

枠を眺める。枠に見入る。枠は縛る。縄張りも枠。テリトリーも枠。

内、辺境、外。ここからはうち、ここからはよそ。あなたたちはみうち、あいつらはよ
そのもの。こっちとあっちしかない考え。

あっちにもこっちがあることに思いがおよばない。

*

境、境目、わかれめ、きわ、かぎり。へり、辺、片、偏、変。

辺は蛮、辺は変。

はし、はしっこ、端、ふち、縁、淵。辺境、フィロンティア、境界、線。

内は中心で光の源、外は魔の棲む闇。

*世界は劇場/工場

世界は祭壇。世界は窓。

スクリーン、銀幕、枠、モニター、ディスプレイ、画面、フレーム。

劇場、芝居小屋、舞台、観客席、コンサート、ゲーム、観る、見上げる、見せ物、演じる、かぶく、うたう、舞う、プレイ、演じる、遊ぶ、競技をする。

世界は劇場。グローバル座。

コロシウム、競技場、闘牛場、観客席、ドーム、ホール、アリーナ、公民館、市民会館、ライブハウス、寄席。

映写、写像、像、鏡像、映像、写本、筆写、印刷、インターネット、網、フィギュア、姿、形、フィルム、写真、映写機、写真機、スマホ、撮影、撮す、映す、写す、移す、反射、鏡、胸像、ポジとネガ、陰影、陰翳、印影、判子、印鑑、印象、スタンプ、御朱印、スタンプラリー。

*

世界は祭壇。仰ぎ見る。

世界は劇場。みんなが舞台を見つめている。

世界は映画館。みんなが影に見入っている。

世界はホール。みんながアーティストの姿を見つめ、声と演奏に聞き入る。

世界は競技場。みんながプレイヤーの動きに目を見張る。プレイヤーと観客。

主体と客体。主語と述語。subject と object。自と他。あるじとしもべ。

枠、フレーム、舞台、観客席、栈敷、貴賓席、S席、一般席。中心と辺境。

うちとそと。疎外。排除。選別。支配と被支配。

かみとしも、上下。階層、カースト、ピラミッド。

アイドル、偶像、スター、星。祭壇、祝祭、供物、生け贄、スケープゴート、祭司、巫女、まつり、まつりごと、政治。

まつる、あおぐ、あおぎたてまつる、ささげる、ひれふす、みる、みられる、みられる、みいる。

*

世界はゲーム。世界はゲームセンター。プレイヤーはプレイするのか、させられるのか。

ルールって何？ シナリオって何？ ロール（役割）って何？

枠。縛り。人は縛られるのが好き。人は枠に収まると安心する。人はきまぐれ。枠や縛りも人に似てきまぐれ。

ルールは時とともに移り変わる。ルールはところによって異なる。

人は自分のお気に入りのルールを通そうとする。自分のルールと自分のスクリーンと自分の枠に固執する。

それが世界だから。それがすべてだから。邪魔する者を消そうとする。嗜癖している人の行動の特徴。

*

世界は無数のスクリーン。世界中でみんながスクリーンを見ている。

やめられない、とまらない。人はスクリーンに嗜癖している。ひれ伏ししていることに気づいていない。気づいても、忘れる、または信じない。

世界は網。世界はネットワーク。世界は蜘蛛の巣。世界は巨大なウェブ。

蜘蛛のために何もかもがつながってしまった。今世界は疫病でつながっている。

退治するためには、つながるしかない。

*

世界は網。寝っ転がって見るスクリーン。歩きながら見るスクリーン。手のひらにのるスクリーン。どんどんスクロールできて次々と切り替わるスクリーン。

スクリーンには枠がある。スクリーンにはフレームがある。でも、誰も気づかない。気にもしない。

枠とは、気づかず、気にしないもの。自分が嗜癖していることに気づいていない。

人がつくるものは人に似ている。

*

世界は工場。世界は機械。

生産、自動生産・オートメーション、複製、大量生産。誤差、失敗、故障、暴走、バグ、ノイズ、変異。反復、くりかえす、かえす、かえる。反復、うつす、うつる、ふえる。

似ているがどんどん繰り返される。似ているがどんどんふえていく。

そっくりなところがそっくりなものたちがそっくりな身振りを繰り返す。うつるがうつる、うつすがうつす、ふえるがふえる。とまらない運動。いつかはとまる運動。

*人に似ているものに囲まれる

ホームセンターや電気製品の量販店などで、いろいろな商品を見ていて思うのは、「ヒトがつくるものは、ヒトに似ている」です。

お茶わん、湯飲み、箸、スプーン、フォークといった「食」に関係のある物たち。椅子、テーブル、机、布団、ベッド、枕などの広義の「住」関連の物たち。そして、シャツ、上着、ズボン、スカート、下着、手袋、帽子といった「衣」に関する物たち。こうした物たちを観察すると、ヒトに似ています。

なかでも、手袋なんて、手と激似です。湯飲みなんて、開いた口です。椅子やソファやベッドを見ていると、四つん這いになったヒトに見えます。こうやってこじつけているうちに既視感を覚えて、何だろうと思ったのですが、被害妄想にそっくりな心もちがします。

そう考えるとそういうふうに見えてくる、ところが似ているのです。

似ているは、比喩と同じで、似ているから出発するだけでなく、似ているという暗示から生まれることも大いにある気がします。「似ている」は知覚からだけではなく、想像からも生まれるとも言えるでしょう。

「似ている」は増える。エスカレートするのです。

*

器類は、水をすくう時の片手あるいは両手の形に似ています。口をつける湯飲みやグラスには、口があります。やかんや急須の注ぎ口と管の部分は、ヒトの食道の延長に見えてきます。

そもそもヒトの体は管だというレトリックを見聞きします。単純化すると、口から飲み食いした物が肛門や尿道から出て行くという消化器系を重視した比喩になりますね。食道、胃、腸という流れがあり、流れる場が管というイメージです。

循環器系だと液体が流れる血管やリンパ管があり、呼吸器系だと鼻から始まって気管と気管支という流れになるようです。気体が行く管というイメージでしょうか。ストローやホースや笛みたい。

箸やフォークは指に似ています。椅子には背も足＝脚もあります。ふっくらとした座布団の感触は、どこかお尻に似ています。衣類は、からだに当てるわけですから、とうぜん、その当てる部分にそっくりにつくられています。

*

さらに、こじつけをするなら、自動車なんて正面から見ると、顔に見えてしかたがない方、いらっしやいませんか？ これこそまさに「人工の人面○○」です。人面魚や人面岩を見て、うわーっと驚くだけではなく、自分でつくった物を見て、うわーっとびっくりするわけですから滑稽な感じもします。

機関車や電車と言った乗り物も、そうですね。正面から見ると、表情をそなえた顔に見えます。あの不気味にも見えないこともないトーマス君なんて、とても分かりやすいイメージです。

テレビもそうですね。というか、そうでしたね。テレビ時代の初期には、受像機の上部にウサギちゃんのお耳みたいなアンテナが付いていたのをテレビで見たことがあります。

あと、こじつけると、銃なんて男性器に似てませんか？ 水鉄砲はもちろんのこと。ロケットもそうかな。

その他に、ヒトやヒトの身体のある部分に似たものを挙げるなら、口を開けたポスト、長針と短針が表情を刻々と変えるアナログ時計、先端に毛のついた歯ブラシ、鉛筆やペン（どういうこっちゃ）、チューブ入りのケチャップやマヨネーズ（ぐにゅっと出てくるさまを思い浮かべてください）、ケータイ、ゲーム機のコントローラー、ガラス張りのパチンコ台……。こじつけが、だんだん苦しくなってきましたね。

被害妄想と同じで、あれもこれもと人や人の一部と似ているものを感じるのは、つらいものがあります。そうやって見なければならぬような義務感を覚えるようになるの

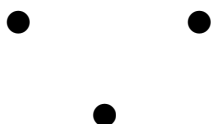
です。誰に頼まれたわけでもないのに、です。

まるで擬人化地獄。

このオブセッションを克服するには、人でなしになるか人外境に逃れるしかないのかもしれませんが、人という枠から外れることは凡人には無理なようです。

世界は顔に満ち満ちている。

人はいたるところに顔を見ます。一説によると、人面〇〇どころではなく、左右の目と口に当たる三点があると、もうそれで顔を認めるのに十分なのだそうです。こういう空想は子どものほうが得意だといわれています。



というか、二点だけでも、私には十分です。目は口ほどにものを言う。



どうでしょう？ 見ていて気持ちやすらぎませんか？

人形（ひとがた）や玩具の持つ力を軽んじるわけにはまいりません。また、ないものの力をないがしろにするのは、人として賢明な生き方ではないでしょう。

森羅万象に人や顔を感じなくなった時、その人はきわめてあやうい状態にある気がします。顔や表情は、言葉とか意味とかイメージとか、そういう人に備わった「枠」の芽だからです。

そんなわけで、胸は張らないまでも、地味にせっせと擬人化に励もうと考えています。

人がつくるものに人が似ていく

*鏡は、ずれを見るためにある

鏡は自分の姿を見るためにあるのだろうが、鏡に映っているのは自分だろうか？

鏡に映っているのは姿や形というよりも時間だという気がする。正確に言えば、時間ではなく、ずれなのだろう。抽象である時間を、人は「見る」ことができず、「前」と「今」とのずれとして感知するしかない。

ずれは印象であり、計測も検証もできない。その意味で「似ている」に似ている。鏡だから「似ている」に似ているわけではない。鏡は「似ていない」も写すし映る。

*

鏡を前にしてのお化粧は、刻々と目の前に現われるずれとの追っかけっこ。先を越されないように必死で見ていなければ、顔は見えないし、化粧品ののり具合を確かめることはできない。だから、ずれを深く受けとめている暇も余裕もない。

お化粧をする時には、鏡の中の自分、つまりずれとは妥協するしかない。いつまでも眺めているわけにはいかない。考えこんでいる暇もない。ま、いっか、と唇を噛んでつぶやいてその場を去るしかない。ずれとまともに向き合えば喜劇や悲劇や惨劇になる。

数年前の写真を見るのは恥ずかしいものだ。恥ずかしくてまともに見られない。髪型も化粧も服装もださくて見るに堪えない。ただし顔そのものは見ないだけの体感的な知恵がそなわっている。というか、おそらく見えないのである。

ずればかりがやたら目につくのだ。だから、顔や姿は目に入らないと言うべきかもしれない。映っている人を卒業したという優越感と、それがちょっと前の自分だったという屈辱感のあいだで揺れるとも言える。要するに、ちょっと前の自分は恥ずかしいと同時に憎い。ちょっと若いから小憎らしい。つまり、ライバルなのだ。

免許証とか証明書の写真がそうだ。恥ずかしさと屈辱だけが映っている。だから正視できないし正視に耐えない。これは、ずれがダイレクトに襲ってくるからではないか。恥ずかしさと悔しさ、つまりずれを感じとるだけの余裕ができていうこと。

昔の写真とか子どもの頃の写真だと、ずれをもろに受け入れる余裕ができてから、見てもそれほど恥ずかしくはないし憎らしくもないし悔しくもない。むしろ、懐かしくて見入ることがある。もはや、他人となった自分。まあ、かわいい。この子、誰？

天使を見る人もいる。我が子や甥っ子や姪っ子や孫を見るのに似ている。似ているけど、自分ではない誰か。今の自分以外に自分はいない。

＊

人は鏡や鏡に似たものに取り憑かれているとしか思えない。絵や写真や映画や動画は、鏡に似ている。人はそれらを前にして、鏡に面するのと同じ仕草や動作をする。見る、見入る、かんがえこむ、かんがみる。

絵、写真、映画、動画は自分を映すためのもの。世界は自分に似たもので満ちているから、風景を描いても撮っても、人以外の生き物を描いて撮っても、他人を描いても撮っても、そこに描かれている映っているものは自分。広義の自分。複数形の自分。おそらく赤ん坊にとっての「自分」。

人は自分に似たものを目にすると、幼児返りや赤ちゃん返りをする。たぶん、ごく短い間だけ、またはとぎれとぎれに。人はいくつになっても、まばらな幼児、まだら状の赤ん坊。

＊

鏡、絵、写真、動画がどんどん増えていく。人が真似てつくり、複製するから、当然のこと。鏡は自然に増えるわけがない。人がつくる。

つくるだけはない。似せて、真似てつくる。何に似せ、何を真似るのかといえば、鏡。鏡に似せて、鏡を真似て、つくる。どんどんつくる。

世界は鏡に満ち満ちている。人は、ふだんは、それに気づかない。意識しない。だから、よけいに増えていく。

言葉も鏡。人も鏡。人は自分に似たものを真似てどんどんつくっていく。

○

他の人に似ているとか、他人を真似るだけではなく、自分に似ているとか、自分を模倣するということがあります。

詩、小説、造形芸術、演劇、イラスト、漫画、作曲、伝統芸能といったクリエイティブな活動にたずさわっている人の作品には、その作り手独自のスタイルや型があります。これはプロ・アマを問わず見られます。悪い言い方をすればワンパターンでありマンネリズムです。

そうしたものが個性なのであり、オリジナリティーなのであり、本物なのであり、著作権によって守られる対象だと言えるでしょう。

あ、これ、○○の曲でしょ？ △△の映画は見始めて三分でだいたい分かるね。確かに、このドラマは、いかにも□□さんの脚本っぽいストーリーね。これって、あの人の作でしょ？ まだだ！ 「なんでレンブラントだって分かったの？」「背景の色、そして筆さばきかな」

創作とは自分を真似ることではないかと思えるほどです。

自分を真似る。自分に似せる。自分を模倣しつづけることは、随時更新することだとも言えるでしょう。鏡に向かい、そこに映った像を眺め、その像（イメージ）を模倣しつづけながら、少しずつずれていく。そのずれが更新なのです。

自分であると思いきこんでいる鏡の中の像には必ず他者が入り込んでいるはず。自分を眺めることが他者を認めることでないと誰が断言できるのでしょうか。鏡の中の自分の顔や姿に自分以外の何かを認めるのは、誰もが日常で経験することではないでしょうか。

見るには必ず「ずれ」がともないます。そのずれが何とのずれなのかは、分からないと思います。自と他のさかいのない世界とは鏡の中だという気がしてなりません。鏡（こ

の鏡を比喻と取っていただいてもかまいません)に映っているものは「似たもの」なので
す。「何か」そのものではありません。

何かに似ているのです。その何かは何なのは分からない。ひょっとすると、鏡(この
鏡を比喻と取っていただいてもかまいません、たとえば目とか作品とか人生とか世界、で
す)に映っているのは「何か」の代わりですらないのかもしれない。影やまぼろしが自
立していないとは、私には言い切れません。ひょっとして、人は影やまぼろしにもてあ
そばれていないでしょうか。主導権を握られていないでしょうか。(拙文「動画を視聴し
ながらとりとめなく考える」より引用)

*つくったものに似せる、つくったものに似てくる

荒唐無稽な夢。荒唐無稽な想像。根拠のない空想。

たとえば、人は椅子をつくったために、椅子に合わせて腰かけるようになった。

物だけではない。たとえば、映画をつくったために、映画のような夢を見たり、空想
をするようになった。

棺桶をつくったために、棺桶に合わせて埋葬するようになった。冷蔵庫をつくったた
めに、冷蔵庫に合うようなものを食べるようになった。パソコンをつくったために、パ
ソコンの従者や下僕になった。スマホをつくったために、スマホに嗜癖しスマホに合わ
せて生活するようになった。

それだけではない。

大量生産されたそっくりなものを使う人間は、地球のあちこちで同じ仕草同じ動作を
するようになる。そっくりがそっくりを生む。そっくりをそっくりが真似る。シンクロ、
同期、似ている、激似、酷似、そっくり、同じ。

*

つくったものに似せる、つくったものに似てくる。うつったものに似せる、うつった
ものに似てくる。ミメーシス、模倣、描写。

うつす、写す。似せる、真似る。かたる、語る、騙る。つたえる、伝える、つぐ、継ぐ、次ぐ、告ぐ、接ぐ。まねる、真似る、ふりをする、振りをする、えんじる、演じる。

＊

もしもの話。戯れ言。

言語を習得させ、海を見せて、海を描写するように指示する。海についてのパーツである、波、浜、砂浜、沖、岩、砂、石、水、海水、大波、小波、しけ、なぎ、太陽、夕陽、朝日、雨、風、カモメ、魚、貝、流水……といった言葉を覚えさせた上で。器用な人なら作文を書きだそう。お手本なしで。

絵の具と筆と鉛筆と紙を与えて、海を見せて、海を描くように指示する。器用な人なら描き始めるだろう。お手本なしで。

果たしてそんなに単純な話なのか。天才なら、書けるし描ける。そんな適当な話なのか。

＊

戯れ言のつづき。

お手本を見せたとする。さらには筆記具の使い方と書き方、画材の使い方と描き方を教える。大切なことは、たくさんのお手本、つまり文章や作品を読ませ、たくさん絵を見せること。真似させること。たぶん、真似ることで、めきめき作文力がつき、絵の才能が伸びるのではないか。

＊

言葉も絵も外から来るもの。借り物。だからこそ、真似る対象になり、真似ることで熟達する。もちろん才能もあるだろう。大切なのは、真似ること。まねる、まねぶ、まなぶ。

独創ではなく、引用と模倣と反復と変奏が芸術の実相ではないか。それにしてもオリジナリティ神話は強い。信仰ではないか。ないものは強い。

＊

ミメーシスとは - コトバンク

日本大百科全書 (ニッポニカ) - ミメーシスの用語解説 - 「まねる」「似せる」を意味する動詞 miméomai に由来する語

kotobank.jp

ミメーシス (アウエルバッハ) - Wikipedia

ja.wikipedia.org

口承 - Wikipedia

ja.wikipedia.org

演劇 - Wikipedia

ja.wikipedia.org

写本 - Wikipedia

ja.wikipedia.org

印刷 - Wikipedia

ja.wikipedia.org

＊

荒唐無稽な想像。荒唐無稽な夢。

人が物語を真似る、物語に似せる、物語に似る、物語に成りきる、物語に成る。

人が書物を真似る、書物に似せる、書物に似る、書物に成りきる、書物に成る。

人が演劇を真似る、演劇に似せる、演劇に似る、演劇に成りきる、演劇に成る。

＊

写字、写経、写本、書写、筆写。書、書道、カリグラフィー。

書物や文字を写す職業。筆耕、写字生、写経生、スクライブ。

写経 - Wikipedia

ja.wikipedia.org

スクライブ - Wikipedia

ja.wikipedia.org

筆耕とは - コトバンク

精選版 日本国語大辞典 - 筆耕の用語解説 - 『名』 写字や清書をすること。それによって報酬を受けること。また、その人。

kotobank.jp

カリグラフィー - Wikipedia

ja.wikipedia.org

＊

言葉と言葉によってつくられている知の総体を信じ、その身振りを模倣し、言葉と知になりきろうとした二人の写す人（写字生・筆耕）についてのお話。

これほど表象に対しての深い洞察に満ちた私は小説を知らない。

ブヴァールとペキュシェは、どちらも独身の写字生である。

二人はまず農業に着手し果樹栽培に乗り出すが、書物だけにもとづく知識は不十分で、大きな損害を被る。科学的知識が欠けていることを痛感した二人は科学や文学の勉強に没頭し、さらに文学・神学とつぎつぎに対象を広げてゆくが、どれも正統的な訓練を受けず書物を読みかじっただけの研究で、失敗ばかりが相次ぐ。しかし二人はともに知的であることを誇って、社会の無知ぶりを嘲笑しつつける

(フロバール作「ブヴァールとペキュシェ」についてのウィキペディアの解説より引用)

ブヴァールとペキュシェ - Wikipedia

ja.wikipedia.org

＊

「『ドン・キホーテ』の著者、ピエール・メナール」(ドン・キホーテのちょしゃピエール・メナール、Pierre Menard, autor del Quijote) は、ホルヘ・ルイス・ボルヘスによる短編集『伝奇集』に収録された作品の一編。ピエール・メナールという 20 世紀の作家がミゲル・デ・セルバンテスになりきるなどの方法で、『ドン・キホーテ』と一字一句同じ作品を作りだそうとした、という設定のもと、セルバンテスの『ドン・キホーテ』とピエール・メナールの『ドン・キホーテ』の比較を文学批評の形式で叙述した短編小説である。(ボルヘス作「『ドン・キホーテ』の著者、ピエール・メナール」についてのウィキペディアの解説より引用)

『ドン・キホーテ』の著者、ピエール・メナール - Wikipedia

ja.wikipedia.org

*真似てつくったものを真似る

荒唐無稽で根拠なしの空想。馬鹿馬鹿しくてがっかりするしかないような話。

似せてつくったものに似せる、真似てつくったものを真似る。馬鹿馬鹿しい、馬鹿も休み休み言え、と言いたくなるような話。

そもそも物語は人がつくったもの。現実なり空想なりを見聞きして、それを「あたかも目の前にあるように」語るのが、物語。

*

物語を模倣する人間についての小説。

物語というジャンルについての復習、小説というジャンルの予習。まさか、小説を壊しているのではないか。できたばかりのジャンルが既に壊れかけている。

ドン・キホーテ - Wikipedia

ja.wikipedia.org

*

物語と小説をまねて、まがい、まげた作品を、さらにまねて、まがい、まげた作品。

この作品をまねる、あるいは無意識にまねることとなる来たるべき作品たち。まがい、まがるしかないのが小説というジャンルの運命であるかのように。似せるもの、似せもの、偽物。

とはいえ、読み物でもある。読み物は読み物を模倣して、書き継がれる。

トリストラム・シャンディ - Wikipedia

*

小説を模倣する人間についての小説。小説と現実を混同してしまう人間についての小説。

小説というジャンルの始まりと洗練。律儀と愚鈍が同義であると誰かに見破られることになる。

小説を模倣するボヴァリーを人は笑えるだろうか。映画を、テレビドラマを、CMを、アニメを、(演じる)俳優を、ストーリーを、ドラマを、キャラクターを、出来事を、事件を、報道を、ディスプレイに映った像やテキストを真似て、引用し、似せて、なりきる私たちは、そっくりな身振りをしていないだろうか。

ボバリズムとは、私たちのことではないか。

フロベールが「ボヴァリー夫人は私だ」と言ったという神話があるが、そう口にすべきなのは、私たち一人ひとりではないのか。ボヴァリー夫人は私たちなのだ。

ボヴァリー夫人 - Wikipedia

ja.wikipedia.org

ボバリズムとは - コトバンク

デジタル大辞泉 - ボバリズムの用語解説 - 《「ボバリズム」とも》フランスの作家フロベールの小説「ボバリー夫人」の主人公

kotobank.jp

*

恋に恋する人間。物語にかたられてしまう人間。小説の登場人物と自分を同一視する人間。

小説や物語を、映画や演劇やテレビドラマやゲームに置き換えても事情はそれほど変わらないのではないか。あるいは、歴史や神話や信仰や哲学や生き方に置き換えても事態はそれほど変わらないのではないか。

仮に、政治や社会現象を、世界や国家や地域を舞台とした、物語や劇としてとらえる
とすれば、これまた事情も事態も同じなのではないだろうか。

＊

登場人物と読者、演じる者と観客、舞台に立つ者とそれを眺める一般人。

人は観客や読者であることを忘れて自分が主人公だと思い込む。そうした観劇の仕方
や読み方を否定するのではない。そもそも否定できるたぐいの問題ではない。

どんな子どもでも、読み聞かされた話に自分を重ねる。それがフィクションというも
のの仕組み。

観るとは、聞くとは、読むとは、そういうことなのだろう。そうした事態に自覚的で
あるかどうかは、趣味や気質や、その時の気分の問題なのかもしれない。

＊うつったものに似せる、うつったものに似てくる

鏡を見る。鏡に見入るのは、誰でも毎日やっさいそうなこと。そこに映っているのは
自分だと疑わない。人前に出て恥ずかしくない顔と格好をしているか確かめる。お化粧
をする。身だしなみを整える。

それだけなのか？ 本当に、そんなふうに単純なものなのだろうか？ 世の中には、変
なことを考える人がいる。変なことを書く人がいる。小説にまで書く人がいる。変だから
書くのか。変だから小説なんて書くのだろうか？ 人が小説に似る。小説が人に似る。

＊

かがみ、鏡、かんがみる、鑑みる。見入る、魅入る、見入られる、魅入られる。うつ
る、映る、移る、入る

鏡の中に入る。

鏡の国のアリス - Wikipedia

ja.wikipedia.org

鏡の中に入る前に言葉という鏡に魅入る。言葉はかがみ、屈み、鏡、鑑。

かがみ、しなり、おれる。屈折、reflection、inflection。

写真術のパイオニアだったルイス・キャロル。数学者・論理学者でもあったルイス・キャロル。その符合と屈折ぶりはただ事ではない。

不思議の国のアリス - Wikipedia

ja.wikipedia.org

屈折 - Wikipedia

ja.wikipedia.org

語形変化 - Wikipedia

ja.wikipedia.org

屈折語 - Wikipedia

ja.wikipedia.org

ルイス・キャロル - Wikipedia

ja.wikipedia.org

*向こうへと落ちていく

水面に映った自分の姿を見る。鏡を見る。かがみ、かがむ、うつる、映る、写る、移る。

おちる、落ちる。墜ちる、墮ちる。

鏡像。姿。反射。自分のようで自分ではない。自分そっくり。自分に似ている。自分ではない。自分とちがう。

こっち、むこう。ここ、あっち。ここ、かなた・あなた・彼方・貴方。

水面、鏡の恐ろしさ。死へといざなう鏡、水面。おちる、落ちる、墜ちる、墜ちる。

落ちていく、向こうへと落ちていく、かなたへと落ちていく。

声がうつる、映る、写る、移る、遷る。響く、こだま、木霊、冚、エコー、空気の振動、音、音響、波。

録音、レコード、蓄音機、拡声器、マイクロホン、スピーカー、再生、再現、再演、反復、模倣。

ナルキッソス - Wikipedia

ja.wikipedia.org

エコー - Wikipedia

ja.wikipedia.org

木霊 - Wikipedia

ja.wikipedia.org

ドリアン・グレイの肖像 - Wikipedia

ja.wikipedia.org

墮天使 - Wikipedia

ja.wikipedia.org

*似る、似せる、成りかわる

似た小説や映画には事欠かない。ある小説を読んでいる、あるいは映画を観ている、あれっというふうに既視感を覚えることは多い。前にも読んだことがあるような話、見たことがあるような身振りや行動、聞いたことのあるような科白、聞いた記憶のあるメロディー。

他人の家に入る。その家にある服を着る。物を食べる。座る、歩く、その辺にある本を読む、トイレに入る。その時、入った人は、その家の主を真似ることになる。

似た話、似た光景、そっくり、デジャビュの洪水。軽い目まいすら覚える。

*

似ている、似せる、似る、成りかわる、成る。

誰かに似ている。その誰かに似せるように努力し、その結果似る。それだけでは済ま

ない。その人物に成りかわるのだ。そしてついにその人に成る。お察しの通り、これはサスペンスであり犯罪小説。怖い話。

そんな小説がある。小説とは異なる部分もあるが映画にもなっている。

河出文庫 太陽がいっぱい

イタリアに行ったまま帰らない息子ディッキーを連れ戻してほしいと富豪に頼まれ、トム・リプリーは旅立つ。その地でディッキーは、
www.kinokuniya.co.jp

この小説にはそっくりな邦訳（翻訳だから似て当然）が二種類あり、映画化された作品も二種類ある。「似ている」や「そっくり」や「既視感」を楽しみたい人——そんな人がいるのか？ ここにいるけど……—には堪らない話。

河出文庫 リプリーをまねた少年

数々の殺人を犯しながらも逃げ切ってきた自由人、トム・リプリー。悠々自適の生活を送る彼の前に、億万長者の家出息子フランクが現
www.kinokuniya.co.jp

まさに目まいのするような話。

*究極の似ている

文学も芸術も映画もスポーツも「似ている」に満ち満ちている。世界は「似ている」に満ち満ちている。

何かを真似て似たものをつくり始めたのはいいが、人はそのつくったものに似たものをどんどんつくることを無意識に覚え、その結果、複製文化どころか、複製文明と大量生産文明を築き上げ、今日にいたるのではないか。

似ているの増殖、似ているの自動生産、大量生産。どうにもとまらない状態。そして世界はどんどん暖かく暑くなっていく。

とはいえ、誰も目まいを起こしたくないから、「似ている」ことには目を向けないし、

耳を傾けないでいる。「似ている」や「そっくり」とは、ほどほどのお付き合いをするべきということか。

＊

「似ている」と「そっくり」——。何かに似ている、そっくりだと思い、何だろ何だろと考えていて、文学も芸術も映画もスポーツ、複製文明と大量生産文明、大量生産と思いをめぐらして、はっとする。

「似ている」と「そっくり」は、お金に似ているし、そっくりなのだ。そして、その身振りは人に似ている、そっくりなのだ。

もし地球外生命体が、地球を見たとするなら、人はあちこちで同じ仕草と動作と表情を演じているように感じるのではないかと思えるくらい、そっくり。多量のさまざまなそっくりを生みだし、そのそっくりとそっくりな身振りを演じている。

自己引用、自己擬態、自己形態模写。ひょっとすると地球外生命体は笑ってしまうかもしれない。ギャグとしか思えなくて。

＊

究極の「似ている」と「そっくり」は紙幣、つまりお金。お金は「似ている」どころか「そっくり」どころか、「同じ・同一」に限りなく近くなければならない。精巧をきわめる。偽造を防ぐため。

ほぼ「同一」だから、計器によって計測可能。人の知覚だけでは真偽は判断できない。

お金は何に似ているのか？ 数字ではないか。抽象度マックスな数字。似ているやそっくりの世界ではなく、同じ・同一の世界。

数字と同じく抽象だから、何にでもかえられる、換えられる、変えられる。こんな便利ですごいものはない。素晴らしいものをつくったものだ。だから、どんどん刷る。

真似てつくる。そっくりにつくる。間違いは許されない。似ていなかったらアウト。下手すると犯罪、いや下手しなくても立派な犯罪。

本物のお金をどんどん刷らなければならない、鑄造しなければならない。印刷機や鑄造機でどんどん刷る。究極の精巧さで複写し複製し、大量生産する。

刷ることができるのは一部の人だけ。政府だけ。正確に言えば、政府の銀行と造幣局だけ。こども銀行は、こどもにだけ許される。

そっくりの本物がどんどん増えていく。実体なんて関係ない。人は存在しないもので動く。おとなのやることはほんまもんやからこわいわ。どんどん増やす、ついでに殖やす。実体はなくてかまわない。そんなところも数字と激似。

私には、印刷されていく紙幣のありようが人の身振りに見えてならない。

*

電子マネー、ポイント、スマホ決済。

記号と化したお金、マネー、紙幣。触ることも見ることも匂いもしない記号。似ているやそっくりのない、おそらく同じや同一もない世界。

虚ろな記号。似ているやそっくりのない記号。実体のない、ふえる増える殖える。

ふえるという身振りだけが空転する。人は存在しないもので動くの進化であり洗練なのか？ その新たな展開なのか？ あるいは、その枠内での展開にすぎないのか？

紙幣のない印刷機、硬貨のない鑄造機。機械の音だけがむなしく響く工場。

何だろう？

何か似ている気がするが、何に似ているのか、思いつかない。ひょっとすると、何にも似ていないのかもしれない。似ているが空転する。なぞるをなぞっている。

なぞるをひたすらなぞる、空（くう）をなぞるといのは、人の身振りそのものではないか。人はなぞるをつくりだし、それを無自覚かつ無意識に模倣しているのではないか。こんな荒唐無稽な空転が永遠に続くわけではない。

人のつくるものは人に似ている/人のつくるものに人は似ていく

「人のつくるものは人に似ている」と「人のつくるものに人は似ていく」は、おそらく同時に起こっている。

見るはつくる。見ることで人は像をうつすというよりつくっている。でっちあげていると言ってもいい。みるにせよ、うつすにせよ、つくるにせよ、そのものではないから。遠隔操作でしかありえない。

「人のつくるものは人に似ている」と「人のつくるものに人は似ていく」は、おそらく同時に起こっている。しかも常に起こっている。

鏡を覗きこむ身振りそのものではないか。鏡の中の自分の像をつくり、それに似る。言語活動と同じではないか。言葉をつくり、言葉に合わせる。表象行動と同じではないか。表象をつくり、表象に擬態する。

表象を信じ、ひいては表象になりきっているとしか思えない。

*

俯瞰、拡大、X線写真、CTやMRIというものは、人がつくったもの。自分の知覚に合わせてつくったもの。見えているから見えていると錯覚しているが、それはつくったもの、でっちあげたもの、似せたものという意味での偽物であり、フィクションにほかならない。または、きわめて精巧な影絵を使った遠隔操作とも言えるかもしれない。

俯瞰や拡大を手にした人は、世界はちょろいと思っているにちがいない。

*大→小 or 大←小

つまり、

*●→・ or ●←・

あるいは、

*全体→部分 or 全体←部分

図式化すると、上のようなイメージになる。ちょろいものだ。だから、俯瞰と拡大をやめられない（置き換えているだけなのに）。そんな映像ばかりを撮るし、そんな映像ばかりが流通し拡散される。

小さくして手玉に取る。ちょろいものだ。「●→・」のことではない、「●→・ or ●←・」というふうに変質して、てなずけるのだ。錯覚を利用しているだけであり、代理=表象を使う限り、「そのもの」にはぜんぜん近づけない。影絵を利用した遠隔操作であることに変わりはない。

フィクションや遠隔操作にも有効性があるのは言うまでもない（有効性があるからこそ人はつくり、利用している）。たとえば、その有効性のおかげで火星の探査が可能になっているし、地球の気温も高くしている。それが科学の可能性であり限界であり、いわば賭けなのだ。結果がどうなるか（どう出るか）はわからない。

(動画省略)

私には、上の動画の羊が、犬が、魚が、鳥が、人の身振りをなぞっているように見えてならない。これとそっくりな動きを人がしているという意味だ。だから、人はこんな映像ばかり撮る。

これらの動画の被写体は人でもある。見ていると同時に見られてもいる。自分を見ているとも言えるだろう。あくまでも見ているのは人。ただし、それはおそらく「見えている」のであり、それを「見ている」とは限らない。

人は自分が関心のあるものしか見ない。自分の関心のあるものとは、人であり、人のような、つまり人に似ているものだ。また見えているものを自分の思いや内に合わせて見えるようにもする。人は人という枠の内では、見ないとも言えるだろう。たいていは、自分に似たものとして見る。しかも、それに気づいていない。気づいてもすぐに忘れる。

人は、つくるものに似ている。人は、内なるものをつくっているからだ。書物や銀幕やスクリーン（ディスプレイ）と同じく、人は内なる仕組みや枠を、外でつくっている。つくり、使っている。利用しているつもりが、利用されているのかもしれない。



人は俯瞰が好きです。たぶん嗜癖しています。何でも視覚化できるだけでなく、何でも俯瞰できると思いついでいる節が見られます。地域地図、世界地図、航空写真、宇宙の画像。集合写真も、俯瞰の一種かもしれません。クラスの全員が映っていれば、全員を把握した気分になれるからです。ちょろいものだ、と。

俯瞰とは、場所、つまり空間だけではありません。時間的な俯瞰もあります。スケジュール表、タイムライン、カレンダー、年表などは、時間を見える化するだけでなく、時間の流れを時系列で視覚化する仕掛けとか仕組みとか装置だといえるでしょう。

地誌・地史、家系図、伝記、国の歴史、世界史、文学史、音楽史、科学史、宗教の歴史というぐあいに、個々の事象にまつわる出来事を時系列で記述しようとする人の試みと情熱には驚かされます。

図書館、博物館、美術館、博覧会も、それぞれが俯瞰の一形態だと見なすことができます。百科事典、辞書、図鑑、博物誌のたぐいも、空間（地球・宇宙）だけでなく時間（歴史・有史以前）の俯瞰を指向していますね。人の飽くなき意志と欲求に驚かされます。

俯瞰という身振りは、人が初めて水面に「かがみ」こんで自分の姿を見た身振り、そして鏡を作り毎日鏡に見入っているという身振りに重なります。自分を見ているつもり。でもその鏡像と映像は自分ではないのです。見えているのは自分ではなく自分の影、幻影なのです。人は自分を肉眼で見ることはできません。ここに「見る・見える・見ない・

見えない」の原点がある気がします。

ところで文学史に出て来る人は特定の人物でしかないことに気づき、啞然としたことを思い出しました。よく考えれば当たり前のことです。文学史に限らず、文学について語るさいに登場する作家たちは、文学の歴史すべてをすくい取った人選ではありえません。

幸運にも同時代や後世の人たちから注目されたりもてはやされた書き手で、その作品が原稿や日記や印刷物として残っている人だけが、いまも作家として取り上げられているにすぎないのです。中にはある時代に評価され、いまは忘れ去られている書き手もいるにちがいありません。

それなのに、あたかもある特定の作家だけが作品を書いていたかのような扱いを受けているのは、よく考えれば不思議な出来事です。

音楽もそうでしょう。科学もそうでしょう。芸術一般もそうであるにちがいありません。選択と排除の結果です。「評価」や「価値」という言葉には、そうした側面があることを忘れてはならないと思います。綺麗事ではないという意味です。

宗教も例外ではありません。異端、刑、罰、悪などの名のもとに、それだけの人や生活がなきものにされた、つまり排除されたことでしょう。その結果が、現在の各宗教のありようであり、かたちなのです。みなさんがご存じのように、排除が続いている地域が世界にはまだあります。

(拙文「人は存在しないもので動く」より引用)

*言葉になれないから、人は言葉になりきり、なりすます

人は言葉を信じ、(言葉にはなれないから)言葉になろうとし、言葉を模倣し、(言葉にはなれないから)言葉になりきる、そしてなりすます。「言葉」を「表象」、「記号」、「鏡像」、「映像」に置き換えても事態は変わらない。

○

*言葉を話すことは、自分以外のものに「なる or なりきる」ことである。

と以前から思っています。「自分以外のもの」って何でしょう？「何でもあり」だとイメージしてください。「自分」以外なら「何でもあり」。では、その「自分」って何でしょうか？ 分かりません。

*分からないようにできている

のです。というか、

*分からないような仕組みになっている

あるいは、

*分からないように仕組みられている

とも言えそうです。なぜなら、

*Aの代わりにAでないものを用いる。

という、言葉の仕組みの大前提があるからです。

なお、

*ヒトは、「○△X」という言葉を作り、その次に「○△Xとは何か？」と問い、思い悩む生物なのである

という、言い方もできますが（ここでは「○△X」が「自分・あたし・おいら・わい」に該当します）、このあまりにも身も蓋もない言い方を採用すると、ヒトのお馬鹿さんぶりおよびお茶目ぶりが露呈して、話が終わってしまう恐れがあるので、ここでは扱いません。

さて、人類というレベルでのヒトという種が、物心がついたころからずっと「自分って何」と考えてきた。それこそ数えきれないたくさんのヒトたちが、この惑星のあちこちで「私って何」と考えてきたに違いありません。それなのに、究極的な結論が出たという話は見聞きしたことがありません。というか、物好きな人たちがそれぞれ勝手に結論を出してきたというのが、正確な言い方かもしれません。いずれにせよ、「決定打＝コンセンサスを得られるだけの結論」は出なかった。だから、「自分とは何か？」という問

いは保留するしかありません。

「自分とは何か」を保留するのですから、「自分以外のもの」＝「何でもあり」＝「森羅万象」＝「世界」＝「宇宙」とは何かも、きっと保留するしかないでしょう。個人的な意見を述べるなら、「自分」も「自分以外のもの＝何でもあり」も、「まぼろし」なのではないか、と考えています。つまり、

*すべては、まぼろしである。言葉自体も、言葉が「指し示している＝意味している」とされるものごとや現象も、すべてがまぼろしである。かもね。

という感じです。これは、このブログでよく述べている、

*Aの代わりにAでないものを用いる。

という、言葉の仕組みの大前提と深くかかわっています。

*

*言葉話すということは、ヒトが一時的に、あるいは部分的に自分以外のものに「なる」ことである。

と、「なる (6)」で書きましたが、またもや変更を加えます。

*言葉話すということは、ヒトが一時的に、あるいは部分的に自分以外のものに「なる・なりきる」ことである。

「なる」に「なりきる」を付け加えただけですが、これって「自然の成り行き」をヒトが演じるという意味を込めた駄目押しのつもりなんです。「なりきる」という言い方が、気に入ってしまいました。いかにも「人間ぼい＝ヒト特有だ」というニュアンスがある」言い方だと思いませんか？

ところで、

*言葉話すということは、ヒトが一時的に、あるいは部分的に自分以外のものに「な

る・なりきる」ことである。

のは、言葉が外からやって来るものだからなのですが、このことについてはいつか別の場で書きます。

*

「かわる・かえる」という言葉も「かわりはてる」という「コンプリート＝完全版」にまで至ってしまうと、「自然の成り行き」という感じは希薄な気がします。誰かの企みやせっぱ詰まった事情によって、やむを得ずそうってしまったあげくに、「元にはかえることができない」＝「もどれない」感じがしてなりません。

さて、「なる」のコンプリート＝完全版である「なりきる」について考えてみましょう。この言葉は、さきほど述べたように、ヒト独特の行為という気がします。「思い込む」とかなりかぶる＝ダブる＝重なる面があるからかもしれません。

唐突ですが、ここで書いてきた二つのフレーズを合体させてみます。

* 「まぼろしとは、ヒトが知覚している森羅万象＝世界＝宇宙である」

+ or ☉

「言葉を話すということは、ヒトが一時的に、あるいは部分的に自分以外のものに「なる・なりきる」ことである」

=

「ヒトは言葉を使用することによって、自らが知覚している森羅万象＝世界＝宇宙＝まぼろしに、一時的に、あるいは部分的に「なる・なりきる」

*

「なりきる」は、まず、不自然なことをするという意識から出発します。しかし、その意識が薄れます。ほとんどなくなるところまでいきます。「思い込んでいる」からです。

もっとも、「思い込み」には程度の差はあると思われますけど。

*「なりきる」とは、「かわる・かえる or 化ける or 演じる = 装う」という言い方の「代わり」に、「なる」という別の言い方を「当てる」=「こじつける」ことである。

という考え方もできそうです。ややこしくなるのを覚悟で、もっと詳しく言うと、

*「なりきる」とは、「かわる・かえる or 化ける or 演じる = 装う」という言い方の「代わり」に、「なる」という別の言い方を意識的に「当てる」=「こじつける」と同時に、「なる⇒なった」という状態にほぼ無意識のうちに陥ることである。

とも言えそうな気がします。自己催眠、錯覚、酩酊、夢想、妄想、忘却などという言葉が頭に浮かびますが、そうしたラベル=レッテルは、ここではあまり重要ではないと思われるので、深入りするのはやめておきます。大切なのは、「なりきる」が「思い込む」から強くバックアップ=サポートされていることです。

(拙文「なる」より引用)

*

ややこしい箇所を引用してごめんなさい。

ものすごく簡単にまとめてみます。

よく「父親(母親)になる」とか「父親(母親)らしくする」とか「長男(長女)だから長男(長女)らしくしなさい」と言いますね。子どもらしく、教師らしく、生徒らしく、お客らしく、店長らしく、課長らしく、人間らしく、〇〇教徒らしく、〇〇市の市民らしく、日本人らしく……。

「父親が父親になる」この場合の、前者は父親という言葉=レッテル=表象を貼られた生身の人間で、後者は父親という言葉=レッテル=表象を信じた=なりきった生の人間なのです。人は言葉にはなれません。だから、父親という辞書の語義、父親像というイメージになりきるのです。「なりきる」から「なりすます」はほんの一步です。

なれないからなりきるところが大切です。つまりフィクションであり物語なのです。この「なりきる」を「信じる」とか「まねる」とか「引用する」とか「擬態する」と置き換えても事態は変わりません（人は言葉を獲得して以来、言葉と現実を混同しつづけているとも言えるでしょう）。見方が変わるだけです。「見+方」です。

話は飛躍しますが、人がなりきるのは「父親」という、人の属性を示す言葉だけではありません。リングでも、犬でも、スズメでも、ミジンコでも、茶碗でも、路傍の石でも何でもいいのです。ミジンコを、民主主義、科学、AI、客観、真理、不偏、愛、神と置き換えると、事の重大さを感じていただけるのではないのでしょうか。

こういう言葉に接した瞬間、人はその言葉を信じて、その言葉になりきるのです。それが言葉を「聞く・読む・話す・書く・理解する」であり、たとえその言葉に反論したり批判をするさいにも、まず受容するという形での信じるがあるのです。

＊

ちょっと廉さん、冗談は顔だけにしてよ。私は言葉と現実を混同なんてしていません。口紅という物と口紅という言葉が違うことくらいわかっています――。

こんな幻聴が聞こえたので、補足説明をします。例によって自己引用させてください。自己引用は、note でピン芸人をしている私の芸風なのです。

○

個人的に好きだし、すごいと思うのは、以下の部分です。

Melody Fair, remember you're only a woman.

Melody Fair, remember you're only a girl.

名前を呼ぶ、最初の二語で盛り上がり、次第に抑えていき最後はつぶやくように歌われる箇所です。

この二行では、最後の a woman と a girl だけが違います。あとは同じ。この繰り返し

と差異の妙は見事だと思います。

woman と girl は反義語であると同時に類義語でもあります。つまり、人という存在は多面体（プリズム）なのです。この曖昧さ（両義性・多様性）が詩（歌詞）となり人を惑わせるのです。

【※時と場合と場所によって、お母さん、きみ、あなた、おまえ、あいつ、あの人、お姉さん、〇〇さん、看護師、患者、客、あのう……、被疑者、被害者、加害者、被告、原告、「女」・「女性」・「Aさん」、被災者、保護者、障がい者、病人と呼ばれうる人間は、多層的多重的な存在とも言えます。

人をたった一つの語というレッテルで指すことは不可能なのであり、複雑な現実を反映していないのです。こうした現実を失念しているために起こる誤解や苦しみや不和や争いは多いと思われれます。

たとえば、ある時点であなたがいる状況とあなたがいただいている思いと、かけ離れたレッテルを誰かがあなたに見ている、あるいは重ねているときに、すれ違いが起こります。このすれ違いがある限り、共感も同意も実のある対話も生まれません。同情すら生じないにちがひありません。】

woman と girl に相当する日本語で見てみましょう。

女の人－女の子（大和言葉）

おんな－むすめ（大和言葉）

女性－少女（漢語・唐言葉系）

メロディー・フェア、髪を櫛でとかしてみたらどうかな？

君は綺麗にだってなれるんだよ。

だって、

メロディー・フェア、覚えておきなさい、君はただの女なんだよ。

メロディー・フェア、覚えておきなさい、君はただの娘なんだよ。

（拙文「この歌では女の子の名前自体が詩なのです【言葉は魔法】」より引用）

○

あなたはあなたなのですが、人である限り、いろいろな言葉のレッテルを貼られる運

命にあります。言葉が現実を反映していないとか、言葉が必ずしも当たり前のものではないと感じるのは、たとえば自分の意志や意思に反して、不本意なレッテルを貼られた時なのです。とてもじゃないけど自分は母親というレッテルを貼られたくないという女性がいても不思議ではありません。

「おんな」と言われるのが大嫌いな人を知っていますが、言葉というレッテルにとっても敏感な人でした。森鷗外の小説についておしゃべりしていたとき、「娘」という言葉に抵抗があるとも言っていました。当時の私と同じく翻訳家志望だったその人は、鷗外の『舞姫』における「彼」という人称代名詞についても卓抜な意見を述べていらっしました。実は、いま引用した記事は、その女性を思い出しながら書いたのです。

＊

話を戻します。

「父親が父親になる」この場合の、前者は父親という言葉＝レッテル＝表象を貼られた生身の人間で、後者は父親という言葉＝レッテル＝表象を信じた＝なりきった生の人間なのです。人は言葉にはなれません。だから、父親という辞書の語義、父親像というイメージになりきるのです。「なりきる」から「なりすます」はほんの一步です。

なれないからなりきるというところが大切です。つまりフィクションであり物語なのです。この「なりきる」を「信じる」とか「まねる」とか「引用する」とか「擬態する」と置き換えても事態は変わりません（人は言葉を獲得して以来、言葉と現実を混同しつづけているとも言えるでしょう）。見方が変わるだけです。「見+方」です。

話は飛躍しますが、人がなりきるのは「父親」という、人の属性を示す言葉だけではありません。リンゴでも、犬でも、スズメでも、ミジンコでも、茶碗でも、路傍の石でも何でもいいのです。ミジンコを、民主主義、科学、AI、客観、真理、不偏、愛、神——「神」とは人の口癖だとも言えます、もちろんいま挙げたどの言葉もそうです、そういうものがあるのではなく、そう口にするを人は好むという意味です——と置き換えると、事の重大さを感じていただけるのではないのでしょうか。

こういう言葉に接した瞬間、人はその言葉を信じて、その言葉になりきるのです。それが言葉を「聞く・読む・話す・書く・理解する」であり、たとえその言葉に反論したり批判をするさいにも、まず受容するという形での信じるがあるのです。

という話でしたね。

いずれにせよ、ややこしいですね。いま挙げた「言葉」を「歌」だと思ってください。歌を歌うとき、人はその歌になりきります。一種の催眠状態に入るわけです。けっこうな長さの時間で、旋律や歌詞やそのイメージになりることができますね。言葉をつかうときには、その「なりきる」が一瞬に起きると考えてもかまわない感じがします。

言葉をつかうとき、人は一時的にその言葉の語義やイメージを信じて、それになりきるのです。言葉を聞く、言葉を見る、言葉を読む、言葉を話す、言葉を書く。そうしたときに、人はその言葉になりきるのです。そして、なりすます。なりきり、なりすまさない限り、その言葉は認識されないという感じ。

人は同じことと同じものを繰り返しかえし目にしたり耳にすると、それが普通であり当然であると思ひこむ、つまり信じこむとはよく言われていますね。「愛」も「ミジンコ」も「資本主義」も「真実」も「リンゴ」も「民主主義」も「客観」という言葉は、本に書いてあるし、テレビやネット上で飛び交っているし、辞書にはその語義が書いてある。

おびたしい数の「愛」（という言葉）が地球上にあるのです。これは、引用と複製と翻訳と拡散のおかげでそうなっているのです。これを信じないほうが無理と言うべきでしょう。つまり、言葉と現実を混同するなというほうが無理という意味です。

そうなのです。お気づきになったとおり、私たちの一人ひとりが、上で触れたブヴァールとペキュシェなのです。私たちはボヴァリー夫人であるだけでなく、ブヴァールとペキュシェでもあるのです。

表象であるはずの言葉を信じて（「信じる」とは人が考えているよりもずっと恐ろしい行為なのです、人にはこれしかないというほど人にとって本質的な行為なのです）、言葉になりきらない限り、人はこんな文明を築きあげることはできなかつたにちがいない。そんな気がしてなりません。

気がするだけです。この「なりきる」を比喻やレトリックであると取っていただいてもかまいません。というか、たぶん、そうなのでしょう。

ところで、「人が言葉になりきる」とか「なりすます」という荒唐無稽な、つまりありえない言葉をお読みになって、一時的にでもその言葉の身振りになりきりませんでしたか。あるいは、その言葉の身振りをなぞりませんでしたか。つまり、何らかのありえない馬鹿げたイメージや光景が一瞬浮かびませんでしたか。もしそんなことがあったとすれば、それが「言葉になりきる」なのかもしれません。

うつせみのあなたに 断章編・その2

著 星野廉

制作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
